

1 「撰集抄」

せんじゅうしょう

(ファイルして保存しよう。)

【出題大学】鹿児島大学（前期）

解答と採点基準

問1 B Ⅱすぐに（広隆寺から）退出した

C Ⅱ熱心に申し上げますので

D Ⅱ（検校が伊勢を）大切に世話をすることはこの上ない

問2 俗世で生きるのに苦勞するの<sup>A</sup>も、身体<sup>B</sup>の病と同様に病氣<sup>C</sup>（のようなもの）だよ

A がなければ全体0。

A Ⅱ5 「世間」「世の中」で「過ごす」なども可。

B Ⅱ5 「一般の病」「普通の病」も可。ただしその言及がなく「同じ病氣」だけのものは不可。

問3 伊勢が古堂で仏を拝んでいると、輿や馬で連れ立った一行が通りかかり、

◆ 本文解説 ◆

◆ 中世の説話 ◆

いわゆる歌徳説話。歌人の伊勢が世の中を生きづらく思い、太秦に籠って折り、歌を詠んだところ、夢に仏が現れてお告げを下す。その後ある古堂で八幡宮の検校と出会って（実は、検校も仏のお告げに導かれてやってきたのだが）一緒に来るように誘われ、彼の妻となって幸せに暮らしたという話。

問3 以外は現代語訳で、それも基本的な単語がほとんどであるため、入門編として良い問題。問3も要約の練習として使える良問である。

◆ 考察 ◆

● 問1（現代語訳）

B Ⅱ品詞分解と逐語訳を示す。

副	ダ下二用・謙讓	完終
やがて	罷り出で	ぬ
詠すぐに	（広隆寺から）退出し	た

「やがて」は「すぐに」「そのまま」という意味の頻出副詞。時間的に捉える場合は前者、空間的に捉える場合は後者の訳を選ぶ。ここは前者。「罷り出つ」は

「罷る」（「行く・来」の謙讓語）に「出づ」が付いた複合動詞。「退出する」という訳は、一見謙讓語の訳に見えないが、「罷る」の訳として通用するので覚えておくと便利である。「ぬ」は文末で上に係助詞もないので終止形。ということは、打消の助動詞「ず」の連体形ではなくて、完了の助動詞「ぬ」の終止形である。

「広隆寺から」と補えればなおよい。  
C Ⅱ品詞分解と逐語訳を示す。

形動ナリ用	ヤ下二用・謙讓	ラ変已下・寧（補）	接助
ねんごろに	きこえ	侍れ	ば
詠熱心に	申し上げ	ます	ので

「ねんごろなり」は「熱心だ」「親切だ」「親しみ深い」などの意味を表す形容動詞。「熱心だ」の意味で出ることが多いので、まずこの訳を覚えよう。「きこゆ」は「聞こえる」という意味の一般動詞もあるが、そこから派生して「言ふ」の謙讓語や謙讓の補助動詞として頻出する語。「聞」の字を使うため「聞く」の謙讓語と誤読する者も多いので注意すること。この動詞に続く「侍り」は補助動詞なので丁寧語。已然形＋接続助詞「ば」は確定条件を表す。「〜と・ごろ」か「〜ので」か、ふさわしい訳を選ぼう。

D Ⅱ品詞分解と逐語訳を示す。

カ四体	名	形・終
いつきかしづく	こと	限りなし
詠（検校が伊勢を）大切に世話をすることは	この上ない	

「いつく」「かしづく」とともに「大切に世話をする」意味の動詞。主に「親が子を」の文脈で使われるが、ここのように「男が女を」の文脈でも使う。前者なら「養育する（育てる）」、後者なら「世話をする」と訳す。ここも字数に余裕があれば、「検校が伊勢を」と人物を補えればなおよい。

問2（現代語訳）

まず、「わづらふ」が補助動詞的に使われた場合は「なかなか〜できない」

主の八幡宮の検校が、仏のお告げがあったと言って、自分の家に一緒に来るように彼女を熱心に誘ったこと。

A Ⅱ2 「伊勢が」と主語を明示すること。

B Ⅱ2 「八幡宮の検校が通りかかり」とまとめてもよい。

C Ⅱ6 「仏のお告げ」に触れていない場合は減点2。

問4 顔立ちが優美で、氣立てが（格別に）すばらしい（ような）人がいればなあ

A Ⅱ4 「みめかたち」「あてなり」の不備は各減点2。

B Ⅱ4 「心ざま」「わりなし」の不備は各減点2。

C Ⅱ2

するのに困る」の意味である。傍線部の直訳は「世の中にいるのに困るのも同じ病氣だよ」となる。次に、肉付けに入ろう。ポイントは二つ。

- 1 「世の中にいる」とは？
- 2 「同じ病氣」とは？

1 は設問にも親切に「あり」の意味に注意して」と指示があるので、必ず意味をはっきりさせなくてはならない。入試で「世」や「世の中」が問われるときは「男女の仲（夫婦仲）」の意味であることが多いが、傍線部の前の「世の中過ぎわびて、都にも住み浮かれ（注1に「一箇所に落ち着くことができずあちこちさすらって」と訳が書いてある）」などとして、世に住むべきたづき（＝手段・方法）もなく侍りけるが」（一行目）を見ても、男女関係ではなく、普通の「世の中」つまり「世間」「俗世」の意味で捉えるべきであろう。となると、「世の中にありわづらふ」は、一行目の「世の中過ぎわび」とほとんど同意（「わぶ」も補助動詞的に使われた場合、「わづらふ」とほぼ同じ意味）であり、「世間で過ごすのに困る」「俗世で生きるのに苦勞する」という意味でよいと判断できる。

2 については、今すでに「病氣」の主体が「俗世で生きる苦勞」だと解明したが、「苦勞」は一般的に「病氣」と呼ばないので暗喩だとわかる。最後に「同じ」は何と同じかに言及する必要があるが、これは「普通の病氣と」「身体<sup>やま</sup>の病と」と補う。以上を踏まえて訳を完成させる。

◎ 問3（文章全体の理解）

要約問題。波線部の後の「ある古堂の…ねんごろにきこえ侍れば」（6～9行目）までをまとめる。飾りを取り払って骨格だけ残すと、次の三つのパーツになる。

- 1 「ある古堂の人もなくて侍りけるに立ち入り、仏拝み奉りなどするほどに」伊勢が人けのない古堂で仏を拝んでいた時
- 2 「輿馬に乗り連れて、ゆゆしげなる人の通り侍りけるが、…主と思しき僧」輿や馬で連れ立った立派な一行が通りかかり、その主人と思われる僧（＝八幡宮の検校↑後の記述から具体化しておきたい）が

3 「『：仏の御告げ侍りて申すになん。我が住むかたさまをも御覽ぜられ侍れかし』とねんごろにきこえ侍れば」

仏のお告げがあったと言い、自分の家に来るよう伊勢を熱心に誘った

解答欄の大きさに合わせるために、さらに枝葉を切ってまとめたい。

問4（現代語訳）

名	格助	形動ナリ用	名	格助
みめかたち	の	あてやかに、	心ざま	の
訳 顔立ち	が	優美で、	氣立て	が
形ク末	婉・体	名	終助(願望)	
わりなから	ん	人	がな	
すばらしい	(よくな)	人	がいればなあ	

「かたち」は基本「容貌・顔立ち」。「みめ」は「見た目」のことだが「顔立ち」という訳もあるのでまとめて訳す。「あてやかなり」は「高貴だ・優美だ・上品だ」などの意の形容動詞。「心ざま」は外見をいう「かたち」に対して内面、つまり「性格・氣立て」のこと。形容詞「わりなし」は「道理に合わない」が基本の意味だが、そのままだと奇妙な訳になるので「道理に合わないほどくだ」と捉えて「(格別に) くだ」の訳を文脈から当てはめる。ここでは「すばらしい」としたが、褒め言葉であればよい。「ん」は体言に続くので、見た瞬間に婉曲と判断すること。最後の「がな」は「もが」「もがな」「もがも」などと同じく、「があればよい(なあ)・くがほしい(なあ)」と訳す願望の終助詞。

現代語訳

昔、伊勢と申し上げた歌人の女性が、世の中を過こしにくく思って、都でも一箇所に落ち着くことができずあちこちさすらいなどして、世の中で生きることのできる手段もなかったのですが、太秦（の広隆寺）に籠って、心を澄ましながら、勤行などして、このように、

南無、薬師（如来）よ、（私を）哀れみなさってください。俗世<sup>問2</sup>で生きるのに苦勞するの、（身体<sup>問1</sup>の病と）同様に病氣（のよくなもの）だよ。

と詠みましたところ、仏殿が（歌に感応して）動きまじした。その夜の明け方の夢に、高貴な僧が（出て）いらっしやって、「お前の歌が身にしみて（私には）思われ（なさ）るので、生活のよりどころを得ることができるとあるでしょう。この明け方、急いで（ここから）退出してしまえ。もし道中で思いがけないことがありましても、否定する氣持<sup>問1</sup>ちを持ってはならない」と（おっしゃるのを）見た。ありがたさが恐れ多く思われて、すぐに（広隆寺から）退出した。なんとなく苦しいので、ある古堂で人けなく建<sup>問1</sup>つていた古堂に立ち入り、仏を拝み申し上げるうちに、興や馬に連れ立って乗って、立派な様子の人が通りかかりましたが、何と思ったのでしょうか、この堂に入りますので、伊勢はどうしようもなくて、後ろの方へ行きますと、この（一行の）中で主人と思われる僧が、追って来て、「このようなことは、申し上げるにつけても遠慮がありますが、仏の御告<sup>問1</sup>げがありまして申し上げますのです。私が住む所の様子を御覽になつてくださいよ」と熱心に申し上げますので、（伊勢は、夢のお告げは）これだろう、そむくことは、仏が思いなさることも恐ろしく思われましたので、誘いに乗ってしまった。（僧は）格別に喜んで、（伊勢を）興に乗せて男山に伴って帰り着きました。（僧は、実は）八幡宮の檢校でした。（檢校が伊勢を）大切に世話することはこの上ない。子どもを、たくさんもうけたので、（檢校は、伊勢を）ほかと区別しようもない（格別にいいらしい）ものだと思っていました。この檢校も、長年慣れ親しんでいました妻と（死に）別れて、「顔立ちが優美で、氣立てが（格別に）すばらしい（よくな）人がいればなあ」と思い嘆いていたところ、この伊勢を得たので、望みどおりでありました。

作品（作者）解説

仏教説話集。九卷。十三世紀後半に成立したとされる。編者未詳だが、明治時代までは西行<sup>さいぎょう</sup>が書いた書として読まれてきた。その後の研究で西行ではないことが明らかになったが、芭蕉や上田秋成なども西行が書いたものとして受容していたようである。説話に対する編者の見解を述べた部分が多いのが特徴の一つである。

入試情報・解答時間

国語90分 大問3問（論理・古文・漢文）

2 「古来風艸抄」

こらいふうていしょう

(ファイルして保存しよう。)

藤原俊成

ふじわらのしゅんぜい(としなり)

【出題大学】 滋賀大学 経済・教育学部 (前期)

解答と採点基準

問1 (a)Ⅱ主格の格助詞

(b)Ⅱサ行変格活用動詞「す」の未然形

(c)Ⅱ断定の助動詞「なり」の連用形

問2 年<sup>A</sup>老いて眉毛が白くなった<sup>B</sup> 老法師の目と、京極の御息所の視線が合った<sup>C</sup> とうとう。

AⅡ4
BⅡ3 「老法師（古法師）」がなければ不可。」
CⅡ3 「御息所」がなければ不可。」

問3 (ア)Ⅱ長年の仏道修行がきつと無駄になるようなことが悲しいので

(イ)Ⅱこの物語はとんでもない作り話であるはずだが

問4 (1)Ⅱ老法師（古法師）が

(2)Ⅱ京極の御息所に対して

本文解説

◆中世の歌論書

古歌の伝承と『万葉集』の関係について述べた箇所。第一段で『俊頼髓脳』の見、第二段で能因法師による京極の御息所と老法師の物語と意見が挙げられ、第三段で筆者の考えが示される。わかりやすい構成であるから、問4・問5では特に、求められる内容をすべて盛り込み解答を完成させたい。

考察

●問1（文法）

であるから、「どういうことであろうか。」と訳すことのできる部分。断定の助動詞「なり」の連用形「に」に係助詞が付いた形「にか」「にや」も）は、訳し方もあわせて覚えておこう。

問2（文意の理解）

人物関係と比喩表現の理解が問われている。傍線部の直前に「古法師の」とあるので、「**眉の霜**」は**老法師の年老いて白くなった眉毛のこと**である。また、傍線部を含む文は「その（Ⅱ京極の）御息所の」で始まるので、老法師が目を含めた相手として、「京極の御息所」も入れておきたい。傍線部の直後「Ⅱいと難しきものにも見えぬるかな」と思ひ込んで引き入れさせ給ひにけり（Ⅱ『ひどく気味が悪いものに顔を見られたことよ』とお思ひになって牛車の中に引きこもってしまった）の部分からも確かめられる。

問3（現代語訳）

(ア)Ⅱ「年ごろ」「行ひ」「徒らなり」の基本単語の意味と、「なりなんこと」の訳し方がポイント。特に「行ひ」は老法師の発言中にあるので「仏道修行」の意。「徒らにならんこと」を品詞分解すると、

形動ナリ用	ラ四用	強末	婉体	名
徒らに	なり	な	ん	こと

これを踏まえて、「**きつと無駄になるようなこと**」と訳す。「悲しさに」はこの後に自然に続くよう、「悲しいので」と訳すのが適当である。

(イ)Ⅱ「空事」は「作り話」「偽り」などの意。「空事なるべきを」を品詞分解すると、

名	断体	当体	接助
空事	なる	べき	を

「を」は**逆接**で訳すとこの後の文意につながるので、「**作り話であるはずだが**」と訳す。

(ファイルして保存しよう。)

藤原俊成

ふじわらのしゅんぜい(としなり)

【出題大学】 滋賀大学 経済・教育学部 (前期)

(3)Ⅱ**再び**のお目通りが**な**ったうえに、**手**に**触**れること**ま**で許されて、**あ**りがたさで**生**命力が強まったという内容。

A・B・Cが揃っていなければ全体0。

AⅡ2／BⅡ4

CⅡ4 「寿命が延びた」「長生きできる」なども可。」

問5 『万葉集』に載っていてもいなくても、その場の状況に合致している場合は古歌をそのまま詠出することがあり、老法師は御息所に手を与えられたことに感動し、どうしても「**手にとるからに**」と**言**いたくてこの古歌を思い出したの**だ**ろうと推測したから。

Bがなければ全体0。

AⅡ5 「同内容可。」

BⅡ5 「**手にとるからに**」と**言**いたい」がなければ不可。」

(a)Ⅱ「老法師の腰二重なるが、杖にすがりて参りて（Ⅱ老法師でひどく腰の曲がった人が、杖にすがって参上して）」を一まとまりの部分で読み、まず「老法師の」の「の」が**同格であることに気づけたかどうか**のポイント。そこに気づけば、「が」の上に「人」を補って解釈することになるので、**主格の格助詞**だと確定する。

(b)Ⅱ「もし助けもやせさせおはします（Ⅱもしかしてお助けになってくださるか）」の「**させおはします**」が**最高敬語**であると気づけば、**動詞**とわかる。助動詞「**さす**」が接続しているので未然形。

(c)Ⅱ「いかなることにか。」という、結びの語「あらん」などが省略された形

問4（文意の理解）

(1)・(2)Ⅱ傍線部の直後の会話文「この世に生まれ待りて九十年に及び侍りぬるに、またかばかりの喜び侍らず。…（Ⅱこの世に生まれまして九十年に届きました、ほかにこれほどの喜びはありません。…）」から、歌を詠みかけたのは「老法師（古法師）」、詠みかけた相手は「京極の御息所」。

(3)Ⅱ老法師が御息所に伝えたかった内容は、「手にとるからにゆらぐ玉の緒（Ⅱ手にとると同時に、触れる者の生命力が強まる）」。傍線部の前に、「申すに従ひて御手をさし出だし給へりけるを、我が額に当てて（Ⅱ申し上げるのに従って御手をさし出して与えなされたところ、自分の額に当てて）」とある。老法師が**御息所の手をとって額に当てること**で、**老法師の生命力が強まったⅡ寿命が延びた**、ということになる。もう一度お目にかかりたい、と言って御息所のもとへやって来たこともあわせて答えられると、状況把握がしつかりできている解答になる。

◎問5（文章全体の理解）

筆者の考えは、傍線部（Ⅱこの歌は、たとえ『万葉集』に載っていてもいなくても、確かに昔の歌であるようです）を含む段落に述べられている。その理由として、次の部分が挙げられる。

・「今あることのそのことに叶ひたる時は、詠じ出づることはある事にや（25行目）Ⅱ今起こっていることがその古歌に詠まれた状況と合致している時は、そのまま詠出するの**は**あることではないだろうか

・「さやうの聖などの、この古歌を知りて、『手にとるからに』といはんために思ひ出でてかくいひたらん（27行目）Ⅱそのような聖などが、この古歌を知っていて、『手にとるからに』と**言**うために思ひ出してこのように詠んだ

「初春の初子の今日」や「玉箒」といった要素は関係なく、「手にとるからにゆらぐ玉の緒」が、この志賀の聖（Ⅱ老法師）と京極の御息所の物語には必要だったということ踏まえて、この二点をまとめる。



現代語訳

春の初めの、正月の最初の子の日の今日の、蚕室の床を掃く儀式に用いるほうきは  
手にとると同時に、触れる者の生命力が強まる。

「この歌は、『万葉集』に入っている本もあり、また、載っていない本もある」と申し上げるようだ。このことを、源俊賴の『俊賴髓腦』に申し上げているのは、『玉箒』というのは、春の初子の日に、小松を引き揃えてほうきに作って、田舎の人の家で蚕を飼う建物を、子午の年に誕生した女性で、蚕を飼うのによさそうな女性を飼女と名付けて、その女性に（その箒で床を）最初に掃かせて、祝いの言葉として歌う歌であると言い伝えている」と申し上げる。

能因法師が大納言経信卿に語ったこととして申し上げているのは、「このことは、昔、京極の御息所と申し上げる方は、本院の大臣藤原時平の娘である。（中略）その御息所が、昔、三井寺のそばに志賀寺といって、（仏が）格別に靈験を現しなさる所があるといって（その寺へ）お参りになった時に、その寺が近くなって辺りの様子が興味深く思われなさったので、牛車の窓の簾を広々と巻き上げて、琵琶湖のほうなどを見やりなさった時に、すぐ近くの岸辺にあされるほどひどい様子の草庵があったが、（その庵の）窓の内側から、格別に老い衰えた老法師が白い眉の下から目を合わせなさったので、『ひどく気味が悪いものに（顔を）見られたことよ』と（御息所は）お思いいなっていて（牛車の中に）引きこもってしまわれた。さて、（寺から）お帰りになってのち、老法師でひどく腰の曲がった人が、杖にすがって参上して、『先ほど』お目にかかりました（私）老法師が参上した」と申し上げたところ、しばらくは（それを）聞き入れる人もいなかったけれども、一日中立って何度も言ったので、『このようなことを申し上げる者があります』と（女房が御息所に）申し上げたところ、『何かそうしなければならないわけがあるのだろう』と（御息所は）おっしゃって、南側の日隠しの間に（その老法師を）お呼び寄せになって、『どういうことか』とお尋ねになったところ、（老法師は）少しの間躊躇して、『（私は）志賀にここ七十年余りほどおりまして、ひたすら仏の道に入り成仏するための修行に努めておりますうちに、（あなたに）思いがけないお目通りをいたして、どうにもほかのことが考えられず、もう一度お目にかかりたいという気持ちだけがありまして、寝ますにも寝られず、（かといって）起きても心安らかに座っていただけさるかと思つて、杖にすがつて泣く泣く参上しておるのです』と申し上げたので、『たいへん簡単なことだ』と（御息所は）おっしゃって、御簾を少し上げて（姿を）お見せになったところ、（老法師の）顔

作品（作者）解説

鎌倉時代初期、式子内親王の依頼により、藤原俊成が著した歌論書。一一九七年成立の初撰本と一二〇一年成立の再撰本がある。俊成は、和歌の歴史、歌風の変遷を記し、和歌を例示することによって、秀歌の基本を身につけさせようとした。上巻は『万葉集』、下巻は『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』の例歌が並べられている。

入試情報・解答時間

国語90分 大問3問（論理・古文・漢文）

の数は数もわからない（ほど多く）、眉は白い雪などにもまさつて（真っ白で）、すべてが  
老い変貌して、人間とも思われない。本当に恐ろしそうな様子で（御息所を）じっと見つめて、しばらくして、『その（あなたの）御手を少しの間（私に）お与えください』と（老法師が）申し上げたので、（御息所は老法師が）申し上げるのに従つて御手をさし出して与えなさったところ、（老法師は）自分の額に当てて、なにもかも忘れて泣き入つて、あの『手にとるからに』という歌を（御息所に）詠み申し上げて、『この世に生まれまして九十年に届きましたが、ほかにこれほどの喜びはありません。もしこの縁によつて（私が）願ひどおりに阿弥陀の極楽浄土に往生しましたならば、必ず（あなたを）導いて差し上げよう。あるいは、（もしあなたが先に）浄土に往生なさいましたならば、（私を）きつとお導きください』と申し上げて泣いたので、（御息所は 御返歌に、

よろしい、それなら仏道の導きで私を案内してくれ。（そのめでたく長らえたあなた（の）生命によつて。

とおっしゃった。（老法師は）これを聞いて、喜びながら帰つたと言っているが、この『手にとるからに』の歌は『万葉集』の二十巻に載っているので、この物語はとんでもない作り話であるはずだが、『万葉集』のよい伝本というのは、二十巻の歌がもう四十首ほどないのである。その本には、この歌が見えない。どういうことであろうか。よくわからない』と書いている。

このことを考えますと、この歌は、たとえ『万葉集』に載っていてもいなくても、確かに昔の歌であるようです。（しかし後世の人が）その古歌を、今起こっていることがその古歌に（詠まれた状況と）合致している時は、（そのまま）詠出するのはあることではないだろうか。あの志賀の聖（＝老法師）が新しく詠んだのならば、「手にとるからに」と表現することは当然であっても、その参上した日が、もし春の初めの初子の日の当日でもなかったら、玉箒に特に事寄せようと思ひもしなかったのではないだろうか。かえつてそのような聖などが、この古歌を知っていて、「手にとるからに」と言うために思い出してこのように詠んだとしたら、（かえつて）玉箒ももう少しその場の状況にふさわしいのではないだろうか。

3 「中務内侍日記」

なかつかさのないしにつき

ふじわらのつねこ  
藤原経子 【出題大学】 奈良女子大学 文・生活環境学部（前期）

解答と採点基準

問1 a ㊦ 噂にだけは常に聞いている

「常に」は「以前から」「長い間」「ずっと」なども可。

b ㊦ 通りではなく都ばかりが心にとまった

限定の意味がなければ減点2。過去の助動詞の訳出がなければ減点1。

c ㊦ 姿も流れると見える月

「姿」は「光」でも可。「見える」は「思われる」でも可。

問2 舟に乘ろうとするが、数もわからず、避けきれないほど舟が多いうえに、聞いたこともないほどに恐ろしそうな声をしている者たちが押しあいへしあいするのを聞く

A ㊦ 2 「舟に乘ろうとすると」「舟に乘ろうとする時に」も可。

B ㊦ 2 「舟の数が多い」「避けることができないほどである」という内容がなければそれぞれ減点1。

C ㊦ 3 「同内容可。」

D ㊦ 3 「そのまま」「ひしめく」としている場合は不可。

問3 太陽が海に沈み、眼前に一面の海が広がっている情景。

同内容可。

問4 入江ではないためか、波風がとても激しく感じられるところ。

問7 都を恋しく思っていたのに、いざ帰となると、慣れ親しんだ尼崎の浦風を名残惜しく感じているのが、自分のことながら矛盾していておかしいこと。

A ㊦ 3 「尼崎での生活を疎む、という内容でも可。」

B ㊦ 3 「いざ帰るとなると」はなくても可。

C ㊦ 4 「矛盾した」は、「もとの気持ちに反する」「理屈に合わない」などの表現でも可。

本文解説  
鎌倉時代後期の日記

交通機関が発達していなかった時代、旅は現代では想像もできないほど困難で、住み慣れた場所を離れる心細さも計り知れないものであった。都を離れ、尼崎を訪れた作者の旅も、自らの体調の悪さも加わって心細い旅であった。しかし、いざ都へ帰るとなると、また違った思いが浮かぶというのも面白い。

紀行文は、時・場所を移しながら、状況の変化とともに綴られるので、注意しながら読解したい。

考察

問1（現代語訳）

a ㊦ 「音」は実際の音声や人の声ではなく、「噂」「評判」という意味。「のみ」は限定の意味の副助詞。「わたる」は、動詞の下について時間的・空間的に連続する意を表す。

b ㊦ 「一方ならず」は「一通りでない」「並々でない」という意味の連語。「し」（過去の助動詞「き」の連体形）まで注意して訳したい。

c ㊦ 「影」は現代語とは違い、「光」や「光によって見える姿形」という意味で使われることが多い。「見ゆる」は「行下二段活用動詞「見ゆ」の連体形で、現代語の「見える」に相当し、「見る」とは異なるので注意が必要。

A ㊦ 3 「浦」を訳出していること。  
B ㊦ 3 「同内容可。」  
C ㊦ 4 「波風の激しさが「感じられる」を、「気持ちになる」など自身の心情の変化として表現している場合は減点3。」

問5 海人の桕縄は、いつも海の中で引つ張られていて苦しいものだと思つていたが、海から引きあげられて、干す時もあるのだなあ（ところ）。

A と B を対比する書き方でなければ全体 0。

A ㊦ 6 「同様の苦しさに触れていれば可。」

B ㊦ 4 「同内容可。」

問6 a ㊦ ㊦ 月の姿は都で見ると変わらないので、月の姿だけを都で過ごした頃の思い出とする（ところ）。

A ㊦ 2 「都で見ると尼崎で見ると同じ、と指摘していることが必須。」

B ㊦ 4 「姿」はなくてもよい。限定の意味を欠く場合は減点2。

C ㊦ 4 「都」に言及していなければ減点2。

b ㊦ ㊦ ほかの人から見れば曇りのない月の光も、体調も悪く、都を遠く離れた寂しさから塞ぎ込んだ自分から見れば、夜ごとに涙で曇らない夜はなかった（ところ）。

A ㊦ 3 「ほかの人から見えた月」として説明してあること。

B ㊦ 3 「作者の体調に触れていなければ減点1。」

C ㊦ 4 「作者の涙に触れていなければ減点2。」

問8 これまで過ごしてきた土地を振り返って見ても、遙か遠く霞が隔ててそこがうつとはつきりしない。

A ㊦ 5 「来し方」を「過去」などと訳している場合は不可。

B ㊦ 5 「そこはかとなし」を「はつきりしない」という意で訳していない場合は不可。

問2（現代語訳）

「あへぬ」は、連語「あへず」の連体形で「しきれない」「最後まですることができない」という意味。「避り」は「避ける」という意味のラ行四段活用動詞「避る」の連用形。「ひしめく」は「押しあいへしあいして騒ぎ立てる」「ぎしぎし鳴る」という意味。

なお、「に」はそのまま「に」と訳せる場合もあるが、識別に注意すべき語の一つである。連体形に接続する「に」は、一般に次のように判別する。

連体形に接続する「に」

・格助詞：連体形の下、「に」の上に「時」「ところ」などの体言を補うことができる。

・接続助詞：連体形の下、「に」の上に体言を補うことができない。

・断定の助動詞「なり」の連用形：「に」の下に「あり」「さぶらふ」「侍り」などが付くことが多い。

その他の「に」（完了の助動詞「ぬ」の連用形、形容動詞やナ変動詞の活用語尾）についても文法書などで確認しておきたい。

ただし、格助詞・接続助詞の判別はどちらにも解釈できることも多い。文脈で判断せざるをえない場合や、文脈に合った体言などを柔軟に補ったほうがよい場合もある。



解答では「乗らむとするに」を（「に」を接続助詞として）「乗ろうとするが」と訳しているが、「乗らむとする」の下、「に」の上に「時」を補って（「に」を格助詞として）「乗ろうとする時に」などとしても可。

### 問3（文意の理解）

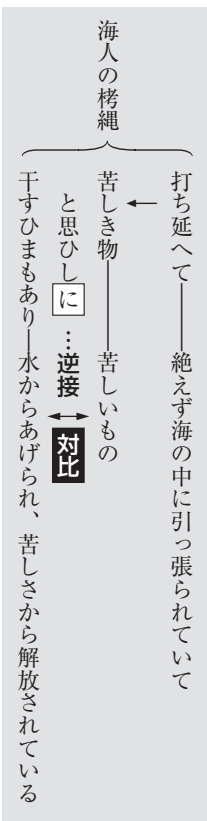
現代の常識とおり「太陽が水平線の向こうに沈む」という意味だと考えてよい。模範解答では、「どのような情景か」という問いに対し、単に**事実や現象を答えるのではなく、作者が感じた主観的なイメージとして表現した**。都では山の向こうに沈んでいた太陽が、ここでは海の向こうに沈んでいく。太陽が沈んだ後には都では見慣れない一面の海が広がっているイメージが作者の不安な心情と重なり、驚きがあったのだろう。

### 問4（文意の理解）

「心地」は「気持ち」「気分」という意味のほかに「感じ」「ありさま」という意味も持つ。傍線部を「激しい気分がする」や「激しい気分になる」と解釈したのでは意味が通じないので、「**激しい感じがする**」と解釈するのが適当だ。では何が激しいかといえば、これも傍線部中にある「立ち来る波風」である。作者は海に面した尼崎に来ており、しかも「浦ならねば（＝入江ではないから）」波風が強く感じられたということだ。

### 問5（解釈）

（注）を手がかりに歌の解釈を進めたい。



これまで…・都のみ心とまりし（＝都のことばかり考える）

・海山隔たりぬる心細さ

・心許なく（＝待ち遠しく）数へられつる日数

→ 矛盾する思い＝「あやにく」 ←

都に上る…・あかぬ（＝満足しない）心地

・馴れぬる（尼崎の）浦風に心はなびく（＝ひかれる）

### 問8（現代語訳）

「来し方」は「通り過ぎてきた方向」「過ぎ去った時」。「顧みれ」はマ行上一段活用の動詞「顧みる」の已然形、「振り返って見る」の意味。「そこはかとなし」は『徒然草』冒頭に見る「とりとめもない」以外に「どうということもない」「それとはつきりしない」などの意味を持つ。

### 現代語訳

（八月）三十日に実家に（退出するため宮中を）出て、九月四、五日の頃に尼崎という所に行くと、京を夜遅く出て、鳥羽殿に近いあたりで夜が次第に明けていく空に、木々の梢も色づき始める頃であるので、色艶がある様子でかえって趣深い。舟に乗ろうとするが、数もわからず、避けきれないほど舟が多いうえに、聞いたこともないほどに恐ろしそうな声をしている者たちが押しあいへしあいするのを聞くにつけても、（宮中での生活や舟遊びとは）うってかわった様式もしみじみと趣深く、北山殿（の舟遊び）が自然と思ひ出されて、「なんと（違った様子か）」とだけでも言い合う人もいない。遙か遠くまで舟を漕いでいくと、川霧が立って、通ってきた方向も進んでいく先も見えない。禁野の一つ、交野という所を通り過ぎる時に、噂にだけは常に聞いているがと思って、しばらくの間見ると、違いのではつきりはしないが、柴の野原の中から鳥が飛び立つのを、「雉であろうか」などと言うので、

昔もその鳥がいると評判にだけ聞いていた交野の雉を、今日見たことよ。

また橋をたくさん通り過ぎたようだったが、「これが天の川です」というのを見ると、

歌の直前に「ありけるを」という詠嘆の助動詞と助詞があることから、いつも水の中で引っ張られていて苦しいだろうと想像していた桕縄が、海から引きあげられて干されているのを見て、**いつも苦しいというわけでもないのだと作者が感慨を深めている**とわかる。リード文にあるように、病弱でいつもどこか気分の晴れないことが多かった作者だからこそ、いつも海の中で引っ張られている桕縄に自分を重ね合わせ、苦しみからの解放を象徴する歌を詠んだと考えられる（ただし、この設問では海人の桕縄の解釈が求められているので、その象徴するものについてまで触れる必要はない）。

### ◎問6（解釈）

（a）＝「面影」は「顔つき」「様子」「幻影」などの意味を持つが、古語では**人の顔つきとは限らない**ことに注意すべきで、ここでも後の「形見」と同様、「月の姿」と解釈するのが適当だ。「形見」は「思いの品」や、「過去を思い出す手がかりとなるもの」。都を遠く離れた地で空を見上げると、都で見ているのと同じ姿の月がある。その月を都で暮らしていた頃の思いのすがとしよう、というのである。

（b）＝「よそ」は、現代語と同様「他の場所」以外に「他の人」という意味も持つ。ここでは「我からは」と対比しているので「他の人」と解釈すべきだ。「隈」は「くもり」「かげり」。「影」は、問1cで触れたように「光」である。「我からは」「曇らぬ夜半もなし」というのは、他人から見たら曇りのない月も、自分は涙に暮れているので曇って見えるということだが、作者が涙に暮れている理由は都を離れた寂しさだけではない。リード文にあるように（問5では解答要素としなかったが）体調の悪さも加わっていると考えるべきであろう。

### 問7（文章全体の理解）

「あやにくなり」は「意地が悪い」「折が悪い」「あいにくだ」の意。これまでいやだと思っていた尼崎での生活が終わり、いざ都へ帰るとなると、違った気持ちになるのが「あやにくなり」だということだ。

橋は壊れてその形だけがわずかに残る。

これが、あの織女が恋し続けている天の河原の鵲の橋なのか。

こうして日没の頃に（尼崎に）行き着いた。太陽はただ海の水（平線）の下に入ると見えて、河から海になる境界は、波が荒く立ち、遙か遠い沖を漕ぐ舟は、絵に描いたようなものだ。東北の方向を見ると、住吉の松が、たくさん集まって立っているのがとぎれとぎれに霞んで見える。立ってくる波風も、入江でないからであろうか、たいそう激しい感じがする。昼、貴布禰の浦という所に出て見ると、浦の松風が、波と響き合って、入江の様子は物寂しく、神々しくてたいそう尊い。浜に海人たちが、貝を拾い、また沖釣りをする者もある。桕縄、網などという（ものを）、干して置いてあるのを見ると、（水からあげて）干す時もあったのだなあ（思って）、

絶えず海の中に引っ張られていて苦しいものだと思っていたが、海人の桕縄は干す時もあるのだなあ。

夕日の光が趣深く照らす頃合いに、沖から海人の釣り舟たちがたくさん帰るのも風情がある。（日が）暮れると遊女の舟たちが、唄や今様をうたいなどするのも面白い。一通りではなく都ばかりが心にとまっただうえに、海や山を（遠く）隔ててしまった心細さを思うと、（その月の）姿だけを都（で過ごした頃）の思い出として、波路遙かに（遠く隔たった所から）月を眺めるのさえ、他の人から見れば曇りない（月の）光も自分から見ればそれでも曇らない夜はない。

こうして待ち遠しく自然と数えずにはいられなかった（尼崎で過ごす）日数も間もなく（過ぎ）て、都に）上るのは、また反対に満足しない気がしてそうはいっても慣れてしまった浦風に心はひかれることよと、自分でも矛盾したことと思ひ知つてしまふ。（都に向かつて出発したが）これまで過ごした土地も遙か遠くになってしまふのも心細く、（見慣れた）梢を振り返って見るが遠く隔たり霞んだ雲だけ（が見えるようになってしまったの）を眺めて、

これまで過ごしてきた土地を振り返って見ても、遙か遠く霞が隔ててそこがそうとはつきりしない。

遅く出発して「明日も（都に着く頃は）日が暮れてしまふに違いない」と言うので、一晚中舟を漕ぐが、二十日の月なので、夜が更けるにしたがってより光が澄んでいつて趣深いのに、皆は寝てしまったので、（自分が）一人起きていて見ると、（水と一緒に）姿も流れると見える月は、それでも（舟に）遅れず付いてきた。いろいろなことを思い続けると、最後にはなんとなく恐ろしい気がして心細い。

作品(作者)解説

鎌倉時代後期の日記文学。作者は熙仁親王(後の伏見天皇)に仕えた伏見院中務内侍(藤原経子)。一二八〇年から一二九二年までの十三年間におよぶ記録。宮廷行事や儀式の記録を中心に、自らの見聞や女房生活の体験を記している。

参考

作者が「音にのみ聞きわたる」と書いている禁野は天皇の御獵場で、一般人の狩獵を禁じた野。そのうちの一つ、交野は『伊勢物語』八二段にも記事があり、古来歌に詠まれる名所として知られている。

入試情報・解答時間

国語100分 大問3問(論理・古文・漢文)  
＊生活環境学部 国語75分 大問2問(論理・古文)

4 「紫の一本」

戸田茂睡

【出題大学】 千葉大学 国際教養・文・法政経学部（前期）

解答と採点基準

問1 c

問2 日頃の心がけは必要だが、日常からかけ離れた所にあるものではないといふこと。

問3 北村

問4 ア人がうつつとらしいように思う所

問5 実際に体験して得た考えではなく、頭の中だけで考えたこと。

問6 思いがけない困難な状況に遭遇した時に慌てるということとは、生まれつきの性質として剛勇と臆病との違いがある中に、状況に馴れていることと馴れていないこととの経験の差もあるに違いない。

問7 武士というのは武具の是非によって認められるのではなく、日頃からの中での武士とはどうあるべきかを考えつつ、いろいろな困難な経験を積んでどんな状況でも慌てることのない用意を心に備えている者をいう、ということ。

本文解説 近世の随想

筆者の戸田茂睡が活躍した一六〇〇年代後半、関ヶ原の戦いから半世紀以上が過ぎ、武士は戦場で活躍することがなくなってきた。しだいに人々は問う。いったい武士とは何者なのか。武士としてのアイデンティティが切実な問題として問われる

ことになってきたのである。この文章には、そうした中での武士像が描かれている。語注が多くあるように普段あまり使わない語もあるが、難解な重要語や文法はほとんどない。現代文を読む力も応用させながら、しっかりと読み解きたい。

考察

問題1（文法）

助動詞「べし」は多くの意味を持つだけに、その中の一つに限定することが困難な場合が多い。このa～dの場合のいずれもやはり同様である。そこで、それぞれどんな訳が可能かを次に並べて整理してみる。

- a 思うでしょうから（推量）／思うはずですので（当然）
- b ありましょう（推量）／あるはずです（当然）
- c 試してみなさい（命令）／試してみるのがよい（適当）
- d 納得するだろう（推量）／納得するはずである（当然）

それぞれ複数の訳が考えられるが、cがほかと異なることは明らかである。

問題2（文意の理解）

傍線部直後の文に「眼前にて近き事にて候へども（＝目の前での間近いこととございますが）」とあるので、「遠き事にはあらず」とは「日常の身近にあることである」という意だとわかる。これを記せば解答はほぼできあがる。

だが、これだけの解答を求めるならば「遠き事にはあらず候ふ」だけに傍線を引いてもこの問いは成立するはずである。それなのに、わざわざ一文全体に傍線を引いていることを考えると、傍線部前半の「武士の道、教へあり」に直接関わる説明も求めている可能性がある。とすれば、直後の文の後半「心に修行なく常住心に懸けざる人は、その品を聞きても合点まゐらず（＝心の中で修行することなく普段心に懸けない人は、その趣を聞いても納得なさらない。）」の内容、つまり「武士の道の理解には日常の心がけが重要だ」ということも記しておくほうが賢明であろう。

問題3（文学史）

北村季吟（一六二四～一七〇五）は江戸時代前期の歌人・古典学者である。松

問題4（現代語訳）

永貞徳の門下で俳諧師としても活躍し、松尾芭蕉の師でもある。『源氏物語湖月抄』は江戸時代に『源氏物語』を読む際のテキストとして広く流布した。文学史上重要な人物だが、文学史を十分に学んでいないと、答えを導くことは難しい。

ア＝「いぶせし」は「気が晴れない」「いとわしい」の意を表す形容詞。似た語に「いぶかし」があって混乱することがある。左記のような共通点と相違点があるので整理して理解しておく必要がある。「ゝがる」は「ゝのように思う・ゝのように振る舞う」の意の接尾語。

語	共通点		相違点
いぶせし	何か心にかかって気が晴れない		気持ちが晴れないまま心がふさぐ様子
いぶかし			気にかかることを明らかにしたいという気持ち

イ＝「すこし」は「気味が悪い・恐ろしい・ぞっとするほど寂しい」の意を表す形容詞。「もの」は「なんとなく」などの意を表す接頭語。

問題5（文意の理解）

「料簡」は「思慮・分別」などの意。「畳の上の料簡」は比喻表現で、実際の体験や実践によって得た考えではなく、畳に座って頭の中だけで得た考えのことを表現している。似た表現に「机上の空論」がある。

問題6（現代語訳）

どんな内容を補う必要があるかは、文脈に即して考えなければならない。「慌つるといふは」は、傍線部直前の「我が心に…馴れたらば、たとへ今戦場に出て…慌てぬ心あるべし」という文脈から「困難な状況に遭遇したときに」という前提条件を補うことができる。「生まれ付きの剛臆の中に」は人間の性質について述べていて、このことに気づけば「剛臆」が「剛勇」と「臆病」の相反する性質



を意味しており、そんな性質の違いの中で、「馴れると馴れぬとのわけあるべし」、つまり、困難な状況に「馴れる」「馴れない」という違いもあるということを述べようとしている、という解釈が可能になる。

◎問7（文章全体の理解）

傍線部は「武士というのは『武の嗜み』を心に備えている者をいう」といった意味になるが、「武の嗜み」の具体的な内容がよくわからない。「本文全体の内容をふまえて」という指示があるので、本文の構成を再確認して「武の嗜み」の具体的な内容を考える。

【構成】	
第一段落	「武士といふは武の嗜み心に備へたるを云ふ」
・ 刀脇差に寝刃を合はせ…懸けならべ置くやうなる事にてはあらず。	（2～3行目）… <b>A</b>
・ たとへよき武士にても…鎗身の刀脇差を差すことも候ふ。（5～6行目）	… <b>B</b>
第二段落	「武士の道、教へありといふは、遠き事にはあらず候ふ」（9行目）
・ 眼前にて近き事にて候へども、心に修行なく…合点まゐらず。	（9～10行目）… <b>C</b>
・ 武士といふ名をば、何故に云ふぞといふ事を思ひ、明けても暮れても心の穿鑿致し（18～19行目）	… <b>D</b>
・ 寒きことにも馴れ…又は卵塔、三味原などへも夜行きて、その時の我が心はいかやうにありしと試してみるべし。（19～21行目）	… <b>E</b>
かやうに…我が心に心を付けて落としつけ馴れたらば、たとへ今戦場に出で、知らぬ物まへなりとも、慌てぬ心あるべし。（22～23行目）	… <b>F</b>

ここから、「武の嗜み」とは、①刀脇差などの武具の良し悪しではないこと

このようであります。この（二つの）句は文字の違いはありませんが、その（＝俳諧の）道を心にかけている人は有心、無心の句作りを、納得なさるはずでございます。俳諧を知らない人は、納得できないでしょう。武士の教えもこのようでございます。刀や脇差は百姓や町人も差し申しております。足軽や、中間も人を斬り申しております。弓、鉄砲、鎗、兵法、馬に乗り申し上げる者も、それぞれの達者がいる。（しかし、その者たちには）武士という名目はない。書物を読む智慧がある者は、とりわけ儒者や、僧侶に（多く）いる。力持ちで手足が頑丈な者は、日雇いで働く者にもいる。主君からたくさんの領地を与えられ、武士という名前を、何の理由で言うのかということを思い、明けても暮れても心の中で細かい点まで知ろうとし、寒いことにも馴れ、暑い思いをもし、くたびれてどうしようもない目にもあい、あるいは人がうつつとうしいように思う所へ人目を避けて行つて見、野山の人がけない所、または墓所、火葬場などへも夜に行つて、その時の自分の心はどのようなであつたかと試してみなさい。畳の上での考えとは、とりわけ違ふはずである。そうすればなりやすいこととなりにくいこと（の違い）も少し納得するだろう。なんとなく恐ろしい所の夜道によつて、心を試したならば愚かな人の目に見える者は見えなくて、行き来する人の、怪しいのと怪しくないの（との違い）もはっきりと見えるだろう。このように心をひたすら試して、自分の心に心を付けて落着かせ（そのことに）馴れたならば、たとえ今戦場に出て、知らない戦が始まる間際であつても、慌てない心があるだろう。慌てるということは、生まれつきの（性質として）剛勇と臆病（との違い）がある中に、（状況に）馴れている（こと）と馴れていない（こと）との（経験の）差もあるに違いない」と語る。この話は、がぜぼ谷のことには必要がないことだけれども、得船の形見と思つて書き載せておくのである。

（**A**・**B**）、②いつも心の修行をし、武士について考えること（**C**・**D**）、③いろいろな状況での心的経験を積み、馴れること（**E**）の三点であり、「武士」はこれによつて困難な状況においても慌てない心が得られる（**F**）、とまとめることができる。

現代語訳

陶々子が言う。「そのようなことは以前から聞き及んでいる。武士には武士という（ありように応じた）慣習があるということをお伺いしたい」と言う。得船が言うことには「武士という者は武の用意を心に備えている者のことをいう。たとえば刀や脇差を研いで切れ味を鋭くし、鎗や矢の先に少しの鎗をも付けず、鎧や馬具をきれいに用意し、早縄、松明、腰差、弁当、鉈、鎌までも掛け並べて置くようなことではない。これは、辻番の心得というものです（いうことであつた）。（さらに得船は）また道具好きとも申します。町人にも刀や脇差をきれいに飾り立て、少しの鎗も付けず、切れ味がよくなるように研いで差し申し上げております者は、多くは自分の腕前を自慢して（自分が）強いことを申します。当世の町人に雇われている者を、武士と申すことはできそうもありません。たとえよい武士であっても、暮らし向きが悪く貧しさに苦しむということであると、鎗の付いた刀脇差を差すこともあります。そうだからといって、この人を侍ではないとは言ふことはできません。侍の意地が強い者は、生まれついて嘘を言い利益を貪ることをしませんでした、人の機嫌をとることもない。そのために立身出世もできかね、暮らし向きも悪いことが多くございます。近頃はそれを愚か者、手際の悪い者と名付けておりますので、評判が格別（に大切）な世の中で、そうして（名誉や面目が）失われてしまったと申し上げております。

武士の道には、教えがあるというのは、遠いことではありません。目の前での間近いことでございますが、心の中で修行することなく普段心に懸けない人は、その趣を聞いても納得なさらない。浅薄なことに思うでしょうから、かえつて非難を受けることであります。あなたは俳諧をなさるということを、以前から聞き及んでおりますので、俳諧の心として申し上げます。最近京の町人の季吟と申し上げる者が、「埋木」と申します書物を著し出版しました。その中に有心の句、無心の句作りということがあります。その句は、

月を詠めて…（月をじつと眺めて猿が欲しがるといふこと）  
詠めて月を…（じつと眺めて月を猿が欲しがるといふこと）

作品（作者）解説

戸田茂睡が著した江戸の地誌および随想。一六八二年成立。全四巻から成る。冒頭には序があり、著者の茂睡と目される浅草の隠士（いんし）と四谷の徴官の陶々子（とうし）が心のおもむくままに語り合うと記されていて、その後、二人が江戸を巡りながら江戸の名所を記述するという趣向になっている。こうして随想的な要素と地誌的な要素を主にしながら、江戸の文化や風俗なども活写する。

戸田茂睡（一六二九～一七〇六）は歌人として名を残すが、祖父は徳川譜代の臣、父は徳川忠長に仕えた家に生まれる。二十代はじめに江戸に出て、三河岡崎本多家に出仕するが、のち隠棲する。著書にはほかに『梨本集』『百人一首雑談』などがある。

参考

リード文に「がぜぼ谷」という地名の由緒を知ろうと」とありながら、本文はそのことにまったく触れておらず、実は『紫の一本』の本文にもこのことはあまり詳しく語られていない。「座禅坊谷を言いやすいようにして、がぜぼ谷と言うのだろうか」と尋ねたところ、「座禅をする僧侶はこの頃のこと、で、がぜぼ谷という名は以前からのことである」と答えるだけでそれ以上は記されない。「がぜぼ谷」は現在の東京都港区麻布の我善坊町がそのあたりということであるようだが、やはり明確な由来はわからないようである。ならかの言葉が訛（なま）つたのであろうが、濁音が連続する「がぜぼ谷」は印象に残る音の響きではある。

入試情報…解答時間

国語80分 大問3問（論理〔随〕・古文・漢文）

5 「秋香歌かたり」

(ファイルして保存しよう。)

なかむらあきか  
中村秋香

【出題大学】 大阪大学  
法・外国語・経済・  
人間科学部 (前期)

……解答と採点基準……

問1 <sup>A</sup> なんと <sup>B</sup> いうでたらめな句だろうか

- A ≡ 4  
B ≡ 6 「句」がなくても可。文末は「〜ことよ」も可。「ぞや」の訳の「〜だろうか」「〜ことよ」などがなければ減点2。」

問2 <sup>A</sup> 其角の「炭櫃」の句と『無名抄』の「炭櫃」の歌は、ともに『枕草子』の「すさまじきもの」の「火おこさぬ火桶、炭櫃」を踏まえて、季節外れで使  
用されない夏の炭櫃への興ざめな気持ちを詠んでいる点で同じである。

- A・B がなければ全体0。  
A ≡ 3 / B ≡ 3 / C ≡ 2 / D ≡ 2

問3 <sup>A</sup> 「前を」の場合は鍋を洗う人の前を三、四匹の蛭が飛びかう様子が想起され  
るのに対し、<sup>B</sup> 「前に」の場合は眼前の草むらなどに蛭がいる様子が想起され  
るが、蛭の飛びかう動的な様子を想像させるには、「前を」のほうがふさわ  
しいから。

- A ≡ 4 「前を」「蛭が飛びかう様子」という内容がなければ不可。  
B ≡ 4 「前に」「蛭がいる様子」という内容がなければ不可。  
C ≡ 2 「動的」と同様の表現も可。」

……本文解説……

◆近代の俳論

出題箇所では四つの句が挙げられ、それぞれの句について先行論などの指摘を取

行論の指摘に対し、作者がそれ以上に踏み込んだ鑑賞・指摘を展開している。また後半の二句については、助詞の働きに着目し、助詞一つでいかに俳句そのものの解  
釈に違いが表れるかについて述べている。

あまり俳句に触れたことがない受験生には難解に感じられたであろうが、明治時  
代の文章ということで古文としては平易であり、四つの句に対する筆者の論や指摘も  
明快でわかりやすい。俳句をどう鑑賞してよいかわからない、という苦手意識のある  
受験生にとっては、この文章の理解が俳句の味わい方を知る一つの契機となるう。

……考察……

●問題1 (現代語訳)

「なでふ」とは「なにといふ」が変化した語で、連体詞として「なんという。  
なにほどの」の意味で、また副詞として「どうして」の意味で用いられる。ここ  
では後に続く「たはごと」という体言を修飾している連体詞である。「たはごと」  
は正常でない(ふざけた)言葉、すなわち「でたらめ」のことである。ここでは  
桃青の句に対し、漢詩の一節をただ日本語で詠んだだけであるようだと言難して  
いる箇所であるため、「でたらめな句である」と言葉を補って訳出してもよい。  
「ぞ」は係助詞、「や」は間投助詞。「〜ぞや」の形で文末に使われる場合、詠嘆  
的な強調表現であり、また、疑問の語(ここでは「なでふ」)を受けた場合、「〜  
だろうか」という訳出をすることが多いので、模範解答ではそちらを採用した。  
傍線部全体の現代語訳は「なんというでたらめ(な句)だろうか」となる。

問2 (文意の理解)

直前の話題を整理すると、次のようにまとめられる。

《芳樹翁の指摘》

- ・炭櫃さへすゝきに夏の炭俵(其角)  
↓『無名抄』の歌「火おこさぬ夏の炭櫃のここちして人もすさめすさまじ  
の身や」から着想を得たものである。

問4 「三日見ぬまの」が「桜」と関係するのに対し、<sup>A</sup> 「三日見ぬまに」の場合は、  
「三日見ぬま」の句が「よの中」と関係する表現となり、<sup>B</sup> 三日見ないうちに  
桜が花盛りになるように、<sup>C</sup> よの中は三日見ない間にすつかり変化するものだ  
ということを述べている。

- A ≡ 6 「『三日見ぬま』の句は『よの中』と関係する」という内容  
がなければ不可。  
B ≡ 2 「桜が花盛りになる」という内容がなければ不可。  
C ≡ 2 「よの中は変化する」という内容がなければ不可。」

問5 <sup>A</sup> 「鍋洗ふ」の句の「前に」と「前を」という表現の違いの話と、<sup>B</sup> 「よの中  
は」の句の「見ぬまに」と「見ぬまの」という表現の違いの話とが、ともに  
助詞が一字異なるだけで読み手が句から思い浮かべる情景に差異が生じる  
という共通点をもつ点で面白いと述べている。

- C・D がなければ全体0。  
A ≡ 2 / B ≡ 2  
C ≡ 3 「助詞が一字異なる」という指摘がなければ不可。  
D ≡ 3 「情景に差異が生じる」と同様の内容であれば可。」

りあげつつ、筆者自身の論や見解を示して、句の味わいや面白みを引き出す構成と  
なっている。前半の松尾桃青(松尾芭蕉)と其角(宝井其角<sup>(寛文)</sup>)の句に関しては、先

《筆者の考え》

- ・炭櫃さへすゝきに夏の炭俵(其角)  
・火おこさぬ夏の炭櫃のここちして人もすさめすさまじの身や(『無名抄』)  
↓ともに『枕草子』の「すさまじきもの」の章段に「火おこさぬ火桶、炭櫃」  
とあるのを踏まえている。

このうちの《筆者の考え》がこの設問で理解を問われている内容である。傍線  
部中の「よる」とは「依る」とも書き、「基づく・依拠する」の意の動詞。歌中  
や『枕草子』の「すさまじ」は「興ざめだ」という意味の形容詞であり、句中の  
「すこし」も「殺風景だ・無風流だ」という意味を持つ語で、ここでは「すさま  
じ」と同様の意味と捉えてよい。設問の求めに応じると、「何と何とが」は「其  
角の句と『無名抄』の歌とが」であり、「どのように同じであるというのか」は、  
どちらも『枕草子』の「すさまじきもの」の章段の「火おこさぬ火桶、炭櫃」に  
依拠している点で同じ、さらに内容に踏み込むと季節外れで興ざめなものとして  
「夏の炭櫃」を詠んでいる点で同じである、という旨の解答となる。

なお、(注)から芭蕉の門人である其角は江戸時代の人物であり、『無名抄』は  
鴨長明作とあることから鎌倉時代の作品であることもわかる。文学史が頭に入っ  
ていれば、筆者が『無名抄』よりもさらに古い平安時代成立の『枕草子』の中に  
典拠を指摘した文意の理解が容易であっただろう。

◎問3 (文意の理解)

「鍋洗ふ前を」といはざるべからず」とは、「鍋洗ふ前を」と言わないのは適  
当でないだろう(≡『鍋洗ふ前を』がふさわしい)ということ。傍線部で取り  
上げられている「前を」の「を」と「前に」の「に」は、ともに連用修飾格の格  
助詞であり、本来修飾する先の用言が存在するはずである。しかし、韻文におい  
てはしばしば自明の内容は「言外にしらるべし」(17行目)、すなわち言い表さず  
とも読み手は自然に理解するものとして、省略される。嵐牛の句の場合、「前に」  
と「前を」で省略された用言をどのように想定できるのか、石川依平の指摘を踏



まえて次のように整理する。

鍋洗ふ前を、三つ四つ螢(が)	用言	かな
↓石川依平「螢が飛びかふさま、言外にしらるべし」		
⇨省略された用言は「飛びかふ」と想定できる		
鍋洗ふ前に、三つ四つ螢(が)	用言	かな
↓石川依平「鍋を洗ふ前の草むらなどに居るさまにて、…」		
⇨省略された用言は「居る」と想定できる		

このように、読み手は省略された用言を自然と想定し、その情景を思い浮かべることになる。そのうえで、鍋を洗う前の螢を詠んだ歌としては、**螢の飛びかう動的な様子を想像させるため、「前を」のほうがふさわしい**と述べていると考えられるのである。

#### 問4（文意の理解）

「かかる」は「関係する」の意の動詞。傍線部の前後で取り上げられている「三日見ぬまに」と「三日見ぬまの」の違いは、連用修飾格の格助詞「に」であるか、連体修飾格の格助詞「の」であるかである。それぞれ関係する言葉と句の情景にどのような違いが生じるのか、本文に即してまとめると次のとおりになる。

よの中は三日見ぬまに、桜かな
↓「 <b>三日見ぬま</b> 」は「 <b>よの中</b> 」と強く関係を持ち、読み手は「桜」に対し言外に用言を補って「桜になる（⇨ <b>桜が花盛りになる</b> ）」と理解する。よって句全体の内容は「三日見ないうちに桜が花盛りになるように、よの中は三日見ない間にすっかり変化するものだなあ」となる。
よの中は三日見ぬまの、桜かな
↓「 <b>三日見ぬま</b> 」は「 <b>桜</b> 」と強く関係を持つ。読み手は「桜」を「三日見ない間に変化した（⇨ <b>散ってしまった</b> ）桜」と理解する。よって句全体の内

容は、「よの中は、三日見ない間に散ってしまった桜のように、絶えず変化するのはかないものだなあ」となる。

設問では「三日見ぬまに」の場合の理解を求めているため、こちらに焦点を絞って解答を作成すればよい。

#### 問5（文章全体の理解）

「共に面白きはなし」とは、筆者が傍線部の前までで触れた二つの話、すなわち**春畊氏による「鍋洗ふ」の句の話と、穂積夫人による「よの中は」の句の話**である。すでに問3・問4の解説中で触れたとおり、「鍋洗ふ」の句は「前に」と「前を」という一字の違いで想起する螢の様子が異なる話であり、「よの中は」の句は「見ぬまに」と「見ぬまの」という一字の違いで想起する桜の様子が異なる話であった。よって共通点は、どちらも**助詞が一字異なるだけで、読み手が句から思い浮かべる情景に違いがある点**とまとめることができる。

#### 現代語訳

松尾桃青の、馬に寝て…（馬上でまどろんで、へはっと目覚めると心には先ほどの）夢が残っている。（空には）月が遠くに見える。茶を煮る煙（も立ちのぼっている）。

の句は、眉山の早行（⇨早朝に旅立つこと）の詩の「馬上統残夢」という句を踏まえて詠んだのであるが、（句の後半で）「月遠し茶の烟」とうけたことよって、月が残っている早朝に旅立つ景色も、馬の背でまどろみながら、ゆられゆられ行く様子も、まのあたりに見るかのようで、元の詩が（「馬上統残夢」の次の句で）「朝日が昇ることも気づかない」といったのより、遙かに味があると思われる。小山田与清の『俳諧歌論』で、これらの句を批評して、漢文を日本語で詠むかのようで、なんとというでため（な句）だろうか**と非難したのは、よく考えていない論といえる**だろう。

また其角が、炭櫃さへ…（夏は）炭櫃でさえも無風流なのだから、夏の炭俵（はまして無風流だ）。と詠んだのは、『無名抄』に、

火をおこさぬ…（火をおこさない夏の炭櫃のような気持ちがして、誰も心引かれることがない興ざめな我が身であるよ。）

とある歌から着想を得たのだらうと、芳樹翁がおっしゃったのはどうだろうか。これは『枕草子』の「すさまじきもの」（という章段）に「火おこさぬ火桶、炭櫃」とあるのを踏まえたのであって、『無名抄』の歌と依拠するところが同じというほうが適切だろう。

遠江にいる柿園風牛は、俳句ではその当時名の通っていた人であったが、ある時、

鍋洗ふ…（鍋を洗う前に三、四匹の螢（が）いるの）**だなあ**。

という（句）を思いついて、このような詩情は歌では言い表しがたいに違いはないと思い、石川依平に示したところ、依平は見て、「私は俳諧のことを知らないのに、あれこれと評を加えることはできない。ただし歌としては『鍋洗ふ前を』といわないのは適当でないだろう。『を』**といえは**すぐに、鍋を洗う前を三、四匹の螢が飛びかう様子が、言葉で言い表さないこととして理解されるだろう。『前に』では鍋を洗う前の草むらなどに（螢が）いる様子であって、飛びかう様子とは思われないのだ」と（指摘が）あったので、風牛は深く感動し、これ以降常に依平の教えを受けて俳句（の技量）も大いに進歩した、と春畊氏がお話になった。

また、多くの人々が口にし、広く知られている、

よの中は…（世の中は三日見ない間に桜（の花盛りになるもの）**だなあ**。）の句は、あるいは「三日見ぬまの」とも伝わる。「三日見ぬまに」という場合は、『三日見ぬま』の句は、『よの中』（という言葉）に**関係し**、三日の間に局面が一変することを『桜かな』といったこととなり、『桜かな』は花盛りを表現したかのように思われ、一方で『三日見ぬまの』という場合は『三日見ぬま』の句は桜（という言葉）に**関係して**、『三日見ない間に変化した桜』ということになって、『桜かな』は花が散り落ちることをいったように思われる」と、穂積夫人がおっしゃった。どちらも面白い話である。

#### 作品（作者）解説

一九〇七年刊の随筆集。筆者の中村秋香（一八四一～一九一〇）は幕末から明治時代の国学者・詩人・歌人。新体詩や唱歌の創作で知られ、和歌や古典の注釈書を多く執筆している。

#### 入試情報・解答時間

国語90分　大問3問（論理・論理・古文）



# 6「花月草紙」

まつだいらさだのぶ  
**松平 定信**

【出題大学】 東北大学  
文・教育・法・  
経済学部（前期）

## 解答と採点基準

問 1 (1) Ⅱ 言うことばかり偉そうになつていった

(2) Ⅱ ひどく愚かだったこと

問 2 Ⅰ 自身は天地のものであり、我<sup>B</sup>というものも敵もないと思える境地。(30字)  
それぞれ同内容可。

A Ⅱ 5 / B Ⅱ 5

問 3 Ⅰ 禅意のことをわかっていない人が、どれほど言つても仕方がない。まさに私が禅意を得たというのに、どうしてあなたは私が禅意を得ているはずがないなどと言つのか。

A Ⅱ 3 「知らざらん」の目的語が具体的に書かれていなければ減点2。「いかに言ふとも」の訳は「どのように言つたとしても」なども可。

B Ⅱ 3 「接続助詞「ものを」の用法として、逆接の意味が訳出されていなければ減点2。」

C Ⅱ 4 「しか」の指示内容が書かれていなければ減点2。」

問 4 Ⅰ 相手に勝ちたいと思う心や負ける悔しさ、矢を早く放つ癖や遅く放つ癖、弓の弦で体を傷つける恐怖心や雑念を捨てられないこと。(59字)

それぞれ同内容可。

A Ⅱ 4 / B Ⅱ 3 / C Ⅱ 3

問 5 Ⅰ 我が身をもつて示したように主君に捨て身の相手を倒せる技量はなく、優れた者は自分こそが得たと慢心することはないということ。(60字)

A Ⅱ 4 「家臣の行動と主君の未熟さが説明できていればよい。」

B Ⅱ 6 「家臣の訴えが説明できていればよい。」

いた時代らしく、筆者は弓や剣術のたとえ話から、同様の結論を導き出している。

## 考察

### ●問 1（現代語訳）

(1) Ⅱ 「口だけ（が）高くなる」とは、ここでは具体的にどういうことを指すのかを文脈に即して答える。「口」は「言うこと」や「物言い」、「高くなる」は「偉

## 本文解説

### ◆江戸時代後期の随筆集

松平定信による随筆集で、さまざまな話題が収録されている。出題箇所は「禅意を得た」と言った者の話であり、「禅意を得た」とは、「悟りを得た」「極意を極めた」などの意味と考えられる。もつとも、自ら「極意を極めた」と公言するものの、実際にまともな力量の者がいないのもまた事実である。武士に武芸が必須とされて

そうになる」「尊大になる」などとし、文末の「ぬ」は連用形に接続しているの  
で完了の助動詞として訳す。

(2) Ⅱ 形容動詞「むげなり」は「あまりに」ひびく、形容詞「つたなし」は「愚かだ・劣っている」の意。過去の助動詞「き」の連体形「し」の訳出も必須。

### 問 2（文意の理解）

「禅意を得た」と言う者が直後で説明しているので、その内容をまとめればよい。なお「浩然の気」とは、中国の春秋戦国時代の思想家・孟子が最重要としたもので、天地の間に満ちている、このうえなく大きくて強い気のこと。これが人の心に宿ると、広く豊かで大らかな気持ちとなり、公明正大で何ものにも屈しない道徳心となるとされた。

### 問 3（現代語訳）

「禅意を得た」と言う者が反論され、腹を立てて口にした発言であることを踏まえ、具体的なやりとりを念頭において言葉を補い、現代語訳する必要がある。

A Ⅱ 「知らざらん」の目的語を「禅意のことを」などと補う。

B Ⅱ 「得し」の目的語「禅意を」を補う。また「ものを」は逆接の接続助詞で、「のに」と訳す。

C Ⅱ 「なぞて」は「どうして」と訳す連語（副詞「など」＋接続助詞「て」）。

副詞「しか」が指すのは、3～4行目の「聞きたる人」の発言にある「かかる所得てし人」：いかで得給ふべき」の部分である。

### 問 4（文意の理解）

直後に具体例が挙げられているので、この内容を抽象化しつつまとめて解答に織り込む必要がある。具体的には次のようにまとめたい。

具体例	抽象化
<div>・勝ち負けを競うとき、相手がたくさん当てる、それに勝ちたいと思う。 ・早く放つ弓の病・遅く放つ弓の病 ・弓の弦がゆるんで耳を打つと、それに懲りてまた耳を打つのではないかと思う。 ・人に負ける悔しさを捨てられない。</div>	<div>・相手に勝ちたいと思う心や負ける悔しさ ・早く放つたり遅く放つたりする癖 ・また体を傷つけるのではないかという恐怖心・雑念</div>

### ◎問 5（文意の理解）

指示語「これ」の内容を説明するためには、家臣がどのような行動をし、どのようなことを伝えたかったのかを読み取る必要がある。「大きな男の赤裸になりて、君を目がけてとびかかる」（14行目）とあり、「自らの刀で応戦した」という記述も本文にはないので、禪一つの姿で、丸腰の状態で飛びかかったものと考えられる。刀を持った相手を素手で制圧するには、（不可能というわけではないが）相手より技量がかなり勝っていないとできないとされている。家臣が「臣は剣の道、さして習ひしにはあらねど」（18～19行目）と言っているのは謙遜でもあろうが、丸腰の相手に刀まで取り上げられてしまう主君の腕は家臣から見ても相当未熟なレベルであったということになろう。

また「みづから負うて：まことに得し者は、誰かよきと思ふべし」（17～18行目）から、家臣の行動の目的は主君の慢心を諷めることにあったということが読み取れる。家臣の行動と、その訴えを字数内でまとめる。

## 現代語訳

禅意を得たと言う者がいる。「どうやって得なされたのか」と問うと、「私のこの身は天地のものであって、自分というものはない。自分というものがいないので敵もない。これを、あの（孟子は）浩然の気とも言ひ残しなされたのだ」と、とても自慢げに言つた。「どうやってその心境を得なされたのか」と言うと、「考えに考えてついに得たのだ」と言う。聞いて

ていた人は、たいそう笑って、「いろいろな聖人も説き残されたことだが、このような境地を心得た人は、現在の世にあるだろうと思えないくらい珍しいのに、いまだにそのこともおわかりにならないで、どうやって得なさることができたのか」と言うと、（禅意を得たと言う者は）腹を立てて、「**（禅意のことを）**わかつていない人がどれほど言っても仕方がない。まさに私が**（禅意を）**得たというのに、どうしてあなたはそのように**（『私が禅意を得ているはずがないなど』）**言うのか。私が得ていないことをご存じならば、おっしゃってください」と、声を震わせて言い、「それご覧あれ。怒りもまだ捨てることができないで、この身を捨てたとおっしゃるのか。特に色欲と酒にふけりなさっていると聞いた。それ（らの誘惑に）すらお勝ちにならないで、わが身にお勝ちになったと言うのか。万一勝ち得たとしても、忘れるということは、たいへん難しいことであるようだよ。得たと思うものは、どうやって得たのか、いや得ていないだろう。君は武士であるから、弓を射ることを例にして言おう。よく引いてよく放つことのほかに、弓の道はない。こうすればよく当たることを知っても、そうはできないのはどうしてだろうか。勝ち負けを争うとき、他人が多く当てたときなどは、ひたすらそれに勝ちたいと思うものだよ。また矢を早く放つてしまう癖もある。遅く放つ癖もある。両方とも心の外のことだよ。また弓の弦がゆるんで自分の耳を打つと、いっそう懲りに懲って、またもや耳を打つのではないかと思うのだよ。耳のことを捨てることもできず、（矢を）遅く放ち、早く放つことですら心のままにならず、他人に負ける悔しさをいまだに捨てることができないで、どうやってこの身をお忘れになるうか。とにかく今は実際に行う経験が積み重ならず、言うことばかり偉そうになっていった。ある高貴な方がいた。剣の道を極めたといって、自分で世の中に並ぶ者がないとばかり、常におっしゃっていた。ある日、書齋にいらつした時、端の部屋の障子を開き、躍り出たのを見ると、大きな男で裸になって、主君を目がけて飛びかかるのを、「さあ心得た」と言って、刀を抜いて切ろうとすると、（男は）躍り越え、あるいは伏し、左へ避け、右へ走りなどして、どうしても討てない。そうこうするうち、（男が）たやすく走り寄って、その刀を取ってしまったので、口惜しさは限りなく、どうしようと焦りなさっていると、その男は、畳にひれ伏してしまった。よくご覧になると、側近ではない家臣である。その者が言うには、『主君は剣の道を、よく心得になるが、いまだに抜きん出てすぐれた境地には至りなさっていない。そのために、自ら自負して剣の道を得ただけお思いになっている。本当に（剣の道を）得た者は、誰が（自分のことを）すぐれていると思うだろうか（いや思わない）。そのようなお心でいらつしやると、どのよ

うな過ちをなさるだろうか。私は剣の道を、さほど習ったものではないが、死を覚悟してすれば、私をすら討ち果たしなさることも難しかったのだよ。このことをよくよくお考えになれば、**（ご自身の過ちもないだろう）**と、涙をこぼして言ったので、主君も非常にお感じになって、自分がひどく愚かだったことを悟りなさったという。よくこれらのことをお聞きになって、悟りとやらの道はおやめなさい」とか言ったとか（いうことだ）。

作品（作者）解説

松平定信による江戸時代後期の随筆集。全六巻、一五六話からなる。一七九六年から一八〇三年の間に執筆し、一八一八年以降に成立。松平定信は寛政の改革を行ったことで知られる政治家であるが、幕臣を引退したのちにこれを書いた。江戸時代を代表する随筆であり、文学・芸術・政治、経済や自然現象、日常生活など多岐にわたる内容が綴られて

入試情報・解答時間

国語15分 大問4問（論理・文学・古文・漢文）

7 「駿台雑話」

室鳩巢  
【出題大学】京都大学 文系（前期）

解答と採点基準

問1 (1) 美しい雪景色に水鳥が鳴く声を聞くにつけても、ここに情趣を解する友人がいればなあ、と人恋しく思ったその時、

- C・Dがなければ全体0。  
A≡2／B≡2  
C≡3 「心」は「風流」など、「もがな」は「ほしいなあ」などもそれぞれ可。  
D≡3 「ゆかし」を「人恋しく」や「人に会いたい」などと訳していなければ不可。

(3) Ⅱ私はもう老いて足腰が弱って動き回れないが、来客をもてなす気持ちだけは酒の肴の準備のために歩き回るのに劣るだろうか、いや劣っていないよ、みなさん。

「別解」歩くことさえままならない私ですが、客人を歓待する心のほどは、小余綾の磯を急いで回るときの気持ちに劣ってはいないはずだがねえ、みなさん。

- B・C・Dがなければ全体0。  
A≡2／B≡2／C≡4  
D≡2 「反語の訳出が必須」

問2 兼好が雪の朝に手紙を送る際に、雪について触れなかったことを相手から責められたという「徒然草」のくだりを自分と同様に友人も想起して、この雪の朝に手紙を寄こしたので、雪に言及した返事をしなければ風流を解さない者だと不満に思われるのではないかと危惧したということ。

問3 来客から漢詩を求められ、四季折々のすばらしさに会おうとすぐに作れた昔と違い、年老いた今では創作意欲も衰え、うまく作れないが、雪の中の友の来訪に感激し、なんとかして漢詩を作ってみようということ。

- B・Cの内容（漢詩を作るに至る経緯）がなければ全体0。  
A≡2 「四季折々のすばらしさ」は「風流」などでも可。  
B≡3 「年を取って詩作の自信がない」などでも可。  
C≡2 「皆の来訪が嬉しく忘れ難い」などでも可。  
D≡3 「いかさまにも」を「なんとかして」や「ぜひ」などと訳していなければ不可。

問4 はるばるやってきた王子猷とともに雪景色を愛でた戴安道に年老いた自分を重ねるのは恥ずかしいが、今日集った客人たちはまさに王子猷のように情趣を解する方々だということ。

- A≡5 「同内容可」。「戴安道と比較して、自分が劣っていて恥ずかしい」ということが記されていないければ不可。  
B≡5 「同内容可」。「訪ねてきた客人が、王子猷に匹敵する風流人である」ということが記されていないければ不可。

◆近世の随筆集  
すばらしい雪景色の朝に送られてきた友人からの手紙に返事を書く、日が高くなる頃に、その友人がそのほかの友人たちと筆者を訪ねてきたという場面。近世の文章なので内容は読み取りやすいものの、条件付きの設問ばかりであり、それを満たすためにどこまで本文の内容を補って具体化したり、説明したりするかがポイントとなる。

考察

問1（現代語訳）

傍線部（1）の品詞分解は次のとおり。

接続	ラ変末	婉体	名	終助(願望)	格助 名	(ウ音便)	形シク用	ハ四用	過体	名
さても	心	あら	ん	友	もがな	と、人	ゆかしう	思ひ	し	折ふし、

「さても」は「それにつけても」だが、「それ」の指示内容を明確にする必要がある。傍線部の直前の「四の山の端もみな白妙になりて、人間世界、さながら天上の白玉京かとあやまたるる」（5行目）や「あたりちかき池の水鳥のこゑこゑになく」（5～6行目）が指示内容である。「心あらん友もがな」の「心あり」は「情趣を解する」、「ん」は体言の上にあるため婉曲の助動詞で「うような」、「もがな」は願望の終助詞で「うがあつたらなあ」「うがあればいいなあ」と訳すのが適当。

傍線部（3）の品詞分解は次のとおり。

サ変体	名	副助	係助	名	格助	カ四・体	格助
あるじする	心	ばかり	は	こゆるぎ	の	いそぎありく	に
ラ四末	推・已	係助(反語)					
おとら	め	や	君	名			

和歌を文面どおり現代語訳すると、「来客をもてなす気持ちだけは準備のために歩き回るのに劣るだろうか、いや劣らないだろう、みなさん」となるが、設問

に適宜ことばを補うよう指示があるため、和歌の直後の会話部分も参考にして記述する必要がある。来客をもてなす気持ちは十分あるが、老齢のため足腰が弱っている、酒の肴を求めて歩き回ることがかなわないのである。「いそぎありく」は「準備のために歩き回る」の意だが、「急いで歩き回る」と答えても認められると思われる。「こゆるぎの」という枕詞は「小余綾海岸の磯」と続くことから、「いそ」の音を持つ「急ぎ」「五十」にかかる。

問2（文意の理解）

《傍線部(2)の現代語訳》

「これはあちからからこのように気を遣って（雪のすばらしさについてどう思うかと）言って寄こしたのに、こちらから（雪のすばらしさについての）返事がなければ、不満に思うだろうか」

《「徒然草」の挿話の大意》

雪が趣深く降り積もった朝に、ある人のもとへ雪のことに言及せず手紙を送ると、その返事に「この雪をどのように思うかと言わないのは残念だ」と言われた。

設問の条件に「直前の兼好「徒然草」の挿話にも触れながら」とあり、それを踏まえて記述する必要がある。傍線部と『徒然草』の挿話に共通するのは、「雪のすばらしさに言及しないのは無風流だ」ということ。友人が手紙の中で雪に言及したのは、風流人である筆者の友人であれば当然『徒然草』の一節を知っており、それを想起しているはずだという前提があるので、そのような友人であれば、それ相応の返事をしなければ風流心がないと不満に思われることを心配した。

問3（文意の理解）

傍線部（4）は、翁（筆者）の発言の一部。傍線部を現代語訳すると「なんとかして作り申し上げてみよう」となる。設問に「この考えに至る経緯を含めて」とあるので、傍線部の直前にある「漢詩を作ろうと思っに至った経緯」の部分を



まとめればよい。

《傍線部の直前部分》

昔	↔	今
「雪月花の折にあへば、はや詩の思ひよりも候ひし」(20行目)		「老いはれて其の心もさぶらはず。詩も久しくすてて作らねば、口渋りていひ出づべき事も覚えず」(20～21行目)
←		
気持ちの変化		
(4) けふの御たづね忘れがたく侍るまま、いかさまにも申してこそめ		

◎問4 (文章全体の理解)

傍線部を現代語訳すると、「私は老いて(自身を) 戴安道に喩えるには恥ずかしいが、(私を訪れてくれた) 客人たちは皆まるで王子猷(のように)風流を解する人々」だ。」となる。

吾	↔	客
「戴安道(雪を愛するためにはるばる訪れてくれた王子猷を受け入れた)」		「王子猷(雪の夜に出た月とともに愛するため戴安道を訪ねた)」

傍線部を説明するためには、吾(筆者)と戴安道との違いを踏まえる必要がある。問3で触れたとおり、筆者は「年老いて詩を創作する気持ちもなく、しばらく詩作をしていないので、うまく作り出せない」と述べており、そんな自分と戴安道を重ねることを恥じている。

現代語訳

冬もしだいに深くなった頃に、暮れ行く空の様子が寒々として、雪もちらちらと降っていたが、あれこれするうちに、日ももうすっかり暮れて、闇までもがますます気味悪い。

ことはかないませんが、気持ちだけはそれに劣り申し上げないでしょう」と、冗談などを言って時間が経過した頃に、客人たちが、「今日の雪には、翁の漢詩がなくてよいだろうか、いやよくない」と言って、翁に漢詩を依頼したので、翁は、「いやいや、昔は四季折々のすばらしさに出会うと、すぐに漢詩の発想もありましたが、今は老いはれてその心もありません。漢詩も長く捨てて作っていないので、口がつかえて言い出すのにふさわしい言葉も思いつかない。しかし今日の(みなさんの)ご訪問を忘れることができませんので、なんとかして作り申し上げてみよう」と言って、しばらく思索して、家は駿河台のもとにあり、門は万里の流れに面している。

平野の木々は雲に隠れ、雪の中棹をさして進む遠江の舟。

私は老いて(自身を) 戴安道に喩えるには恥ずかしいが、客人たちは皆まるで王子猷だ。草堂はひたすら静まりかえってさびしく、喜んで旧友とともに(漢詩を作り) 楽しむ。

作品(作者)解説

江戸時代中期に活躍した朱子学者の室鳩巢(一六五八―一七三四)が晩年に著述した随筆集。書名の「駿台」とは、邸宅があった神田の駿河台(すまがたい)のことで、駿河台の邸宅を来訪した門弟たちに語る体裁で記された。室鳩巢は、武蔵国谷中村(東京都台東区谷中)で生まれた。木下順庵(じもと じゅんあん)の門下となり、同門の新井白石(しんせい しろく)の推挙で幕府儒官となる。特に八代將軍吉宗の信任厚く、幕府より駿河台に屋敷を与えられた。湯島聖堂(ゆしま せいどう)において朱子学の講義を行い、赤穂事件(あこう じけん)(一七〇一年)においては事件を起こした赤穂藩の浪士を義士であると擁護したことも知られた。

参考

「こゆるぎのいそぎありく」という表現は『源氏物語』の「帚木(はきぎ)の卷などに見られる。方違(かたがへ)のために紀伊守の屋敷を訪れた源氏が、中流階級の女性である空蟬(うつせみ)(紀伊守の父の後妻)に興味を持ち、深夜にその部屋に忍び込むという場面で次のような描写がある。人びと、渡殿より出でたる泉にのぞきあて、酒呑む。主人も肴求むと、こゆるぎのいそぎありくほど、君はのどやかに眺めたまひて、かの、中の品に取り出でて言ひし、この並ならむかしと思し出づ。

現代語訳Ⅱ(源氏の君の) お供の者たちは、渡殿の下から湧き出ている泉に臨んで座って、酒を飲む。主人(の紀伊守)も酒の肴を探し求めようと、準備に動き回っている間、源氏

こうして夜も更けていくにつれて、夜寒が身に染み渡り、少しも寝ることができず、丑三つ時(＝午前二時過ぎ) ほどになったので、鐘の音も聞こえず、鶏の声もせず、なんとなく静かになるように思われたが、いつ(夜が) 明けるともなく、窓(のあたり) が白んでいった時に、家にいた童を呼び起こして、寝所の戸を開けさせると、夜の間に雪がたいそうすばらしく降り積もって、庭の草木も花が咲いて(いるかのようで)、急に春が来る心地がし、四方の山の端もすべて真っ白になって、人間世界が、まるで天上世界の白玉の楼閣かと自然と見誤られるちようどその時、近くの池の水鳥がそれぞれの声で鳴くのも、(ここから) 距離がないので聞こえる。さぞかし波に浮かんで眠るのは寒いだろうと、そんなことまでもの悲しさを加えて、それにつけても情趣を解する友人がいればなあと、人恋しく思ったその時、いつも手紙のやりとりをする人のもとからと言って、(使いの者が) 手紙を持って来た。急いで開けて見ると、(手紙には) 「めったにないすばらしい雪です。(あなたは) どのようにご覧になっているだろうか。さらにはこの雪(のせい) で、(あなたの) 起き伏しも気がかりだと思っています」と書いていたの(を見る) につけても、あの兼好法師が、雪がたいそう趣深く降り積もった朝に、ある人のもとへ言わなければならないことがあって手紙を送るということで、雪のことに何も言及しなかったところ、(その手紙の返事に) この雪をどのように見ると(兼好が) 一言も尋ねないと言って、(それは) 残念なことだと言ってきたことをふと思い出して、これはあちらからこのように気を遣って(雪のすばらしさについてどう思うか) 言って寄こしたのに、こちらから(雪のすばらしさについての) 返事がなければ、不満に思うだろうかと思ったので、使いの者をしばらく待たせて返事を書いてその最後の部分に、

空に降る雪は梢(すゑ)に咲く花であるのか。(いや、そうではないのにまるで花が) 散るのか咲くのかと自然と見誤られることであるよ。

と書いて、「それにしても今日はまったくさびしく過ごしています。気の合う仲間同士で誘い合わせてお越しくださいよ。それこそ本当の数寄者と思ってよいだろう」と言い送った。こうしてしだいに日が高くなる頃になって、門をたたく音がした。使用人に開けさせると、例の手紙を寄こした人が、いつもの人々を伴ってやってきた。形式どおりのもてなしをして、翁(＝私) はうれしく、寒さも忘れてにじり出て、互いに語り合ったが、酒を温めて出したところ、客人たちも皆酔いを進めて、高尚な話が大変楽しそうに見えた。翁は、

来客(きやく)をもてなす気持ちだけは準備のために歩き回るのに劣るだろうか、いや劣っていないよ、みなさん。

「私は、(老齢で) 足腰が弱っていますので、みなさんのために酒の肴を求めて歩き回る

の君はのんびりと屋敷の中を見渡しなさって、あの人たち(＝源氏の君の友人たち) が、中流階級(の身分) として取りあげて言った(家とは)、この家と同じ程度の家であったのだろうよと思い出しなさる。

また、本文末尾の漢詩について、書き下し文を補足しておく。

家は住す駿台の下、門は臨む万里の流れ。雲に隠る平野の樹、雪に棹す遠江の舟。

吾老いて安道に愧づ、客来皆子猷。草堂偏へに閑寂、喜びて故人と共に遊ぶ。

入試情報・解答時間

国語120分 大問3問 (論理・文学〔随〕・古文〔漢文含む〕)

「たまきはる」

(ファイルして保存しよう。)

建春門院中納言

【出題大学】 北海道大学

文・教育・法・  
経済学部(前期)

解答と採点基準

問1 イⅡで病気であるかどうかの判断がつかなかったとき

AⅡ5／BⅡ5  
Bがなければ全体0。

ロⅡ何事もないようにばかり申し上げていたので

AⅡ4 「ばかり」がなければ減点2。  
BⅡ4 「過去の「しか」を訳していなければ減点2。」  
CⅡ2

ニⅡどうしてこのように立つことができないでうつろひやるのか

AⅡ5 「疑問に訳していなければ減点2。」  
BⅡ3 「できない」がなければ不可。  
CⅡ2

問2 女院が作者だけに伝えた、不安と体調不良の苦しみを訴える言葉。

本文解説

鎌倉時代初期の日記文学(随想録)

女院はたいそう体調が悪く、近くお仕えしていて信頼のおける作者にだけは、そのつらさを伝えようとしたのであるが、作者は事態をそれほど重く受け止めておらず、女院も大事なように振る舞っていた。そんな中、十一月に入ってから女院はいよいよ立ち上がることができなくなるほど病状が悪化し、十一月七日にこの世を去ってしまった。作者はその悲しさとつらさを和歌によって表現した。

イⅡ品詞分解は次のとおり。

カ四・未	消用	過・体	名
思ひ分	か	り	し
ほ	ど		

「思ひ分」は動詞「思ひ分く」の未然形。「理解や判断をする・識別する」という意味。ここでは、女院が病気であるか否かの判断をするということ。「ほど」は程度や時間を表す名詞であるが、ここでは「頃」「とき」などと訳出するのが適当。

ロⅡ副助詞「のみ」は「ただけ」といった限定の意味だけでなく、強意の意味もあり、「ばかり」「特に」と訳出することもある。あとは、過去の助動詞「き」の已然形「しか」の訳出、確定条件を表す「已然形＋ば」を「ので」と訳出できているか、がポイントとなる。

ニⅡ品詞分解は次のとおり。

副	副	副	タ四・未	尊用	サ四・未	尊敬補	消・体
な	か	く	え	立	た	せ	ぬ
二重尊敬							

「など」は「どうして」「かく」は「このように」と訳出する。副詞「え」は打消の助動詞「ず」の連体形である「ぬ」と呼応しており、「できない」という不可能の意味を表す(副詞の呼応)。「せ」＋「おはしまさ」は、尊敬の助動詞「す」の連用形＋尊敬の補助動詞「おはします」の未然形で、二重尊敬となる。

問2(文意の理解)

まずは、二重傍線部ハの意味を理解しなければならない。「あらぬさまにも申して」の「あらぬさま」とは、「いつもとは違った様子」「本来とは違った様子」の意であり、ここでは、二重傍線部直前の「かたがた」(「あれこれ」の意)と合わせて考え、本来の女院の重篤な病状とは違うようにあれこれと申し上げた、と捉えるのが自然であろう。

登場人物の心情や物語の筋を簡潔にまとめる設問が多いが、基本的な単語や文法をきちんと理解し、それに即して現代語訳を行うことで、何を答えるべきかが見えてくる。たとえ難問であっても、基本的なことをきちんと押さえたいので取り組むことが肝要である。

考察

問題1(現代語訳)

AⅡ5 「作者だけに伝えた」がなければ減点4。  
BⅡ5 「不安」はなくても可。

問3 励ます作者の気持ちに應えるために、自分から弱気だと言って気丈に振る舞おうとする女院の健気な態度。(48字)

AⅡ4 「作者の気持ちに應える」がなければ不可。  
BⅡ2 「同内容可。」  
CⅡ4 「女院の」がなければ不可。末尾が「態度。」でなければ減点1。

問4 女院が突然亡くなったといういわしい現世のこの上ないつらさ。(29字)

Aの「女院が亡くなった」という内容がなければ全体0。  
AⅡ2  
BⅡ3 「現世」がなければ不可。  
CⅡ5 「つらさ」がなければ不可。

そのうえで、「聞かで」の意味を考える。「で」は打消の接続助詞で「ないで」と訳出するので、「聞かで」は「聞かないで」の意となる。では何を聞かなかったのか。ここは3～4行目にかけての「や、いかがせんず」と「申ししかば」がヒントとなる。女院が「(この苦しさを)どうしたらよいか」と作者に相談しているのに、作者は女院の病状を軽く捉えて何事もないように申し上げた、という記述である。この部分を読み取ることができて、二重傍線部ハ全体の意味を考えれば、「女院の苦しさを訴える言葉」という解答は容易に導けるだろう。

2～3行目にかけての「人候はぬ間に近く参りたれば(＝人が出仕していない間に作者が女院の近くに参上すると)」から、女院は信頼のおける作者にだけその苦しい胸の内を吐露していたことがわかるので、それを解答に入れるとなおよい。

問3(文意の理解)

難問である。まず、設問の条件を整理すると、次の二点が求められていることがわかる。

- ①誰のどのような態度かを説明する。
- ②その言動の意図を説明する。

①について、「心劣り」は注にもあるように、「意気地のない」「気が弱い」という意味。「うち笑む」は「微笑む」。したがって二重傍線部の現代語訳は「意気地のないことですね」と言って微笑みなさった」となる。つまり、本当は苦しいのに、笑顔を作って気丈に振る舞っているのである。二重尊敬が使われているので、当然女院の動作である。

ではなぜそのような態度を取ったのか、それが②の説明となる。ここで着目せねばならないのは、この女院の発言は、7行目の作者の発言中にある「ゆゆしく御心劣りのせさせおはします」の部分を受けているということである。訳すと「たいそう意気地がなくていらつしやいます」という意味であるが、この作者の発言は、立ち上がれない女院にあきれてではなく、むしろそういう女院を励ます

ために発せられたものであることをくみ取らなければならない。女院は、そんな作者の思いに応えるために、同じ「心劣り」という言葉を使って気丈に振る舞ってみせたのである。

#### ◎問4（文章全体の理解）

「いかにして」は、「どのようにして」という疑問の意もあるが、**後ろに願望や意志を示す表現が伴うと、「なんとかして（～したい・～しよう）」という意になる**。ここでは後ろに打消意志の「じ」を伴っているので、二重傍線部の現代語訳は「なんとかして思い出さないようにしよう」となる。

問われているのは、何を思い出さないようにするかであるが、二重傍線部直後に「見果ててしゝ限りを」とあり、倒置的に目的語が提示されていることがわかるので、ここの訳出が解答の基本となる。訳出すると「見尽くしてしまつたいとわしい現世のつらさの限りを」となる。設問の条件に「具体的に」とあることから、「いとわしい現世のつらさ」とは何であるかを説明しなければならない。その答えは女院が亡くなったことである。**和歌の直前に「我が身も心もなくなりにかば」という表現があり、これが女院が亡くなったことの婉曲表現であること**を読み取れたかが、この設問のポイントである。

#### 現代語訳

その夜から（女院の）御足が驚くほど冷えていらつしゃって、意識もはっきりしない。御祈禱も何事も（女院の治療のために）考えつく限りのことを思うとおりに申し上げたいと、一途に思っていたが、まったく聞き入れる人はいない。この尋常でない御出来事のはじめは、人々がまだ何とも（女院がご病気であるかどうかの）判断がつかなかったときから、人が出仕していない間に（私が女院の）近くに参上すると、「ああ、（この苦しさを）どうしようか」と（女院が）おっしゃったことが何度かあったので、（私は）「単に（御身体の調子が）いつもと違っているようなので、そのようにお感じになっているのです」などと、何事もないようにばかり申し上げていたので、（女院は）もうあれこれおっしゃることもなかった。後から思えば、どれほど（苦しく）お思いになっていたことであらうか、また（女

院にとり憑いた）御物の怪などの言葉なのであらうかと、あれこれと本来（の女院の病気）とは違ったように申し上げて（女院のお言葉を）お聞きしないでと、しみじみと後悔されることもどうしようもない。

十一月になってからは、（女院は）お立ちになることがなかったのだが、いつものお美しさのままでひどく驚く必要もないご様子に、人々はまったく何も言わず、私の心でさえ、それほど（重篤である）とも思い申し上げないようになどと感じて、「あなた様は、たいそう意気地がなくていらつしゃいます。そこまで大事でもございませんのに、どうしてこのように立つことができないでいらつしゃるのか」と申し上げたところ、（女院は）六日の早朝も、（お部屋の）障子の向こうにお出になるといつて、そつと座ったままで動いて（私と）御対面なさつて、「意気地のないことですね」と言つて微笑みなさつた愛おしさであつたが、たつたこれだけのことも度重なると、（私も）どうしようどうしようとたいそう心配することばかりが尽きないのである。（私は）大女院の臨終の際にお仕えしていた（穢れをまとつた）身で、（憚りがあつて直接に）看病申し上げられずにいるので、自ら手をさしのべ申し上げて、「この手をお握りください」と言つて、（女院の）御手の温かさのほどを知り申し上げようと思つていたのだが、七日の申の時ぐらいの後には、私は身も心も失つてしまったので（＝女院が亡くなつてしまったので、何とも言いようがない）。

なんとかして思い出さないようにしよう。見尽くしてしまつたいとわしい現世のつらさの限りを。

#### 作品（作者）解説

鎌倉時代初期に成立。原題名はなく、冒頭に「たまきはる命をあだに聞きしかど君恋ひわぶる年は経にけり」という和歌があることから『たまきはる』と仮題される。作者は藤原俊成の娘である建春門院中納言で、最晩年になって自らの半生を回想した作品である。平安時代の御所の華やかなありようを知らない若い女房たちに、御所の気風、女房のたしなみや躰、心得などを伝えたいという思いから、このような作品を書いたと考えられている。

#### 入試情報・解答時間

国語120分 大問4問（論理・論理・古文・漢文）



うげつものがたり  
「雨月物語」

うえだあきなり  
上田秋成

【出題大学】 香川大学（前期）

解答と採点基準

問1 ㊶㊸寵愛<sup>A</sup>な<sup>B</sup>さる

A㊸5 「特別に大切に愛する」なども可。

B㊸5 「尊敬語の訳がない場合は不可。」

㊶㊸きつと恨<sup>A</sup>みを報復<sup>B</sup>しまし<sup>A</sup>よう

A㊸5 「確述用法を明らかにする語がなければ減点2。」

B㊸5 「報復」は「仕返し」などでも可。」

㊶㊸すばらしい前<sup>A</sup>世<sup>B</sup>からの縁

A㊸5 「立派な」なども可。」  
B㊸5 「前世からの」はなくても可。「縁」は「お約束」も可。」

問2 妻<sup>A</sup>に迎えた富子は容姿の美しさに加え、宮中での経験から立ち居振る舞い<sup>B</sup>も優雅であり、そんな有様が真女子の面影と重なったから。

A㊸3 「富子の「容姿の美しさ」に触れていなければ不可。」

B㊸3 「富子の「振る舞い」に触れていなければ不可。」

C㊸4 「二人の「重なり・共通点」について述べていなければ不可。」

本文解説

◆近世の読本

蛇の化身である真女子にたぶらかされた豊雄は彼女を妻にしたが、神力によって

読み解けるかどうかが試される問題である。

考察

■問1（現代語訳）

㊶㊸㊸サ行四段活用の動詞「時めかす」は「時勢に合って栄えるようにする・特別に大切に愛する」の意で、「寵愛する」と訳すことが多い。尊敬語「給ふ」はハ行四段活用の補助動詞で「～なさる」の意。

㊶㊸㊸ハ行四段活用の動詞「報ふ」は、「身に受けたことに対し、それに見合ったことをして返す」という意味。良いことをされた場合、悪いことをされた場合のどちらでも使う。ここは「恨み」とあるので後者である。したがって、「報復する・仕返す」などの訳がふさわしい。「なん」は、強意の助動詞「ぬ」の未然形と、意志の助動詞「む（ん）」の終止形の組み合わせで、確述用法として「きつと～するつもりだ・確かに～しよう」などの意を表す。

㊶㊸㊸㊸ク活用の形容詞「めでたし」は現代では「祝うべきだ・喜ばしい」などの意で使うが、古文では「すばらしい・立派だ・見事だ」などが中心的な意味である。「契り」は「約束・宿縁・縁」の意で、「男女の間の縁」については「前世からの因縁によるもの」という仏教的な理解が一般的だった。

問2（文意の理解）

傍線部中の「かの蛇が懸想せしこと」とはリード文から、「蛇の精である真女子が、その正体を偽って豊雄に愛を告白し婚約したこと」を指しているとわかる。傍線部の前には豊雄が「富子と結婚したこと」が記されており、そのことが豊雄に真女子との関係を想起させたのは明らかであるが、それだけでは解答として不十分である。

（ファイルして保存しよう）

問3 豊雄<sup>A</sup>に恨みを述べる声は妻の富子ではなく、まぎれもなく真女子の声であり、妖怪の執念深さを実感したから。

A㊸7 「富子ではなく真女子の声であったこと」が明白でなければ不可。」

B㊸3 「執念深さ」に触れていなければ不可。」

問4 豊雄<sup>A</sup>が私を疎遠にするならば殺さなければならぬので、私<sup>B</sup>を遠ざけず昔の約束どおり夫婦になろうとしようと。

A㊸4 「疎遠にするならば殺す」ということが明らかでなければ不可。」

B㊸6 「夫婦になること」が明らかでない場合は、減点4。」

問5 源氏物語

真女子を退散させることができた。その後、別の妻を迎えた豊雄だったが、ある夜に妻が語るその声はまさしく真女子の声であった。

怪異を語る文章の中で、登場人物の心情が臨場感をもって描かれている。それを

（リード文 1～2行目）  
「大宅の豊雄は、雨宿りした先で都風の美女真女子と出会う」

（本文 4～5行目）  
「此の采女富子なるもの……。年来の大宮仕へに馴こしかば、万の行儀よりして、姿なども花やぎ勝りけり」

（本文 5行目）  
「此の富子がかたちいとおく万心に足ひぬる」

右図で記したように、富子が宮中生活で身につけた所作や優美さが真女子の「都風」であった様子を、そして、富子の容姿の美しさが真女子の「美女」の様子を豊雄に想起させたのである。したがって、解答はこの二つの要素を整理して記す必要がある。この設問でわかるように、解答の際にはリード文にあるヒントも見過ごさないように心がけたい。

問3（文意の理解）

シク活用の形容詞「あさまし」は、「意外なことに驚きあきれる」の意の重要単語。傍線部「聞くにあさましう」とあるので、解答では、何を聞いたのか、そして、そのどこが意外で驚きあきれたのかを説明する。傍線部の前には、結婚二日目の夜にはろ酔い気分の豊雄が富子に嫉妬めいた冗談を言ったところ、返事をした富子の声はまぎれもなく真女子の声であった、ということが記されている。富雄にはすぐに真女子が富子にとり憑いて話をしていることがわかったのであった。これが「あさまし」と思った理由である。傍線部には「身の毛もたちて恐しく」ともあって、真女子の声であったことだけでも「恐ろしさ」の説明にはなる。だが、リード文には「二度までも真女子に惑わされた豊雄」とあり、それを考えると、繰り返し現れる真女子に対して、本文1行目にあるように「妖怪の執ねき」を改めて実感したことが「身の毛もたちて」恐ろしく思った理由であろう。この点も解答に記したい。

◎問4（文章全体の理解）

傍線部は富子の姿をかりて語る真女子の発言の中にある。したがって、解答のためにはここまでの真女子の心情を確認しなければならない。

《真女子の発言》	
「古き契を忘れ給ひて、…悪くあれ」(9行目)	↓ 真女子の嫉妬(憎)
「…さるべき縁にしあれば又もあひ見奉るものを」(11行目)	↓ 真女子が思う宿縁(愛)
「強に遠ざけ給はんには、恨み報ひなん。…君が血を…灌ぎくごさん」(12行目)	↓ 真女子の決意(憎)
「あたら御身をいたづらになし果て給ひそ」(12～13行目)	↓ 豊雄への忠告(愛)

このように真女子は豊雄に対して愛と憎が入り混じった言葉を繰り返し述べており、豊雄との愛が成就することを望んでいることがわかる。それを裏付けるのが、リード文の次の説明である。

その女（＝真女子）の家を訪れた際に愛を告白され婚約する（リード文2行目）  
真女子は再び事情を偽って豊雄に迫り夫婦となる（リード文3行目）

このことから、今、真女子が具体的に望んでいるのは、以前のように豊雄との愛が成就し、夫婦となることだという内容が明らかとなる。解答には「夫婦になること」を書くことになるが、それははっきりさせるために、豊雄が自分を遠ざけた場合には「君が血をもて峰より谷に灌ぎくだ」して山を赤く染めてみせようという凄まじい表現によって示した「あなたを殺さなければならない」という「憎」の部分も対照的に書いておくといよいであろう。

◎問5（文学史）

作品名を考えて答える設問である。提示されたヒントは、「女が『もののけ』として男の愛を求めるという筋立て」と「平安時代の物語」という二つの要素である。これだけで受験生に答えを求めているのであるから、ここには「高校の授

らっしやるでしょう。あちら（＝宮中）の御付近では何某(なにがし)の中将や宰相の君などという方に添い寝なさることでしょう。今さらながら憎く思われます」などと冗談めかして言うのと、富子はすぐに顔を上げて、「昔の約束をお忘れになって、このような特に優れたところのない人を寵愛(ちゆうあい)なさる（こと）は、あなたにもまして（この人を）憎く思います」と言うのは、姿かたちこそ（富子に）変わっているけれども、確かに真女子の声である。（豊雄はそれを）聞くと驚きあきれ、身の毛もよだつて恐ろしく、ただもう途方に暮れるばかりであるが、女はにっこりして、「あなた様、決して怪しみなさいますな。海に誓い山に誓ったことを早くもお忘れになったとしても、そうなるはずの宿縁があるので再びお逢い申し上げることだなあ。他人の言うことを真実のようにお思いになって、もし無理に（私を）遠ざけなさるなら、きつと恨みを報復(ほうふく)しましょう。紀州の山々がどれほど高いとしても、あなた（を殺して、その）血で山の頂上から谷に注ぎ落としましょう。せつかくのお体をむだに死になさるな」と言うので、（豊雄は）ただもう震えるばかりで、今にも取り殺されそうな気持ちで気を失う寸前であった。屏風の後ろから「ご主人様、どうして機嫌を悪くなさっているのですか。このようにすばらしい前世からのご縁でありますのに」と言っ

て出てきたのは（真女子の召使の）まろやである。（豊雄はそれを）見ると再び肝をつぶし目を閉じて俯(うつむ)けに倒れ伏す。（二人は）なだめたり、脅かしたりして代わる代わる話しかけるけれども、（豊雄は）ただもう死んだふうになったまままで夜が明けてしまった。

作品（作者）解説

上田秋成による読本で、一七七六年刊行の怪異小説集。九つの短編から成る。中国の小説を翻案し、そこに日本の古典などを重ね合わせて擬古的な和文で書いたもので、後世の読本作者に大きな影響を与えた。

上田秋成（一七三四～一八〇九）は少年期に懷徳堂で儒学を学び、十代後半からは俳諧をたしなんだ。その後、和歌を独学し、三十代には国学を学ぶ。この頃に『雨月物語』を刊行。国学の分野では本居宣長との論争が有名である。『春雨物語』『癩癧談(らみぢんたん)』など多数の作品が残っている。

業でも学ぶ有名な作品」という三つ目の要素も提示されていると考えてよい。これらの要素から考えつく作品は『源氏物語』である。

真女子の声で語られる言葉に、次のような表現がある。

「かくことなる事なき人を時めかし給ふこそ、こなたよりまして悪くあれ」  
（9行目）

そして『源氏物語』の「夕顔」の巻には、物の怪（六条御息所の生霊とする説もある）が光源氏の枕もとで語る、次のような表現がある。

「かくことなる事なき人を率ておはして時めかし給ふこそ、いとめざましくつられ」

比較すれば明らかのように、上田秋成は『源氏物語』のこの場面を踏まえて書いたものと推測できる。したがって、解答は『源氏物語』である。

現代語訳

父母や長男夫婦は、この恐ろしかった出来事を聞いて、ますます豊雄の過ちではないことを気の毒に思い、一方では妖怪の執念深さを恐れた。「こうして豊雄を独身にしておいたから、こんな災いに巻き込まれたのだらう。（結婚相手にふさわしい女性を探して）妻を迎えさせよう」と言って相談した。芝の里に芝庄司という者がいる。娘を一人持っていたのを、宮中の女官として差し上げていたが、このたびお暇を申し出て（お許しを）頂き、この豊雄を婿に（したい）と言って、仲人をたてて大宅家のもとに申し入れて来た。うまく話が運んで、すぐに婚姻を取り結んだ。こうして都へも迎えるの者を送ったので、この女官の富子という娘も喜んで帰ってくる。長年の宮中でのつとめに馴れてきているので、あらゆる立ち居振る舞いをはじめとして、姿かたちなども華やかで優雅であった。豊雄はここに（婿として）迎えられてみると、この富子の姿かたちはたいそう美しくすべてに満足したので、あの蛇の精が自分に思いをかけたこともぼつぼつと思い出す程度であるのだらう。

初めの夜は何事もなかったので記さない。二日目の夜、（豊雄は）いい気分の酔い心地で、「長年の宮中の生活で、（あなたは私のような）田舎者はやはりわずらわしくお思いでい

参考

問5の文学史の設問は『源氏物語』の知識がなければ、まったく答えにたどり着くことができない。「国語では、授業で学んだ文章がそのまま入試問題で出題される可能性は低い」と考えて、定期テストが終わればすぐに学んだことを忘れてしまう人もいるかもしれないが、意外にそういうものではない。高校の授業で習う基本的なことは、さまざまな形で入試に関係する。特に共通テストに変わってからはその傾向が強まったように思われる。目先の知識だけにとらわれず、その知識がどのようにつながっていくのだろうかという意識と好奇心を持って学び続けてほしい。

入試情報・解答時間

国語 90分 大問4問（論理・文学・古文・漢文）



解答と採点基準

問1 ① 三位の中将

② 右大将（父大臣）

問2 <sup>A</sup>にわか雨が降ったり止んだりする不安定な天気<sup>B</sup>に、季節が秋から冬になつたことを感じながらも、気持ち<sup>C</sup>が落ち着かない様子。

A 4 「降ったり止んだりして不安定だ」という内容がなければ不可。

B 4 「季節が秋から冬になる」、「初冬である」という内容がなければ不可。

C 2 「天気と気持ちが同調している内容があれば可。」

問3 <sup>A</sup>娘を<sup>B</sup>大切に育てな<sup>C</sup>さっているそうだが

A 2 「娘」は「姫君」でも可。

B 4 「尊敬表現がなければ不可。」

C 4 「伝聞の意味がなければ不可。」

問4 <sup>A</sup>母君は、<sup>B</sup>姫君を入内させると<sup>C</sup>たくさんの女性にまぎれてしまうのではな<sup>D</sup>いかと心配で（お気が進まずにいらつしやる。）（38字）

A 2  
B 3 「入内させる」は「女御にする」でも可。  
C 3 「同内容可。」  
D 2

問5 <sup>A</sup>姫君の、二月の微風に揺れる柳のように<sup>B</sup>弱々しく<sup>C</sup>たおやかな様子。（30字）

A とC がなければ全体0。

A 3

B 3 「二月の微風に揺れる」は同内容可。

C 4 「弱々しい・か弱い」といった内容がなければ不可。

問6 <sup>A</sup>忍んで通つていたことを右大将に見<sup>B</sup>つかり怒りを買<sup>C</sup>い、毎夜見張りを<sup>D</sup>つけられ、三位の中将は右大将の姫君のもとに手紙を送ることも通つこともなくなつたということ。（76字）

A 3 「右大将（父大臣）に見つかる」という内容がなければ不可。

B 3 「同内容可。」

C 4 「中将が姫君に手紙を送ることも通うこともできなくなつた」という内容がなければ不可。

本文解説

◆中世の物語

三位の中将が右大将の姫君と会う場面。姫君の存在を小侍従の君から聞き、実際に対面した際の姫君の様子と、そこに踏み込んできた右大将の様子が書かれている。

考察

■問1（動作の主体）

① ①「じつと留ま<sup>て</sup>ていらつしや<sup>つ</sup>た」の意。この長い一文の冒頭は、「姫君を御覧すれば…（姫君をご覧になると…）」で、二重傍線部の直前に「立ち帰り給はんやうなくて（引き返しな<sup>さ</sup>る方法がなくて）」とあるので、三位の中将が姫君のところへ行き、そして帰ろうとしているが帰れない状況であることがわかる。

② ②「人もゆるさぬ此の君を…我をおしてさやうのことはせらるまじ（誰人も許さないこの姫君を…私をさし置いてそのようなことは許されるはずがない）」と「おどろおどろしく叱」つたのは、姫君の父親である右大将（父大臣）。

■問2（修辞技巧）

本文冒頭にも「神無月（陰暦十月）のころ」とあり、その「神無月」で始まる和歌の中にも「冬の初め」とあるので、季節は初冬。「降りみ降らずみ」の「み」は接尾語で、このように動詞の連用形と打消の助動詞の連用形に付いて繰り返し用いられる場合は「…たり…なかったり」と訳す。「さだめなき」とあるので、雨が「降ったり降らなかったり、定まらない」様子を表している。それに、まだ妻となるべき女性と会えない中将の「定まらない・落ち着かない」気持ちを合わせてまとめよう。

■問3（現代語訳）

動詞「かしづく」は「大切に世話をする」意で、「親が」であれば「子を大切に養育する」となる。「給ふ」は尊敬の補助動詞で「…なさる」と訳す。その下の「なる」は「なり」の連体形で、意味の識別は頻出事項である。

リード文から、主人公が三位の中将であることと、どのような場面かがわかるので、各文の動作主や会話主は捉えやすい文章であろう。

《助動詞「なり」の意味の識別》

・連体形に接続…断定（～である）

・終止形（ラ変型の活用語は連体形）に接続…伝聞（～そうだ）・推定（～ようだ）

\*終止・連体が同形の語の場合は文脈で判断

ここでは「給ふ」がハ行四段活用動詞のため、終止形と連体形は同形で判断がつかないが、小侍従の君が右大将についての噂話をしているという文脈から、伝聞と判断する。

■問4（文意の理解）

「誰の心情か」は傍線部Cを含む一文の途中に「母君」と明示されているので、解答は「母君が」から始めよう。「どのような理由によるものか」も、この一文に書かれた姫君の父親と母親の対比から読み取れる。

「女御に」と父大臣かしづき給ふ

↔

母君あまたの中にまじらひ給はんことを、心もとなく思し召して

「（天皇に入内させ）女御にしたい」と考えて大切に養育している父親に対して、母親は女御となって入内し、大勢の中で宮仕えすると娘がまぎれてしまうのではないかと不安に思っている。この内容を、制限字数と「お気が進まずにいらつしやる」につなげる点に注意してまとめたい。

■問5（文意の理解）

「柳」は美しい女性のたとえに用いられる。文頭に「姫君を御覧すれば」とあるので、姫君の様子であることがわかる。その様子は、傍線部Dに「如月の初風にもなびきぬべき柳（陰暦二月の春の初めに吹く風にもきつとなびくような柳）」と表現されている。「三十字以内」という字数指定を考えると、傍線部直前の「まことにいまだきびはにたよとして（本当にまだ幼くか弱くて）」の



部分も含めて答えることが求められる。「きびなり」は「幼くてか弱い」意の形容動詞。この意味を知らなくとも、ここでは春の初めの柳というたとえから「弱々しい」などの表現を導きたい。

◎問6（文章全体の理解）

「具体的に」とあるので、「何がどうなった」のかを本文に即して答える。文中には、「**また二度とも、言の葉のつてだに仲絶えて、…あかめ名残を互ひに忘れ形見にて**（＝もう二度と、手紙をやる手段さえ絶えて、…尽きない名残を互いに忘れないための形見として）」（12～13行目）とあるので、中將と姫君の逢瀬がかなわなくなり、手紙さえ途絶えてしまった、ということだとわかる。

その理由は問1②と重なるが、右大將が、「**中將几帳のかげに隠れ給へる後ろ影を御覧じて、…おどろおどろしく叱り給ひて**（＝中將が几帳の陰にお隠れになった後ろ姿をご覧になって、…恐ろしくお叱りになって）」（9～12行目）、姫君に「**夜ごと**に人をつけてまぼらせらるれば（＝毎夜人をつけて見張りをさせなさるので）」（12行目）とあるのをまとめよう。

現代語訳

陰暦十月の頃、降ったり降らなかったり、定めのない（初冬の時雨の）頃は、やはり手持ちぶさたもいっそうどうしようもなくもの寂しいちょうどその時、小侍従の君といって（三位の中將の）御乳母のおばの娘がやって来て、「右大將殿の姫君が、お年は十六歳ほど思いやりが深く、あらゆることを何でも十分に理解してしまう。ご容貌は並ぶ方もございません」などと、話をするのを中將がお聞きになって、会いたいと思ひになり、小侍従の君をしきりにせき立てなさるので、「女御に（したい）」と父大臣が娘を大切に育てなさっているそうだが、母君は大勢の中で宮仕えなさることを、不安に思ひになって、お氣が進まずにいらっしゃる。それ以外はまだ決まりなさることもおありではない」と申し上げると、方々にせき立てて、小侍従が仲立ちして（月の入りが早い）夕月の頃の夜に（中將を姫君のところへ）入れ申し上げた。

（中將が）姫君をご覧になると、本当にまだ幼くか弱くて、陰暦二月の春の初めに吹く風にもきつとなびくような柳の様子に見えなさったありさま（をご覧になって）、ご愛情

は比類なく、末永く来世まで共にと願う世の慣いにもひけをとるまい、と固く約束しなさるうちに、長い夜だが早く夜明けとなって、ご門に人が多くて、（三位の中將は）引き返しなさる方法がなくて部屋の中に閉じ込もっていらっしゃった。

そうすると今日は亥の子の祝いだと言って、餅などをさまざまに差し上げなさるところに、父大臣も不意に（姫君のお部屋に）お越しになると、中將が几帳の陰にお隠れになった後ろ姿を（大臣が）ご覧になって、また、懷紙や、帯などが散り乱れているのをご覧になって、激しくお怒りになり大声で非難しなさって、「誰人も（交際することを）許さないこの姫君を、目障りにもこっそり通う者がいる。女御に（しよう）と思うのに、誰であってもこの世の中で、私をさし置いてそのようなことは許されるはずがない」などと、恐ろしくお叱りになって、毎夜人をつけて見張りをさせなさるので、もう二度と、（逢うことはもちろん）手紙をやる手段さえ絶えて、夢でも通う道もないので、尽きない名残を互いに忘れないための形見として、（二人の逢瀬は）まったく絶えてしまったそうだ。

作品（作者）解説

室町時代成立とされる短編物語。作者未詳。詩歌管弦にすぐれ帝の覚えもめでたい三位の中將が主人公。中將は妻とすべき女性を求め、一年に十二人の女性と会ったが満足できず失望し、吉野に籠もった。そんな中將を惜しんだ院より女四の宮を賜り、中將は関白に昇進して子孫も繁栄したという内容。

参考

中世の物語には、『源氏物語』などの中古の古典作品を踏まえた描写や表現が多い。この「窓の教」には、中將が出会う女性たちの性格や行動が書かれているため、女性批評、女性に関する教訓的な要素があり、『源氏物語』「帚木」の巻の雨夜の品定め（＝五月雨の降る夜、光源氏や頭中將たちが女性の品評をする場面）を彷彿とさせる。

入試情報・解答時間

国語90分 大問3問（論理・古文・漢文）

11 「唐物語」

からものがたり

(ファイルして保存しよう。)

【出題大学】 熊本大学 文・教育・法・  
医(保健看護学)学部 (前期)

解答と採点基準

問 1 c

問 2 ア⇨容貌が昔とは違つて衰えてしまつたので

A ⇨ 3 / B ⇨ 4

C ⇨ 3 (文末が原因・理由を示す形でなければ不可。)

イ⇨商人は思いやりがないので

「思いやり」は「愛情」などでも可。

「別解」 商人は情趣を解さないの

「情趣を解さない」は「無風流」などでも可。

問 3

白楽天はわびしい左遷生活の中で聞いた琵琶の音色に哀愁の思いを深めたが、夫に冷遇され寂しい生活を送る女の不幸な身の上話を聞いて、いつそ  
う哀愁の思いが深まつたという心地。

A ⇨ 3 (琵琶の音色に対する愁いの気持ちが書けていれば可。)

B ⇨ 3 (女の話に対する愁いの気持ちが書けていれば可。)

C ⇨ 4 (愁いの気持ちが深まつた(増した)という内容であれば可。)

「別解」 女がかつて帝にも認められ、人々にも賞賛されていたのに、今は落ちぶれて荒涼とした月を見ていると聞き、白楽天も都から左遷され

病を得た自らの境遇と重ね、女に同情したという心地。

A ⇨ 3 (女の過去と現在の境遇について書けていれば可。)

B ⇨ 3 (白楽天の過去と現在の境遇について書けていれば可。)

C ⇨ 4 (白楽天が女の境遇と自分の境遇を重ねた、という内容があれば可。)

問 4

光源氏も時流に逆らえず海辺でわびしい退去生活を送つたことを読者に想起させ、白楽天の左遷生活のわびしさを強調しようとする意図。

A ⇨ 3 (同内容可。ただし退去生活における「わびしさ」「愁い」など、白楽天の状況に共通する要素が必須。)

B ⇨ 3 (白楽天の左遷生活に言及していれば可。)

C ⇨ 4 (「わびしさ」は「愁い」「つらさ」などでも可。)

問 5

女の奏でる琵琶の音色を聞いて人々は皆涙を流したが、この音を聞くほかの誰よりも白楽天は激しく涙を流し、涙で袂がくた became になったという状況。

B がなければ全体 0。

A ⇨ 3 (同内容可。)

B ⇨ 7 (激しく涙を流した、という内容であれば可。)

本文解説

中国古典をもとにした物語

わびしい左遷生活を送っていた白楽天は、ある夜美しい琵琶の演奏を耳にする。

● 考察

● 問 1 (文法)

二重傍線部が含まれる一文には係助詞がなく、ここで文が終止しているため、二重傍線部は終止形であることがわかる。

サ四末	受用	完終
流さ	れ	ぬ

連用形に接続し、終止形で「ぬ」の形をとることから、完了の助動詞「ぬ」の終止形であると判別できる。問 1 は、波線部から完了の助動詞「ぬ」を探す作業となる。この助動詞の活用はナ変型なので、「な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ね」となる点に留意しておく。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	ナ変型

a ⇨ 連体形に接続しており、連体形の下に体言を補うことができる形ではない。文脈からは「ところ」と下に接続していると考えられるので、接続助詞「に」と判別できる。

b ⇨ 体言に接続し、文脈から「に・に」に対して」と対象を示していると解釈できるので、格助詞「に」。

c ⇨ ラ行四段活用動詞「なる」の連用形に接続しているので完了の助動詞「ぬ」の連用形(過去の助動詞「き」が下に接続しているため、連用形となっている)。

d ⇨ 下に、未然形か已然形のどちらかにしか接続しない接続助詞「ば」が付いており、完了の助動詞「ぬ」の活用に当てはまらないので x (d は打消の助動詞「ず」の已然形である)。

e ⇨ ナ行変格活用動詞「去ぬ」の連体形の活用語尾。ナ行変格活用動詞は「死ぬ」「往ぬ(去ぬ)」の二語のみなので、覚えておくこと。

f ⇨ 波線部の下に名詞「こと」が付いているので連体形と判別できるが、完了の助動詞「ぬ」の連体形は「ぬる」なので x (f は打消の助動詞「ず」の連体形)。

● 問 2 (現代語訳)

ア⇨まずは品詞分解してみる。

名	名	連体詞	断用	係助	ラ変末	打消用	ハ下二用	完用	過已	接助
見目	形	ありし	に	も	あら	ず	哀へ	に	しか	ば

「見目」も「形」も「外見・容貌」の意味。「ありし」は連体詞で「以前の・過去の」の意味。已然形に接続する接続助詞「ば」は確定条件で、ここでは原因・理由を示す。

イ⇨「情けなければ」は形容詞「情けなし」の已然形「情けなけれ」に接続助詞「ば」が付いた形。「情けなし」には「思いやりがない」「情趣を解さない」「嘆かわしい」などの意味があるが、下に続く「我を惜しむこといと浅し(⇨私を惜しく思う気持ちはたいそう薄い)」との整合性から考えると、「思いやりがない」か「情趣を解さない」で訳するのが適切。「思いやりがない」ならばそもそも女に対する思いやりがない(ので女に冷たい)という解釈になる。「情趣を解さない」ならば、情趣を解さないために女の価値がわからない(ので女に冷たい)という解釈が成立するため、別解とした。

● 問 3 (文脈把握)

傍線部①は、ナ行下二段活用「取り重ぬ」の連用形+完了の助動詞「たり」の連体形。「取り重ぬ」は「加える・重ねる」の意。直訳すると「加わった心地(または、重なった心地)」となる。傍線部の直前で、琵琶の音色を聞いて哀愁の思いが深まり、そのうえ「この語らひ」(⇨白楽天の発言の前、5～10 行目までで語られている、女の身の上話)を聞いて「加わった心地」がしと言っているの、哀愁の思いが「加わった」と考えるのが自然である。

ただし、「取り重ぬ」を「重ねる」の意でとり、傍線部を「重なった心地」として訳すと、傍線部直後「我も君も愁への心同じからずや(⇨私もあなたも哀愁の気持ちは同じではないか)」という部分から、白楽天が自分と女の境遇を重ねているという解釈も成り立つので、後者の解釈を別解とした。

問4 (文意の理解)

設問文にヒントがある。『源氏物語』の「須磨」巻における光源氏の境遇と、**白楽天の境遇は、都を離れてわびしい生活をするという点で共通している**。傍線部の前後でも白楽天の左遷生活のわびしさや愁いが語られていることから、よく知られた作品である『源氏物語』を引用することで、読者に、より強く左遷生活のわびしさを想起させようという狙いがあると考えられる。

問5 (解釈)

まず傍線部の意味をとる。「袂」は着物の袖の部分のこと。「朽つ」は「こわれる・くずれる・腐る」の意。**袖で何度も涙を拭う仕草によって、袖の形がくずれた**という表現。同様の表現に「袖が濡れる」「袖を絞る」などがあり、百人一首などにも見られる慣用表現なので、覚えておくといよい。

「どのような状況を指すか。具体的に説明せよ」という問いなので、白楽天が激しく涙を流すに至った経緯（傍線部の直前部分）にも触れる。

現代語訳

昔、元和十五年の秋に、白楽天は罪もなく江州という所に流された。次の年の秋、入江のほとりで、夜、友を見送った。松風、波の音が、身にしみる夕べ（の情景に）、愁いの涙はたいそう抑えがたく、夜も更けていく時分に、空に澄み渡っている月の光が（海面に映り）、波に応じて揺れているのを見ても、私の身だけが（海に）沈むわけではないのだよ、（月も同じく沈んでいる）と思案にくれながら、人氣も無い波打ち際をなんとなく頼りなく不安に思いながら歩いて行くと、遙か遠くから波の上に、琵琶の音色がさまざまに聞こえて、ためし弾きなどの様子は、世に比類がないほど（の美しさ）である。この音を聞いて、（白楽天は）不思議だと思ふ気持ちを抑えることが難しい。漁師、武士よりほかに（いはいはずのこの辺鄙な入江に）、いったい誰に風流心があるのだろうかと思われたので、音色をたよりにして、「誰であるか」と尋ね問うと、「私はここの商人の妻である。昔、十三歳の時、琵琶（の演奏）を習得し、世の中でも秀でていた（腕前であった）。帝の御前で一度演奏をした時に、（優れた演奏の褒美として）たくさん引き出物を（帝は私に）お与えになった。さらに、（人々は私の）美しい容貌に対して賞賛し、（私を）見る人も（私

の演奏を）聞く人もすべてが（私を）恋い慕い、（もの思いで）心をすり減らした。しかし、春は過ぎ秋は終わり、容貌が昔とは違って衰えてしまったので、世の中で生きていく力を完全に失い、（生きていく）手だてがなくなってしまうたので、商人と夫婦の縁を結んで、この国の民となった。商人は思いやりのがないので、私（との別れ）を惜しく思う気持ちはたいそう薄い。私を熱心に（愛することを）しないので、（家から）出て去った後、戻ってくる気持ちを（本来持つべきなのに、夫の義務を）怠けている（ので帰ってこない）。（夫の）帰る時間が遅いので、（私は）自分から必ずしも待たないというわけでもない（＝つい夫の帰りを待ってしまおう）。このような状態のまま、ただ空っぽの舟を見つめながら、秋の月で寒々としている月だけを見ている」と言った。

白楽天は、「私は、琵琶の音色を聞いて、哀愁の気持ちが深くなった。その上この話を聞いていっそう（哀愁の）気持ちが増した。私もあなたも哀愁の気持ちは同じではないか。決してその哀愁が尽きないことを悟らなければならない。私は去る年の秋に官位を失い、都を離れてこの場所で落ちぶれた。さらに病で薙に倒れ伏して立ったり座ったりすることが容易ではない。以前からの寂しい海辺の波風よりほかに仲間となる人もいない住処で、葦の上のほうの葉を過ぎていく強風や、あちらこちらで人が舟を呼ぶ音ばかり聞こえて、いまだに音楽の音色を聞かない。今夜のあなたの琵琶の音色を聞くと、ほとんど（清浄で幸福に満ちているという）天界の音楽を聞くようだ」と言った。

これを聞く人は皆涙を流した。その中でも白楽天は一人（激しく涙を流して）袂が朽ちたと思われた。

作品（作者）解説

『唐物語』は題材を中国の故事にとり、和文で叙述し、作中人物の心情や作者の感想を吟じた和歌をはさんだ説話物語集。中国古典と和歌が融合した作風が特徴。成立は十二世紀後期と思われ、作者は藤原成範が有力視されている。『白氏文集』『史記』『蒙求』『漢書』などをもとに、二十七編から成る。

入試情報・解答時間

国語120分 大問4問（論理・文学・古文・漢文）



えいがものがたり

(ファイルして保存しよう)

【出題大学】 東京都立大学 文系（前期）

解答と採点基準

問1 「かわいらしく見申し上げなさるだろう」

「かわいらしく」がなければ全体0。  
「見申し上げ」と謙譲の補助動詞の訳がなければ減点2、「なさる」と尊敬の補助動詞がなければ減点2、「だろう」と推量の意で訳していなければ減点2。

(2) 趣深くいかにも珍しい物たち

A 5 「趣深く・美しく」と訳していなければ不可。  
B 5 「珍しい・めったにない」と訳していなければ不可。

(3) 上品で美しく、驚きあきれるほどまでにすばらしい様子でいらいやる

A 4 「美しく」と訳していなければ不可。  
B 4 「驚きあきれるほど」と訳していなければ不可。  
C 2 「尊敬の補助動詞がなければ不可」

(4) お酒などは少し召し上がった

「きこしめし」を「召し上がる」と訳していなければ全体0。文末を「た」と過去に訳していなければ減点2。

問2 ① Ⅱ F ② Ⅱ A ③ Ⅱ B ④ Ⅱ G ⑤ Ⅱ H

問3 (a) Ⅱ A (b) Ⅱ E (c) Ⅱ A (d) Ⅱ A

(e) Ⅱ A (f) Ⅱ Y (g) Ⅱ Y (h) Ⅱ K

問4 女御の持ち込んだ調度類に気を引かれすぎて、政治がおろそかになるなど、天皇として愚かだといふ。

A 4 「女御の道具類に」「気を引かれる」などと具体的になければ不可。  
B 3 「同内容可」  
C 3 「天皇として」といった内容がなければ不可。

問5 ねびととのほらせたまひ、およすけさせたまへれ (22字)

問6 笛は音色を聞くものであり、見るものではないという内容で、打ち解けない女御に吹いていた笛を見せようとしたのに対して、女御が機知に富む返答をしたという状況。

A 4 「同内容可」  
B 3 「一条天皇が女御に笛を見せた」という内容がなければ不可。  
C 3 「女御が答えた」という内容がなければ不可。

問7 初めは様子や振る舞いに感心し、理想的な娘の姿だと感じたが、女御の部屋香りや調度類のすばらしさにすっかり魅了され、女御の幼さと自分を比べて自虐的な冗談を言うようになり、周囲も賞賛するほど寵愛を深めた。

それぞれ同内容可。  
A 2 / B 2 / C 2 / D 2 / E 2 (100字)

本文解説

◆中古の歴史物語

リード文と注から、「上」＝一条天皇と「女御」＝藤原彰子の言動と、それに対する評価が書かれた場面であることがわかる。第一段落・第二段落で、女御として入内した長女彰子を褒めることによって、藤原道長を賛美する立場であることが明らかである。また、一条天皇の彰子への寵愛の深さを語り、この入内が成功であったことが記されている。

考察

■問1 (現代語訳)

(1) 形容詞「らうたし」を正確に、十二歳の彰子の評価として訳出する。「見たてまつらせたまふべし」を品詞分解すると、次のようになる。

マ上一用	ラ四末・謙譲(補)	専用	ハ四・終補	推終
見	たてまつら	せ	たまふ	べし

(2) 「物ども」は櫛や硯の箱のような道具類で、「をかし」も「めづらかなり」もその様子を形容する語として訳す。

(3) 形容動詞「きよらなり」は、一条天皇の評価として訳出する。形容詞「あさまし」は「驚きあきれるほどだ」をよい意味で用いていることがわかるように、「すばらしい」などと補うのがよい。

(4) 尊敬語「きこしめす」は何を「きこしめす」かによって訳し方に注意する。ここでは「大御酒」「酒」の尊敬表現があるので、「召し上がる」の意。

■問2 (文法)

- ① Ⅱ 断定。体言「そら薫物」に接続している。
- ② Ⅱ 打消。「なら」は①で答えたように断定の助動詞「なり」で、その未然形の「なら」に接続し、下に接続助詞「ば」を伴って「くないので」と訳せる。
- ③ Ⅱ 伝聞・推定。上の「あん」は、ラ変「あり」の連体形「ある」の撥音便形

で、この場合、「なり」は伝聞・推定の助動詞である。

④ Ⅱ 使役。ここでの話題は部屋香りということで、香を「香らせる」と解釈できる。直後の「渡らせたまひて」の「せ」は尊敬で、「せたまひ」で最高敬語となっている。

⑤ Ⅱ 完了。上の「せたまへ」は最高敬語で、この場合「たまふ」は尊敬の補助動詞なので、ハ行四段活用。よって「たまへ」は已然(命令)形である。已然(命令)形に接続する助動詞は完了の「り」で、「せたまへれば」は「くなさったので」と訳せる。

問3 (動作の主体)

(a) Ⅱ 「姫宮」の注がヒントとなる。「脩子内親王をこのように」は彰子のように育てたい」と思いになるのだから、主体は親である上。「思しめす」は尊敬表現の中でも敬意の度合いが高い、最高敬語の動詞であることも覚えておこう。

(b) Ⅱ 文頭にある他御方々が、大人びていらつしやる。「ねびととのほらせたまひ」と「およすけさせたまへ」が並列となっている。

(c) ・(d) Ⅱ 同じ段落にあり、上が打橋をお渡りになる、そして藤壺で過してお帰りになる。この段落の各文の主語は省略されているが、彰子の住居である藤壺での、一条天皇の言動が書かれている。

(e) Ⅱ これも一条天皇についての記述で、リード文もヒントにして、上が二十歳くらいでいらつしやる。「おはします」も敬意の度合いが高い、最高敬語の動詞である。

(f) Ⅱ 笛を美しく吹く一条天皇に対して、直後で「これ：見たまへ」と指摘されているように、女御殿が打ち解けない様子である。

(g) Ⅱ 会話文の前に「女御殿」と明記されている。

(h) Ⅱ 会話文の前に「さぶらふ人々」と明記されている。この会話文中に「あなめでたや」とあり、さぶらふ(Ⅱお仕え申し上げる)人々が「あすばらしいなあ」と言い心に思う、と読むことができる。

#### 問4（文意の理解）

「痴れ者＝愚か者」とは、どのようなことが「愚か」なのか、について答える。

「あまりもの興じするほどに、むげに政知らぬ（＝あまり面白がっているうちに、まるで政治のわからない）」（8行目）

#### 十 何に対して「面白がっている」のか（6～8行目）

- ・「はかなき御櫛の箱、硯の筥の内よりして、をかしうめづらかなる物ども」
- ・「御厨子など」
- ・「弘高が歌絵かきたる冊子に、行成君の歌書きたるなど」

女御の調度類

7行目に「明けたてばまづ渡らせたまひて（＝夜が明けるとすぐにお越しになつて）」とあるように、一条天皇は清涼殿の夜御殿で寝なければならぬが、調度類を見るために、夜が明けるとすぐに彰子のもとに通う。このことを「愚か」と表現している。

#### 問5（文脈把握）

この会話文中では、**あまりに幼い様子の彰子**に対して一条天皇自身を表す「翁（＝老人）」という言葉があるが、制限字数からするとこれは別の表現が求められている。本文中で彰子と対照的に語られていたのは「他御方々」で、注で具体的に説明されているように、彰子より年上の中宮・女御たちを指す。2～3行目の「他御方々みなねびとのほらせたまひ、およすけさせたまへれば（＝彰子以外の中宮・女御たちは皆成長して容姿が整っていらつしやり、大人びていらつしやったので）：」の部分から、指定された字数に合わせて抜き出す。

#### 問6（文意の理解）

**発話の内容**として傍線部を現代語訳すると、「笛は音色を聞くが、見るものであろうか、いや、そうではない」。一条天皇が「見たまへ（＝ご覧なさい）」と言ったのに対して、**彰子は「笛は聞くものであって、見るものではないでしょう」**

と機知に富む返答をしたのである。**発話が出た状況は、「うちとけぬ御有様なれば、『これうち向きて見たまへ』と申させたまへば（＝打ち解けないご様子であるので、『この笛をこちらを向いてご覧なさい』と申し上げなされると）：」と語られている。「これ」とは、この前の文にある「御笛」のことであるから、**一条天皇が彰子のために笛を吹いていたことを含めてまとめよう。****

#### ◎問7（文章全体の理解）

「一条天皇の気持ちの移り変わりに添って」とあるので、前から順に書き並べていく。

「女御の御有様もてなし、あはれにめでたく思ひ見たてまつらせたまふ。『姫宮をかやうに生ほしたてまつらばや』と思しめさるべし（＝女御のご様子や振る舞いは、しみじみと見事だと思ひになり見申し上げなさる。『脩子内親王をこのように育て申し上げたい』と思ひになるはずだ）（1～2行目）

←

「この御方の匂ひは、：他御方々に似ず思されけり（＝このお方の香りは、：彰子以外の中宮・女御たちとは違うと思ひになった）」（4～6行目）

また、問4で答えたように、女御の調度品のすばらしさにも魅了されている。また彰子の言動に対しては、問5で触れたように、

「あまり幼き御有様なれば、参りよれば翁とおぼえて、われ恥づかしうぞ（＝あまりに幼いご様子なので、お近くに寄り申し上げると老人かと思われて、私は恥づかしくなるよ）」（10行目）

や、問6で説明した彰子の発話に対しても、

「七十の翁の言ふことをかくのたまふよな。あな恥づかしや（＝七十歳の老人の言うことをこのようにおっしゃることよ。ああ恥づかしいなあ）」（15行目）

と、自身を年寄り扱いするような自虐的な冗談を言っている。

本文解説で触れたように、この文章の意図が入内の成功を語るためであると考えると、周囲の賞賛の言葉「**あなめでたや（＝ああすばらしいなあ）**」は、こうして一条天皇の彰子に対する寵愛が深まったことを示している。

#### 現代語訳

一条天皇が、藤壺にお越しになったところ、お部屋の飾り付けのご様子はいかにもそうであるうが、女御（＝藤原彰子）のご様子や振る舞いは、しみじみと見事だと思ひになり見申し上げなさる。「（自分の娘の）脩子内親王をこのように育て申し上げたい」と（一条天皇は）お思ひになるはずだ。彰子以外の中宮・女御たちは皆成長して容姿が整っていらつしやり、大人びていらつしやったので、ただもう今はこのお方を、ご自分の姫宮をそばに置いて大切にお育て申し上げなさるようにご覧になった。

ここ数年の（中宮・女御たちを）見慣れた御目は、比較しようにがなく（このお方を）しみじみとかわいらしく見申し上げなさるだろう。（一条天皇が）打橋をお渡りになるとすぐに（漂ってくる）、このお方の（お部屋の香の）香りは、今（どこにでも）あるような空薫物でないの、あるいは誰それの（作った）香の香りであるそうだが、何とも香りがわからないで（漂って）、なんとも（言いようも）なく深く香らせ、（お部屋に）お越しになつてからの御移り香は彰子以外の中宮・女御たち（の所）とは違うと思ひになった。ちよつとした御櫛箱や、硯箱の中（に入れてある物）からして、趣深くいかにも珍しい物たちの様子に（一条天皇は）すっかりお心を奪われなさつて、夜が明けるとすぐ（彰子のお部屋に）お越しになつて、御厨子などもご覧になると、何一つお目のとまらない物があるうか、いやあるはずもない。巨勢弘高の歌絵を描いた冊子に、藤原行成卿が歌を書いた物などを、たいそう趣深くご覧になる。「あまり面白がっているうちに、まるで政治のわからない愚か者になつてしまひそうだ」などとおっしゃりながら、（一条天皇は）お帰りになった。

昼間などにおやすみになつては、「あまり幼いご様子なので、お近くに寄り申し上げると（自分の方が）老人かと思われて、私は恥づかしくなるよ」などとおっしゃるのも、（一条天皇は）現在二十歳くらいでいらつしやるようだ。同じ帝と申しても、（力量が）不十分でもの足りない方もいらつしやるものだが、この一条天皇は、すばらしくご容貌をはじめとして、上品で美しく、驚きあきれるほどまでにすばらしいご様子でいらつしやる。

お酒などは少し召し上がった。御笛を表現のしやうがなく音色でを訝えわたらせて吹きなかつたので、お仕え申し上げる人々も見事だと見申し上げている。（彰子は）打ち解け

#### 作品（作者）解説

四十巻からなる平安後期の歴史物語。『栄華物語』とも書く。正編三十巻は一〇三〇年頃に成立。編者は赤染衛門（あかぞめもん）という説もあるが未詳。続編の十巻は一〇九二年以降数年のうちに成立したと考えられているが、これも編者未詳である。宇多天皇から堀河天皇に至る十五代の、およそ二〇〇年間の歴史を編年体で仮名文によって記す。

#### 入試情報・解答時間

国語90分 大問2問（古文・論理）



解答と採点基準

問 1 ①Ⅱ意志の助動詞「べし」の終止形  
②Ⅱ打消推量 (打消当然) の助動詞「まじ」の終止形  
③Ⅱ完了の助動詞「ぬ」の連体形  
④Ⅱ婉曲の助動詞「む(ん)」の連体形  
⑤Ⅱ打消の助動詞「ず」の已然形

問 2 アⅡどうせ同じことなり イⅡどう考えても  
ウⅡ物足りなく(て) エⅡ慰み書きという書物  
源氏物語

問 3 源氏物語

問 4 1Ⅱあの設計図はあらかじめ柱が一本足りないように書いた  
A がなければ全体 0。「肖図」「かねて」「書けり」の訳の不備は各減点 2。  
2Ⅱ不完全な設計図を見せて、柱が一本不足していることを見抜くことができる優秀な大工を選別し、主人からその人に施工を依頼させる意図。  
A がなければ全体 0。  
AⅡ 8 「図を見て柱不足を見抜ける優れた大工を選ぶ」という趣旨であれば可。  
BⅡ 2 「文末の「ゝ意図。」「ゝするため。」も許容」があれば、「主人からゝさせる」の説明はなくても可。」

問 5 虚をもて実を説く所 (9 字)

問 6 1Ⅱ同じ書物の中で、酒好きや色好みについて、褒める記述がある一方で、けなす記述もあるというように、相反する内容が併存する書き方のこと。

B と C がなければ全体 0。  
AⅡ 4 「同じ作者」という説明も可。  
BⅡ 4 「酒好きや色好み」がないものは減点 2。  
CⅡ 2 「相反する (矛盾する、一方に決めつけない、など)」があれば可。」

2Ⅱ事の善し悪しを一方に決めつけず併記する筆法が、善を目指し悪を反省するという、読書による徳の観点からも、格別に道理をわきまえた書き方だと高評価している。  
A と C がなければ全体 0。  
AⅡ 4 「善悪を決めつけない書き方」という趣旨があれば可。  
BⅡ 2 「同内容可。これは別の説明であっても柔軟に認めてよい。」  
CⅡ 4 「心あり」の説明の不備は減点 3。」

問 7 優れた書物は虚実ない交ぜに書かれており、作者のその考えや趣向を繰り返し味わうのがよく、虚実のみを一方的に判断する読み方は、琴柱を糊で固定するのに等しい、柔軟性を欠く間違った方法だという意味。(95 字)  
C と D がなければ全体 0。  
AⅡ 2  
BⅡ 2 「本文の 26 ～ 28 行目の内容に触れていれば可。」  
CⅡ 3  
DⅡ 3 「間違った」と同趣旨の内容があれば可。」

本文解説

近世の読本

不完全な設計図を見せて、柱が一本不足していることを見抜くことができる優秀な大工を選別するというたとえ話から説き始めて、書物の書き手も読み手も、書かれていることがすべて真実であるという固定観念から離れることの重要性を述べる。本文は平易であるが、解答を作成するには要約力・文章力が必要である。文法問題や文学史の設問では確実に得点したい。

考察

基問 1 (文法)

①Ⅱ「語り侍るべし」の主語は語り手。主語が一人称であり、「語りましょう」と訳せることから「意志」。  
②Ⅱ「相違あるまじ」は「違いはないだろう」と訳せるので「打消推量」。「ないはずだ」という訳もできるので「打消当然」でもよい。  
③Ⅱ完了の助動詞「ぬ」はナ変型活用語で「ぬる」は連体形。  
④Ⅱ助動詞「む(ん)」は文中に連体形で使われたときは「仮定・婉曲」で考える。下に助詞が続くと「仮定」、体言が続くと「婉曲」の訳をすることが多いが、ここは「なからんにはしかし」であり、「ないのに越したことはない」と訳す慣用的表現であるので、「仮定」より「婉曲」と答えるべきである。  
⑤Ⅱ完了の助動詞「ぬ」の命令形も「ぬ」であるが、上の動詞「いは」が未然形であること、また已然形接続の助詞「ども」に続くことから判断して、未然形接続の打消の助動詞「ず」の已然形だと決まる。

問 2 (古語の意味)

アⅡ「とてものに」は慣用表現で「いっそのこと、どうせ同じことなら」の意味だが、それを知っている受験生はそうそういないはずなので、文脈から適切な訳をひねり出すしかないという意味で難問である。  
イⅡ「いかさまにも」は直訳で「どのような様でも」であるが、文脈によって

基問 3 (文学史)

設問の「平安時代中期に成立した五十四帖からなる長編物語」という情報から確定。『源氏物語』の二巻目が、本文で触れられている「帚木」の巻である。

問 4 (現代語訳・文意の理解)

1Ⅱ傍線部を品詞分解すると次のようになる。

代格	格助	名	副	名	格助	サ四用	接助	カ四已(命)	完終
あ	の	肖図	かねて	柱一本	を	残し	て	書け	り

「肖図」は、これから建てようとする神社を「肖った図」のことで、今という「設計図」にあたる。「かねて」は「かねてから」などの形で現代でも使う、「前もって・あらかじめ」という意味の副詞。「柱一本を残して」はそのままでは意味がはつきりしないので「柱が一本足りないように」「柱を一本省略して」などと工夫する必要がある、ここが出題のねらいである。

2Ⅱ傍線部の後の「絵図のごとく作らんといふは、法を知らざる工なり。柱一本増さばといへるこそ、法知れる工なれば、これに命じ給へ」が根拠となる箇所「図を見て／柱不足を見抜ける／優れた大工を／選ぶ」という趣旨でまとめる力量が試されている。表現や順序は違っても四つの要素を落とさずに書きたい。

問 5 (文脈把握)

傍線部の主旨は、「真実だけを書く書物の弊害」である。これを踏まえて、「虚



構を含む書物として仏教や儒教の聖典の例…に共通する特徴」を答えるのが目標。同じ段落内に「釈迦の説き給ふ経は、…」（12～13行目）、「外典にも『易』は…」（15行目）と、**「仏教と儒教の例が書かれ、その後に「事はかはれども虚をもて実を説く所は略相同じ」（16行目）とあるので、「十字以内」という指示に従い、「虚をもて実を説く所」を抜き出すことになる。**

◎問6（文意の理解）

1＝「抑揚」は漢文の句法でおなじみの、「抑え」たり「揚げ」たりすること  
で、この文脈では「押さえつけたり持ち上げたりする」こと。「褒貶」は四字熟語「毀誉褒貶」でおなじみの、「褒める」「貶す」こと（「毀誉」も「毀る」「誉める」で順序は逆だが同じ意味）。「抑揚褒貶」で「ほめたりけなしたりすること」と捉えてよい。具体的には『徒然草』に酒好きや色好みの人を褒める記述とけなす記述が並んでいることを受けている。人が変われば評価が違ふことは当然なので、模範解答のAの部分は落とさずに書いておきたい。

2＝「一方ならず書ける」ことが「殊に心ある所」という評価になっているのだから、この二つを必ず押さえること。前者は「（善し悪しの）評価を一方に決めつけずに書くこと」で、後者は「心あり」を「道理がわかる」「思慮分別がある」という訳で考えることが肝要である。受験生はこの語をまず「情趣を解する」「や「思いやりがある」という訳で覚えているだろうが、「情趣（風流）」も「思いやり（人情）」も文脈にそぐわないので、ここでは使えない。模範解答のBは解答欄に合わせた飾りの部分なので、書いていなくても合格点はもらえるだろう。

◎問7（文章全体の理解）

設問のヒントから「膠柱の過ち」は「琴柱を糊で固定するに等しい間違い」だとわかる（ちなみに、「膠」は訓読みすると「にかわ」で、昔はこれを接着剤として使った。「膠着状態」という語は、にかわで貼り付けたように動かしようのない状態を意味する）。琴が身近にない人にはピンとこないだろうが、琴柱とは琴の胴の上に立てて弦を支える道具であり、その位置をずらすことによって音の

式に（則って）作りたいと、その方法を学んで会得している棟梁を招き、「あの国（＝美濃国）へ行って建ててくれ」と依頼なさった時に、その棟梁が申すには、「恐縮ですが、私は参るには及ばない。絵図を写して送り、あの国、（また、その）近隣の国などの大工にお尋ねなされ。（大工が）そのまま引き受けますならば、私が作ったものと違いはないだろう。そうすると、（美濃国までの）往復の旅費を省き、私も食事の準備をするわずらわしさから解放される」と言うので、もともとだと思っ、すぐに一枚の設計図を書いて、あの国に送った。何日かたつてあちら（＝美濃国）から、数人の大工に尋ねた旨のとりどりの（報告の返事の中）で、「このような面倒な神社は、拙い大工（である私）の及びもつかないこと」と、辞退したのもも多く、「絵図のとおり少しも違えずに建てましよう。工賃は何貫目」などと書いたものもある。（その中でも、ある）一人が言うには、「この絵図のとおりにはできません。もし柱の数をもう一本増やして（よいの）ならば、このとりに造り申し上げよう」と書いたものがある。あの（最初に依頼した）棟梁を招いて（その返事を）見せると、手を打って、「思ったとおりあの国は飛騨国に隣接して、優れた大工たちがいますなあ。あの設計図はあらかじめ柱が一本足りないように書いた。絵図のとおりに作ろうというのは、（唯一「宗源の」）方法を知らない大工である。柱一本増やすならば（造ることができると）言った大工こそが、方法を知っている大工なので、この人にお命じなされ。私が遠く（まで）行く必要はない」と言ったとかいふことだ。

以上のことよって書物を見ると、すべての書物が真実だけを書くならば、読む人の（読解）力も高い域には達せず、学問の工夫もきつとすさむだろう。そもそも、釈迦が説きなさる経は、四十九年末顕真実（＝『法華経』を説くまでの教えはすべて仮のものだった）と自ら『無量義経』でおっしゃっていたので、真実だけを説いたのではない。地獄極楽についての記述も、どう考えても「真実と認めがたい。だから、（真実のみを説く）儒家よりも（虚実を織り交ぜて説く）釈迦と僧侶（の方）が（人々を）悟りに導くというの、もともと迷っていない者を迷わせて、後でだんだんとその迷いを解き明かすのである。それは、癰疽（＝悪性の皮膚病）を患う者が（患部を）水で洗って気持ちよく感じるの（と同じ）であって、それよりはただ癰疽がないのに越したことはないだろうなどというが、儒書でも『易（経）』は存在しないことを想定して、六十四卦三百八十四爻（＝占いに用いる基本図形である八卦の組み合わせ）を設定なさっているのも、事象は異なっているが「虚」を使つて「実」を説くところはほぼ同じである。「莊子」に登場する伝説上）の巨大な鳥も、もし愚鈍な人がそれを実在だと思っ（て人に話し）たならば、大いに誤りを伝える（ことになる）だろう。わが国で古くから伝え（られ）ている（『日本書紀』の）神代巻にしてもすべて信じるならば、かえって困惑の種であらう。だから、その要心として深秘口決（＝

高低を調節するから、固定してしまつては意味をなさないのである。以上のことを押さえたうえで、本文の話題をたどらう。

①前問の内容

善悪を一方に決めつけない書き方がよい

＝

善悪を一方に決めつけた（＝固定した）書き方はよくない

②前問との違い

前問：書き手が主体

←

本問：読み手が主体（倭漢の群書を見んもの）（25行目）、「筆ずさみてふものなど見ん」には（27行目）とある）

③傍線部の主語

「一様に心得る（＝一つの見方だけで理解すること）」は「膠柱の過ち」

ここまでで次のような解答の骨格ができる。

優れた書物は虚実ない交ぜに書かれており、虚実のみを一方的に判断する読み方は、凝り固まった間違つた方法だという意味。

しかし、これでは字数不足なのでさらに深掘りしよう。

④判断の根拠（理由）

「その真偽虚実を論ぜず、書けるものの意趣のある所に心をつけて、繰り返し侍れば、…自ら心も慰みつれづれも忘るるなれ」（27～28行目）

これを足し、比喩も含めて格調高く述べてみると、以下のような解答になる。

優れた書物は虚実ない交ぜに書かれており、作者のその考えや趣向を繰り返し味わうのがよく、虚実のみを一方的に判断する読み方は、琴柱を糊で固定するに等しい、柔軟性を欠く間違つた方法だという意味。

現代語訳

これについて一つの物語がございました。日も高いですから、ついでに語りましょう。

昔、美濃国に領地を持っている人が、東国にいながら、あの国（＝美濃国）にいらつしやる神の社を建立しようとの宿願で、どうせ同じことなら唯一宗源（＝神道の一流派）の本

深奥な秘密の教えは直接口頭で伝える」と称して、愚者の面前で夢（と同様の不確かなこと）を説かないのは当然のことではないか。

『源氏物語』もこれまた寓言（＝他の物事にことよせて意見や教訓を述べた言葉）であつて、帚木があると思えて（近づくと）見えなくなるといふことを象徴的に使い、真実かと思えば作り話であつて、作り事かと思うと実話である。その虚実は読む人の心で味わつて、これを甘いとも酸いとも嘗め分け（るようにして読み分け）て、その善を見ては（その真似を）「しろ」と言わなくても（やはり）、発憤してそれと同等であることを願ひ、悪を見ては禁じなくても（やはり）、恐れを感じて戒め慎んで（心の）内に自省して、書物を読んだ（ことで得られた）徳ときつと成るだろう。だから、この『徒然草』にも、初めに、「男は酒が飲めなくないのがよい」と書き、「好色でない男は、物足りなくて」などと書いて（その）後に、「ただ好色でないに越したことはない」と書き、「百薬の長といつても、あらゆる病氣は酒からおこる」（「酒は 果報をもたらす前世でのよい行いを火のように焼き尽くしてしまひ、悪を増し戒律を破る（事態を招く）」など、たいそう抑えたり揚げたり褒めたりけなしりの書き方であるが、一方に偏らずに書いてあるのは、特に道理をわきまえたところだと思われまふ。この草紙だけに限らず、日本や中国の多くの書物を読む者が、これは実録だと思つてすべてを信じ、これは戯れに作った話だと思つてすべて信じないとしたら大いなる誤りであつて、泥が濁っているのを見て蓮の清さを知らない類であるに違ひない。仏教の聖典（内典）とその他の書物（外典）の深いことは、私が明らかに知らないことですから、しばらくとりあげないでおく。（それよりも）卑近な歌物語、軍記など、そのほかさまざま人の慰み書きという書物などを読むならば、その真偽や虚実を論じず、書いてあるものの考えや趣向のあるところに注意して、繰り返し（読み）ますと、千年の後に生まれて千歳年上の人に対面する気持ちがして、自然と心も慰められ無聊も忘れるのだ。仮にも偽りを嫌うのは君子の志であるから、これを駄目だというのはないが、一つの見方だけで理解するのは琴柱を膠で固定するような過ちであるだろうか。

作品（作者）解説

江戸時代の読本。一七七五年刊。五卷五冊。『新斎夜語』という書名は、「新たな書斎で行う夜語り」というほどの意味。作者の梅觴館主人は、江戸時代後期の旗本で知識人・著述家であつた三橋成烈（＝一二二六～一七九一）と同一人物と考えられている。

入試情報：解答時間

国語120分 大問3問（論理・古文・漢文）

14 「沙石集」

しやせきしゅう

(ファイルして保存しよう)

無住

むじゅう

【出題大学】 東京大学 文科（前期）

解答と採点基準

問1 アIIください。あなたの耳を買おう

- A II 5 「たべ」の訳は必須。
- B II 5 「あなたの」の訳は必須。「う・よう」など意志の「ん」の訳出がなければ減点2。

イII耳だけは幸福の相がおりだが、そのほかには福相が見えない。

- A II 5 「のみ」「だけ」など副助詞「ばかり」の訳出がなければ減点2。「が」「だが」など係助詞こそ「の」訳出がなければ減点2。「おはす」を尊敬で訳出していないものは減点1。
- B II 5 「そのほか」以降の訳は必須。

ウII私に代わって、お出向きになりなさいよ。

尊敬語の訳出がなければ減点2。「よ」「な」など終助詞「かし」の訳出がなければ減点2。

問2 大般若経の読誦も、死後の冥福を祈る祈禱も得意なことだ。

- A・Bがともになければ全体0。
- A II 3 「大般若経を読むこと」が必須。
- B II 3 「逆修祈禱」を言い換えていることが必須。
- C II 4 「得たる」を「得意」と訳せていることが必須。

本文解説

◆中世の仏教説話集

耳の徳を売った僧侶の話。当時は人相や夢の徳を買うと、そのご利益が買った者

実のついた枝を頭の上に置いている夢」を見た。政子は、妹が前から欲しがっていた鏡を渡して夢を買った。そのおかげで、政子は源頼朝の妻となり、後には尼將軍として権力を振るうまでになった、というものである。今回の出題は、耳の徳を売ってしまったために散々な目にあった僧侶の話である。

考察

●問1（現代語訳）

非常に基礎的で、文法事項や語句の理解を問う設問である。具体的なポイントは以下のとおり。

- アII「たべ」は「与ふ」の尊敬表現「給（賜）ぶ」の命令形。助動詞「ん（む）」を意志で「う・よう」などと訳出する。
- イII副助詞「ばかり」は「のみ」「だけ」などと訳出。係助詞「こそ」＋已然形を逆接の「が」「だが」などと訳出。
- ウII尊敬語「給ふ」の意味を命令形で訳出する必要がある。念押しの終助詞「かし」を「うよ」「うな」などと訳出。

問2（現代語訳）

「何れも」の中身がわかるように」と設問で指示されているため、傍線部の前行にある「大般若」と「逆修」を解答に織り込む必要がある。「得たる」は連語で「自分のものとしている」「得意とする」の意。「大般若」とは、『大般若波羅蜜多經』が正式名称で、六百巻に及ぶ膨大な經典群である。この經典を一人で読むにはほぼ一カ月を要するため、すべて読んだ例は過去にも数回記録が残るのみで、一般には「転読」といって、教典をパラパラとめくって一巻を読誦したことにすることが多い。これは「經典をめくる際の風」に当たただけでもご利益がある」と言われており、神主の家族が最後の望みをかけて祈禱を頼んだわけである（明治以前は神仏習合の時代であったため、神主が僧侶に經典の読誦を依頼することもごく普通であった。もっとも、この話では瀕死の父親が助かるように大般若経の「真説II転読ではなくて全部読むこと」を

問3 尊さを守るために、酒好きで信仰が薄いと思われると不都合だから。

- A II 4 「高僧のように振る舞うため」など同内容可。
- B II 3 「実際には酒好きであるという内容が必要。」
- C II 3 「同内容可。」

「別解」酒好きで信仰が薄いと思われると、布施に影響するかもしれないから。

問4 僧が与えた餅で神主が亡くなり、家族はかえってあれこれ申すこともなく、

- A II 3 「同内容可。状況の説明が必須。」
- B II 2 「主語が必須。」
- C II 5 「この部分の訳出は必須。」

問5 僧が生活苦になったうえにお金に執着する下劣な心を持つこと。

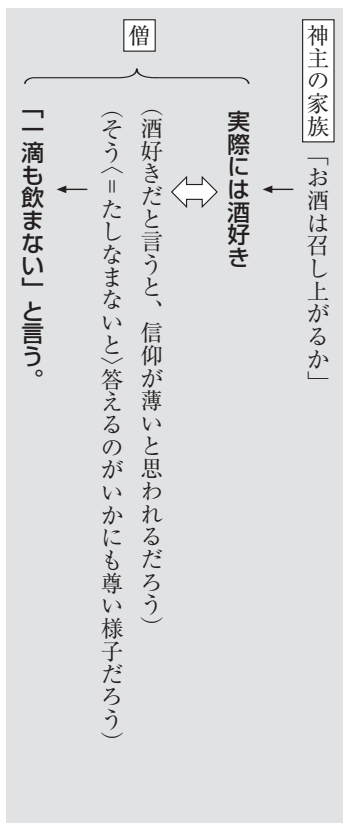
- A II 3 「状況の説明が必須。」
- B II 4 「金銭への執着」にあたる内容が必須。
- C II 3 「心」の説明がしてあることが必須。

に移ると考えられていた。たとえば北条政子の夢買いのエピソードが有名である。ある時、北条政子の妹が「高い山に登って着物の袂に月と日を入れ、三つの橘の

子息が依頼していて、僧もそれを安請け合っているのだが、一カ月を要するのだからどう考えても父親の命はもたない。真説がどのくらい大変なものかを、子息も僧もわかっていないのである。

問3（文意の理解）

僧が「一滴も飲まず」と言った理由について説明する必要がある。直前までを讀むと、実際には酒好きであるが、酒好きだというと信仰が薄く、尊そつに見えないので嘘をついたということがわかる。



この背後には、尊い僧侶は酒食を慎むものだと考えられていた当時の風潮がある。『十訓抄』には、五穀（米・麦・キビ・アワ・豆）を食べず、松の葉ばかりを二、三年食べていた僧が、自分が仙人になって空が飛べるような気分になり、高い崖の上から実際に飛んだところ、墜落して大怪我を負ったという話がある。

●問4（現代語訳・文意の理解）

設問で「状況がわかるように」と指示されており、傍線部までの内容を解答に織り込む必要がある。いよいよ大般若の祈禱を行うとなり、僧は祈禱のはじめに法会の意味や願意を仏に申し上げる「啓白文」というものを讀み上げた。そして大般若経の絶大な功德が詰まっただけの餅を、神主が伏し拝んで食べたところ、喉に詰まってあえなく絶命したのである（現代でもお年寄りが亡くなる原因のう



に行く。（耳を買った僧の）人相を見て言うには、「幸福の相がおありにならない」と言う時に、耳を買った僧が言うには、「あのお坊の耳ですが、その代金をこのような値段にて買いました」と言う。（人相見は）「ではお耳のおかげで、来年の春頃から、福分が豊かになり、お気持ちも平穏だろう」と判断した。さて、（人相見は）耳を売った僧を、「耳だけ」は幸福の相がおりだが、そのほかには福相が見えない」と言う。この（耳を売った）僧は、その頃まで暮らし向きがよくない人である。「このように耳を売ることあれば、貧乏困窮を売ることきつとあるだろう」と思い、奈良の都を立ち出でて、東の方に住んでいましたが、学問専門の僧で、説教などもする僧である。

ある上人が言うには、「私を仏事に招くことがある。（しかし）この身は老いて道は遠い。私に代わって、お出向きにならなさいよ。ただし三日かかる道である。想像するに、お礼は十五貫文は超えないだろう。またここから一日の道である所に、ある神主で徳の高い人が（いて、七日間死後の冥福を祈る仏事を修することがある。これも私を招いているが行きたくない。こちらは、一日に最悪でも五貫、よくすると十貫ずつはもらえるだろう。あなたは、どちらにお行きなさる」と言う。この（耳を売った）僧は、「申し上げるまでもない。遠い道をしるんで行つて、十五貫文などを取りますより、一日の道を行つて七十貫文を取ります」と言う。「それならば」と言つて、一方へは別の人を行かせた。神主のところへはこの僧が行つた。

すでに海を渡つて、その場所に至つた。神主は年齢八十に及んで、病床に伏している。子息が申し上げたことには、「老齢のうえ、病氣の日も長くて、安泰を願うのは難しいのですが、ひよつとすると（思つて）、まず祈禱として、大般若経を省略せずに説誦していただけるとありがたいです」と申し上げる。「また、逆修の祈禱は、（私どもで）ぜひとも用意申し上げます、そのまま（祈禱に）引き継ぎ申し上げます」と言う。この僧が思うには、「まず大般若経のお礼をもらおう。また逆修の（仏事の）お礼は手に入つたもの同然」と思つて、「簡単なことです。参上した以上、おっしゃることに従いましょう。大般若経の説誦も、死後の冥福を祈る祈禱も得意なことだ。特に祈禱は私の宗派の秘法である。必ずご利益があるでしょう」と言う。

「ところで、お酒は召し上がるか」と（神主の家族が）申し上げる。（僧は）実際にはとても酒好きなのだが、「酒が好きだと言うと、信仰が薄い（と思われる）だろう」と思つて、「（そう答えるのが）いかにも尊い様子だろう」と思つて、「一滴も飲まない」と言う。「それならば」と言つて、（家族は）温かい餅を勧めた。（僧はこれに）よつて、大般若経の（祈禱の）趣旨を仏に申し上げて、この餅を食べさせて、「これは大般若経の仏法の妙味、

ち、相当な割合が「餅を喉に詰ませた」ことであることを考えれば、瀕死の老人に餅を食わせる僧がいかにも愚か者かということがわかる。」「ご利益のある餅で父親は極楽往生をしたのではないか」という考え方もできるかもしれないが、子息は「先づ祈禱に、真読の大般若」と言つており、僧もまた「先づ大般若の布施取るべし」と考えている。先に行つたのは神主を延命させる大般若の祈禱であり、極楽往生を祈る「逆修」についてはまだ何も行つておらず、「延命効果抜群のはずの餅を喉に詰ませ、父親が死亡」してしまふ。まったくご利益どころか災難としか言ひようがなく、**あまりのことに遺族は茫然自失し、あきれ果てて何も言えない**という状況であらう。

#### 問5（文章全体の理解）

「心も卑しくなりけり」と、助詞「も」がついている意味を含めて説明しなければならぬ。祈禱に失敗して（おそらく期待したほどの布施ももらえず）さらに帰り道の暴風雨によつて衣装以下がなくなり、僧の**生活が困窮**したことが考えられるので、この点を織り込みたい。「心が卑しい」とは、**布施の金額ばかり気にすることを**指しているのであるが、実際のところは耳の徳を「五百文」という値段ですぐ売ったことなど、この僧の場合、金のことばかり気にしているのは最初からだということもできる。もつとも、耳の徳を売つてしまつてからは災難続きで、多額の布施がもらえたとは考えられず、少額か、まったくもらえなかつた可能性すらある。さらに帰り道に暴風雨にあつて衣装などがなくなるなど、散々な目にあつてしまふのである。生活も心もさらに貧しくなつてしまつたことは間違いない。

#### 現代語訳

奈良の都に、ある寺の僧で、耳たぶが分厚いのを、ある貧乏な僧がいて、「**ください。あなたの耳を買おう**」と言う。「早くお買いください」と言う。「どのくらいでお買いになりますか」と言う。「五百文で買おう」と言う。「それならば」と言つて、金を取つて売つた。その後、（耳を買つた僧は）京都へ上つて、人相見のところに、耳を売つた僧と一緒に

不死の薬です」と言つて、病人（＝神主）に与えた。病人は尊く思つて、寝ながら手を合せて、（仏法僧の）三宝神々のお恵みと信じて、一口に食べたところ、日頃食事をしていなかったため、疲れていた様子で、食べそこなつて、むせた。女房、子供が、抱えて、あれこれしたが、かなわずして、（神主が）死んでしまったので、（家族は）**かえつてあれこれ申すこともなくて**、「追善供養の時に、ご連絡します」と言つて（僧を）帰した。帰る途中で、波風が荒くて、船は波を押し分けて進み、ほうほうのていで命が助かり、衣装をはじめとして（持ち物を）失つた。またもう一方の依頼の法事は、お礼の額が、とても多かつた。これも、耳の徳を売つたせいかと思われた。万事がうまくかみあわないうえ、心根も貧しくなつたのだつた。

#### 作品（作者）解説

一二七九年に起筆、一二八三年成立の仏教説話集。編者は無住。『沙石集』の名前は「沙から金を、石から玉を引き出す」という意味を持ち、世俗的な事柄によつて仏教の教えを説く意味であるといわれている。靈験談・高僧伝をはじめ、各地を遊歴した編者自身の見聞をもとにさまざまな内容が収録されている。通俗で軽妙な語り口は、『徒然草』をはじめ、後世の狂言や落語に多大な影響を与えた。

#### 入試情報・解答時間

国語150分 大問4問（論理・古文・漢文・文学〔随〕）



15 「発心集」

ほっしんしゅう

(ファイルして保存しよう。)

鴨長明

かも の ちようめい

【出題大学】 神戸大学 (前期)

解答と採点基準

問1 ①Ⅱ数年が経つて

AⅡ6 「何年も」などの表現も可。」

BⅡ4 「単に「ある」は不可。」

②Ⅱ入水するはずの前世からの因縁であるのだから

断定「なり」・推量「む」の助動詞の訳が適切でなければ、全体0。

AⅡ7 「さるべき」の内容の補いがなければ、減点5。」

BⅡ5 「入水する」という内容の補足がなければ不可。」

CⅡ3 「尊敬語の訳が不適切なものとは不可。」

③Ⅱああ、すぐさま私が入水することをお引き止めくださいよ

AⅡ2 「すぐさま」は「今すぐ」「直ちに」なども可。」

BⅡ5 「入水する」という内容の補足がなければ不可。」

CⅡ3 「尊敬語の訳が不適切なものとは不可。」

④Ⅱ火や水に身を投じて死ぬ苦しみは並大抵ではない

「なのめならず」の訳が不適切な場合、全体0。

AⅡ7 「焼身や入水によって死ぬ」の意が明らかでなければ不可。」

BⅡ3 「並々でない」なども可。」

問2 蓮花城とは長年親しく交際し最期まで世話をした私が恨まれるはずはな

く、彼は深い信仰心により往生したはずだと登蓮は思うから。(60字)

AⅡ4 「蓮花城と登蓮の関係に触れていなければ不可。」

BⅡ4 「蓮花城が往生した」という内容がなければ不可。」

CⅡ2 「人物名はなくても可。しかし、「登蓮」以外を記した場合

は全体0。」

問3 蓮花城は信仰心の浅さに気づかず、死の間際に命を惜しんだことで仏の加

護が得られず、物の怪になったから。(50字)

AⅡ4 「蓮花城の信仰心に触れていなければ不可。」

BⅡ4 「命を惜しんだことに触れていなければ不可。」

CⅡ2 「物の怪」は「霊」でも可。」

問4 aⅡべけれ bⅡべき cⅡべき dⅡべし

問5 ホ

本文解説

◆中世の説話集

蓮花城という聖(ひとし)がいた。死期を悟った蓮花城は入水して死ぬ決意をする。長年親しく交際してきた登蓮法師はそれを諫めるが、蓮花城の決意は固い。止めることは

できないと思った登蓮法師は、入水するその最期の時まで蓮花城のために世話をし続けたのであった。しかし、その後、蓮花城が物の怪となって登蓮法師にとり憑いた。一体、なぜなのか。話を読み解くのは難しくないが、一部わかりにくい箇所があり、それらに惑わされず、文脈を押さえることができるかどうかが鍵となる。

考察

■問1 (現代語訳)

①Ⅱ「年ごろ」は「長年・数年来」の意。ラ変動詞「あり」は存在を表し、ここでは「数年という時間が存在して」という意であるが、現代語訳としては「数年が経って」などの表現が自然でわかりやすい。

②Ⅱ品詞分解は次のとおり。

ラ変・体	当体	断用	係助	ラ変末	推已
さる	べき	に	こそ	あら	め

直訳は「そうなるはずであるだろう」だが、これでは意味がはつきりしない。設問に内容を補えという指示はないが、現代語訳はできるだけわかりやすくなるように表現上の配慮をする必要がある。ここでは「**そうなるはず**」の**内容**を補いたい。そのためには、傍線部までのあらすじを確認しなければならない。傍線部は登蓮の発言の中にある。登蓮がこのように思ったのは、蓮花城に入水を思いとどまらせようと諫めたにもかかわらず、蓮花城の決意は固く、翻意させることができないと思ったからである。そこで登蓮は蓮花城の「入水」はそうなる宿命だった、つまり、「**前世からの因縁**」であつたと考えたのである。したがって、「**そうなるはず**」の内容とは「入水するはずの前世からの因縁」のことであり、これを補って現代語訳したい。

③Ⅱ品詞分解は次のとおり。

感	副	サ変用	ハ四・命尊敬(補)	終助(念押し)
あはれ、	ただ今	制し	給へ	かし

「あはれ」は感動詞で、「ああ」などの意。「ただ今」は「今・現在」を強めた語として使うが、ここでは「**すぐさま・直ちに**」など、**問近**の未来の意を表す副詞である。サ変動詞「**制す**」は「**制止する・引き止める**」の意。尊敬の補助動詞「**給へ**」は命令形で、「**くください**」の意。終助詞「**かし**」は**念を押す**働きをする。内容としては「何を」引き止めるのかを補いたい。傍線部は、入水直前になって未練に思い後悔した蓮花城が、登蓮に向かって訴えた言葉である。したがって、「私

が入水しようとするのを」引き止めてほしい、という内容を補うとわかりやすくなる。

④Ⅱ傍線部直前の20～21行目に「身灯、入海する(Ⅱ焼身や入水する)は…(こうした修行は) すなはち外道の苦行に同じ」とある。これを受けて「火水に入る苦しみ」と述べているので、「火水に入る」とは、ここでは「火や水に身を投じて死ぬ」ことをいう。「**なのめならず**」は「**並一通りではない・格別だ**」の意。中世以降は「ななめならず」ともいう。

■問2 (文意の理解)

傍線部は登蓮の会話文中にある。その登蓮の発言を整理すると次のようになる。

《登蓮の発言》

結論 ①「このこと、げにと覚えず」 (心情)

論(理由) ②「年ごろあひ知りて、終はりまでさらに恨みらるべきことなし」(理由1)

本(理) ③「発心のさまなほざりならず、貴くて終はり給ひしにあらずや」(理由2)

結論 ④「何の故にや、思はぬさまにて来たるらん」 (心情)

①と④の内容を比較すると、a「このこと」はd「思はぬさまにて来たるらん」に、b「げにと覚えず」はc「何の故にや」に対応していることがわかる。④は疑問文になっているので気づきにくいかもしれないが、登蓮の発言は「結論―本論(理由)―結論」型の構成になっており、①と④は同じ心情を述べている。したがって、「このこと」とは、蓮花城が「思はぬさまにて来」たこと。それは傍線部の直前の内容から、蓮花城が物の怪となって登蓮にとり憑き霊となって現れたことをいう。登蓮はそれを「げにと覚えず」「何の故にや」と思うのだが、その理由は②と③に記されている。②は「長い間親しく交際して最期まで世話をした私を蓮花城が恨むはずはない」ということ、③は「蓮花城は深い信仰心によって極楽往生したはずだ」ということ。この二つを整理して解答を書くことにな

る。

◎問3（文章全体の理解）

傍線部の中の「このこと」とは直前の「ある人」の発言を指す。この会話文は長く、一部意味がはつきりしないので読み取りにくい箇所もあるが、整理すると次のようになる。

《ある人》の発言の主旨

①「諸々の行ひは、みな我が心にあり。みづから勤めて、みづから知るべし」  
(23行目)

←

②「仏道を行はんとために…なほ身を恐れ、命を惜しむ心あらば、必ずしも仏擁護し給ふらんとは愚むべからず」(25～26行目)

←

③「虎狼来たりて犯すとも、あながちに恐るる心なく、食物絶えて飢ゑ死ぬとも、憂はしからず覚ゆるほどになりなば、仏も必ず擁護し給ひ、菩薩も聖衆も来たりて、守り給ふべし」(27～28行目)

←

④「心は心として浅く、仏天の護持を頼むは、危ふきことなり」(29～30行目)

まず①で「**仏道修行は、修行をするその人の心にあるのだ**」と述べる。それはどういうことなのか。それを②と③で具体的に説明する。②では仏道修行するにあたって「**自分の身を案じ命を惜しむ心があるならば、仏の加護を期待すべきではない**」と述べる。では、どうすれば仏の加護を得ることができるのか。それが③に記される。深い信仰心を得て仏に帰依し、「**自分の身の危険を恐れない心、命を惜しまない心となるならば、仏の加護は必ずある**」というのである。そのことに気づかず「修行をすれば必ず仏の助けを得られる」とか、「自分の身や命を助けてほしいという思いで修行する」といった、自己の欲を持ったままでの修行を続けても仏の加護は得られない。それゆえ、④で「**信仰心が浅いのに、仏の加護を期待するのは、危険なことだ**」と結論づける。筆者はそれを「さもと聞こゆ

- ロ＝『愚管抄』は鎌倉時代前期の歴史書。作者は慈円じえん。
  - ハ＝『閑吟集』は室町時代後期の歌謡集。編者未詳。
  - ニ＝『禁秘抄』は鎌倉時代前期の有職故実書。作者は順徳天皇じゅんとく。
  - ホ＝『沙石集』は鎌倉時代後期の仏教説話集。編者は無住むじゅう。
- したがって、正解はホ。

現代語訳

近頃、蓮花城といつて、人に知られた聖がいた。登蓮法師は親しく交際して、事あるごとに、絶えずいたわりの心をかけて暮らしていたところ、数年が経って、この聖が言ったことには、「今は、年とともに体が衰弱しておりますので、死期が近付いていることは間違いないでしょう。最期は（乱れなく）正しい信仰心によって亡くなりますことは、この上ない望みでございますので、（迷いがなくなり）心が澄み切る時に、入水をして、死のうと存じます」と言う。

登蓮は（これを）聞き、驚いて、「それはあつてはならない。たとえもう一日であっても、念仏の功德を積もうと祈願なさるべきだ。そのような修行は愚かでものの道理を理解できない人のする行いである」と言つて、忠告したけれども、まったく気が変わることなく決意を固めたことと思われたので、「このように、これほど決心なさったからには、制止することはできない。入水するはずの前世からの因縁であるのだらう」と言つて、その時の用意など、協力して、一緒に手配をした。

（当日、蓮花城は）最後に、桂川の深い所に達して、念仏を声高く申して、しばらくして、水の底に沈んだ。その時に、（このことを）聞き及んだ人々が、市のように（大勢）集まつて、しばらく、敬い悲しむことはこの上ない。登蓮は長年親しく交わったのになあと、しみじみと哀しく思われて、何度も涙をこらえながら帰った。

こうして数日経つにつれて、登蓮は物の怪が憑いたかのような感じの病になる。周囲の人は不思議に思つて、異常なことだと言つていると、霊が現れて、「生前の蓮花城（である）」と名乗ったので、「このことは、なるほど本当にと（納得できることは）思われぬ。長年親しく交際して、（蓮花城が入水したその）最期まで決して恨まれるはずのことはない。まして、（蓮花城の）発心（＝悟りを得ようとする心を起こすこと）の様子は一通りではなく、貴くお亡くなりになったのではありませんか。いずれにしてもどんな理由であらうか、思いもしない様子で（このように）やつて来たのであらうか」と言う。

（＝そのとおりだと思う）と述べるのだが、そう感じた理由は、この「ある人」の発言を裏付ける出来事があったからである。その出来事の要約がこの設問の解答となる。その出来事とは**蓮花城が死後に物の怪となったこと**であるが、「ある人」の発言の主旨に沿つてまとめると、次のようになる。

- 1＝蓮花城は正念のうちに死ぬつもりだったが、死の間際に命を惜しんだ。
  - 2＝命を惜しんだということは彼の信仰心が浅かったということである。
  - 3＝信仰心が浅いために、蓮花城は仏の加護を得られず物の怪になった。
- この三点を中心に解答をまとめる。

◎問4（文法）

助動詞「べし」は次のように活用する。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
（べく）	べく	べし	べき	べけれ	○
べから	べかり	○	べかる	○	○

（補助活用）

aは少し前に係助詞「こそ」があり、その影響を受けた係り結びとなるため、已然形「べけれ」が入る。bは直後が「なら断末ね消已ど」となっている。断定の助動詞「なり」は連体形に接続するので、「べき」が入る。なお補助活用にも連体形「べかる」があり、それに助動詞「なり」が接続した「べかるなり」という表現があるが、この場合の「なり」は伝聞・推定の助動詞である。cは名詞「構へ」に接続しているので、連体形「べき」が入る。dは直後が句点になっている。この文には文末に影響を与える係助詞が見当たらず、また、内容としても命令形で終わるものではないので、終止形「べし」がふさわしい。

問5（文学史）

この文章を収録する『発心集』は鎌倉時代前期の仏教説話集で、筆者は鴨長明である。選択肢の作品のジャンルなどは次のとおり。

イ＝『山家集』は平安時代後期の私家集。作者は西行さいぎょう。

物の怪が言うことには、「そのことだ。（あなたが）適切に（入水を）制止なさったのに、（私は）自分の心の程度をわからないで、取り返しつかない死に方をしました。格別に人のためにしたことでもないで、死の間際に決心が変わるだらうとも思われなかったけれども、どのような仏道を妨げる魔物のしわざであつたらうか、確かに水に入ろうとした時に、突然心残りになりました。そうではあるけれども、あれほどの（多くの）人の中で、どのようにして自分の判断で（入水することを）考え直すだらうか（いや、考え直すことはできない）。ああ、すぐさま私が入水することをお引き止めくさいよと思つて、（あなたと）目を見合わせただけでも、そ知らぬ顔で、『今となつては早く早く』とせきたてて、（そのまま水に）沈んでしまった恨めしさのために、どんな往生（＝極楽浄土に生まれ変わる）のことも（念頭から去つて）思い出さない。思いがけない道に入っているのです。このことは、私の愚かなる過ちであるので、人を恨み申し上げるはずではないけれども、最期に名残惜しいと思つた瞬間の思いの結果で、このようにやつて参つたのだ」と言つた。これこそ、本当に前世につくつた因業と思われます。一方ではまた、きつと後世の人の訓戒となるだらう。

人の心は、はかりがたいもので、必ずしも清らかで素直な心からも起こるとは限らない。ある場合は、他より勝つているという良い評判にも執着し、ある場合は、おごり高ぶりや恨み妬みを原因にして、愚かにも、焼身や入海するのは浄土に生まれ変わる（ことだ）とばかり思い込んで、心が勇み立つのに任せて、このような修行を決心することがきつとあるのでしょうか。（これは）とりもなおさず異教・異端による苦しい修行と同じである。大いに因果の道理を無視した見方というべきである。そういうわけで、火や水に身を投じて死ぬ苦しみは並大抵ではない。その志が深くなかったならば、どのように耐え忍ぶだらうか（いや、耐え忍ぶことはできないだらう）。死後、地獄道に落ちて受ける苦しみがあるので、また心配である。仏の助けよりほかには、乱れなく正しい信仰心（の状態）であることは極めて難しい。（中略）

ある人が言うことには、「すべての仏道修行は、みな（修行をする）自分の心にある。自分で修行に励み、自分で悟らなければならない。他人には相談しがたいことである。だいたい過去に積んできた（果報の原因となる）善悪の行いも、（その結果としてもたらされる）未来の報いも、仏様の加護も、おとろえて、自分の心の持ち方を安寧にするならば、自然と（他人にも）見当がつくはずである。何はともあれ一つのことを明らかにする（のが関の山である）。もし人が、仏道を修行するために山林に隠遁し、一人広野の中にも閑居するような時、（そんな中でも）やはり身を心配し、命を惜しむ心があるならば、必ず



しも仏が助け守りくださるだろうとは期待するべきではない。垣や壁をも（用いて）開い、遁世すべき用意をして、自分で身を守り、病いを癒して、（そのうえで）徐々に（信仰が）深まるのを願うべきだ。もしひたすら仏に差し上げた身であると思つて、虎や狼が来て（自分の身を）害するとしても、とりたてて恐れる心がなく、食べ物がなくなり飢えて死ぬとしても、嘆かわしくなく思われるほどになったならば、仏も必ず守り助けてくださり、菩薩も聖衆もやつて来て、お守りくださるに違いない。すべての悪鬼も毒ある獣も、（修行を妨げる）機会を得ることはできない。盗人は良心を起こして立ち去り、病は仏の力によつてきつと癒えるだろう。これを理解せず、心は（信仰）心として浅く、（それでいて）仏様の加護を期待するのは、危険なことである」と語りました。この意見は、そのとおりだと思われる。

作品（作者）解説

鎌倉時代初期に鴨長明が記した仏教説話集。序に「心の師とはなるとも、心を師とすることなかれ」とあるように「心」の諸相を見つめた作品であり、ここに採られた蓮花城の話も「修行における心のあり方」を主題にしたものである。百余りの話のほとんどが日本の僧俗にまつわる話である。

鴨長明（一一五五？～一二一六）は随筆『方丈記』で有名だが、後鳥羽院に歌才を認められ、歌人としても活躍した。私撰歌集『鴨長明集』や歌論『無名抄』などが残されている。下鴨神社末社の河合社の禰宜になれなかったことを契機に出家し、のちに京都伏見の日野に住んで隠遁著述の生活を送った。

参考

自ら入水して極楽往生を願うというのは特殊な出来事のように感じるが、当時はどうであったのだろうか。『Web版 新纂浄土宗大辞典』によると、「入水往生」の項目に次のような解説が載る。

「現世を厭わしく感じ、すぐに浄土に往生したいという気持ちの高まりから、水中に身を投じて、極楽往生を遂げること。（中略）平安後期の浄土教の隆盛に伴い、日本では往生するために焼身・入水を行う人々が現れた。それらは各種往生伝や文学作品にも見ることができ、鴨川、桂川、天王寺西海は入水の代表的な場所であった」

この解説にあるように、蓮花城のような行為は必ずしも特異なことではなかったよう

（ファイルして保存しよう。）

ある。『発心集』卷三の五にも火に身を投じて死ぬことを選択した僧侶の話が載っている。

入試情報・解答時間

国語100分 大問3問（論理・古文・漢文）  
\*経営学部 国語80分 大問2問（論理・古文）



-----解答と採点基準-----

問1 ①Ⅱ源氏の宮 ②Ⅱ狭衣中将 ③Ⅱ源氏の宮

問2 (1)Ⅱ完了 未然形

(2)Ⅱ苦しく思われましたならば

問3 (1)Ⅱ狭衣中将が、源氏の宮に対して、源氏の宮を間近に見て強くひかれ胸が高鳴るのを隠すため、<sup>○</sup>そ知らぬ様子に振る舞っている態度。

Aがなければ全体0。

AⅡ3

BⅡ3 「間近に」という表現はなくてもよい。」

CⅡ4 「平然と」など同内容可。」

(2)Ⅱ幼い頃から兄妹同様に育った源氏の宮に恋心を抱くことは、いとわしく、あつてはならないことで、<sup>○</sup>気づかれて源氏の宮との関係を壊したくないと思っただから。

Cがなければ全体0。

AⅡ4 「同内容可。」

BⅡ2 「あつてはならない」という内容であれば可。」

CⅡ4 「源氏の宮との関係を壊したくない」という内容がなければ不可。」

問4 <sup>A</sup>人知れず幼い頃からずっと室の八島の煙のように恋い焦がれ続けてきた、<sup>B</sup>源氏の宮に対する燃えるような恋心を知ってほしいと思う。

AⅡ5 「人知れず」「こっそりと」などの内容がなければ減点2。」

BⅡ3 「強い思い」「激しい恋心」という内容があれば可。」

CⅡ2 「源氏の宮に打ち明ける」という内容であれば可。」

問5 <sup>A</sup>狭衣中将が、<sup>B</sup>自らの恋心を打ち明けたことに対して、<sup>○</sup>源氏の宮が恐ろしそうに震えながら、知らない他人のように自分を見ることに対して恨み言を言っている。

Aがなければ全体0。

AⅡ2

BⅡ2 「同内容可。」

CⅡ2

DⅡ4 「源氏の宮が恐怖を感じる様子に触れていなければ減点2。源氏の宮が狭衣中将を他人のように見る、という内容がなければ減点2。」

問6 <sup>A</sup>自分は当面の間態度を変えないように努力するが、<sup>B</sup>源氏の宮が、狭衣中将に対する態度を突然変化させたのでは、<sup>○</sup>周囲の人たちが不審に思うことが危惧されるから。

Cがなければ全体0。

AⅡ2 「同内容可。」

BⅡ4 「源氏の宮の様子の変化」という内容があれば可。」

CⅡ4 「周囲の不審を危惧する」という内容がなければ不可。」

-----本文解説-----

◆中古の作り物語

狭衣中将は、兄妹のように育てられた、美しい源氏の宮への恋情を秘めながらも隠しきることができず、ついに打ち明けてしまう。登場するのは狭衣中将と源氏の宮だけで単純だが、発言がどちらのものであるか、描写がどちらのものであるかがわかりにくく、読み方を誤ってしまいがちだ。主語の変わり目を的確に見極めながら読解を進めていきたい。

-----考察-----

問1（動作の主体）

主語を判別するためには、物語の展開を丁寧に進める必要がある。古典の物語では主語が明示されないことが多いので、**主語を補いながら読むことを心がけてほしい。**

①Ⅱ本文冒頭の一文に「心ひとつにこがれたまふを」とあり、リード文の情報とあわせて、従姉妹の源氏の宮に恋い焦がれる狭衣中将が話題になっていると判断できる。それに続く「昼つかた、源氏の宮の御かたに参りたまへれ」も、内容からして狭衣中将の行動である。その直後にある接続助詞「ば」には注意しなければならぬ。已然形に接続助詞「ば」が接続する場合、順接の確定条件の意味となり、「ば」までの文節を受けてそれに続く話題が語られるので、**多くの場合、「ば」が出現すると主語が変わる。**本文でも「白き薄物の単衣着たまひて…書を見たまふ」（2行目）から、その後の「人にも似たまはね」（5行目）までが源氏の宮を主語として考えることができる。続く「ば」で主語が変わり、狭衣中将が「…胸はつぶつぶと鳴り騒げど、…つれなくもてなしたまへり」と描写されていると考えるのが自然である。よって、波線部①は源氏の宮の行為だと判断できる。

②Ⅱ波線部①（いと赤き紙なる書を）見たまふ」を受けて「いかなる御書御覧するぞ」と問いかけているのだから、波線部②の主語は狭衣中将。「聞こゆ」が「言ふ」の謙譲語であることは言うまでもない。

③Ⅱ「よしさらば…恋の道かは」の歌は、「恋に迷う」というのだから狭衣中将の歌と考えることができる。源氏の宮が見ていた『伊勢物語』に自分を重ね、思いを述べた歌である。そして涙を流すのであるが、それを見て「あやし」とおぼす」のだから、源氏の宮が主語とわかる。

●問2

(1)（文法）

問1で述べたように、「ば」は已然形に接続して確定条件の意味になるが、**未然形に接続すると仮定条件の意味になる。**「ば」の上が「な」という形になるのは、未然形が「な」となる完了の助動詞「ぬ」である。ナ行変格活用動詞「死ぬ」「往ぬ」の未然形に接続する「死なば」「往なば」などでも「ゝなば」の形になるが、ここでは該当しない。

(2)（現代語訳）

傍線部を品詞分解すると、以下のようになる。

バ上二用	ラ変・用丁寧補	完未	接助
思ひわび	はべり	な	ば

前述のように未然形接続の「ば」は仮定条件の意味を持つので、現代語訳する際は「仮定」の意味を明確に表現したい。

●問3

「もてなす」は「振る舞う」「取り扱う」「もてはやす」の意味を持ち、ここでは「振る舞う」の意。どのように振る舞ったかは、傍線部A直前の「つれなく」が示している。「つれなく」は、「平然としている」「**そ知らぬふりである**」「冷淡だ」「**何の変化もない**」という**意味の形容詞**「つれなし」の連用形である。

(1)（動作の主体・解釈）

以上の単語の意味から、傍線部Aは、恋心を秘めた狭衣中将が源氏の宮を間近に見て胸をときめかすが、秘密にしなければならないので、**そ知らぬ様子・平然とした態度で振る舞った**ということである。

(2) (文章全体の理解)

狭衣中将が源氏の宮への恋情を隠さなければならぬ理由は、常識的に答えてよさそうなのだが、正確を期すためには本文の内容を根拠にすべきである。傍線部Bの前々行から「もらしはべりぬるこそあさましけれ」(18行目)、「かうあるまじう見苦しきもの思ふ人のたぐひ」(18～19行目)とあり、中将が自分の恋心をあつてはならないことだと考えていると説明できる。自分の告白に対する宮の反応を「あまりうとましげにおほしめしたる」(19行目)とあることから、自分の恋情をいとおしいことと考えていたと読み取ることができる。その宮の反応を見て「心憂く」というのだから、**自分の告白により源氏の宮の態度が変わったことが悲しい**、という内容になる。裏を返せば「つれなくもてなし」た時点では、恋情を隠すことで、宮と自分との関係をこれまでどおり兄妹同然の関係にとどめておくことができると考えていたということでもある。

問4 (文意の理解・修辞技巧)

傍線部Bは「あなたを思い焦がれて何年過ごしてきたのかと、室の八島の煙に尋ねよ」という歌であり、**狭衣中将が源氏の宮に自分の恋心を知ってほしいと訴えた**ものである。「室の八島の煙」は恋心の比喻であるが、注にあるように「常に煙が上がっている」というのだから、「燃えるように激しい」「常に」という二点を押さえておきたい。「火」の縁語である「焦がる」「煙」という語が使われていることから、狭衣中将の源氏の宮への思いの激しさを表現したいという思いをくみ取ることができる。

問5 (文意の理解)

ここでも、物語の展開を丁寧に追う必要がある。

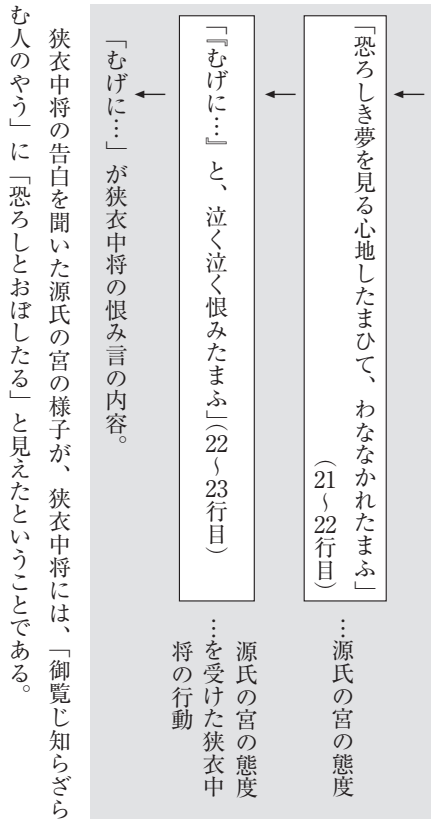
傍線部Bの歌(狭衣中将が恋情をうち明ける歌)の意図  
「年を経て思ひこがれて過ごしたまへる心のうちを、  
聞こえ知らせたてまつりたまふ」(21行目)  
…狭衣中将の行動

の人たちと、行為主体が三者あるので、混乱しないように解答を作成したい。

現代語訳

暑さが堪えがたい折は、(狭衣中将が、水を恋い焦がれる) 水恋鳥にも劣らず、一心に(源氏の宮を) 恋い焦がれていらつしやるのを察する人もいない。昼頃、(中将が) 源氏の宮のお部屋に参上なさったところ、(宮は) 白い薄物の単衣をお召しになって、たいそう赤い料紙の書物をご覧にな(つて)いる。お(肌の) 色は単衣よりも白く透きとおっていらつしやるうえに、額の髪がゆらゆらと垂れかかっていらつしやって、(その髪)の先端はそのまま背中と同じ方に長く伸びていつて、ぎつしりと重なり合っている(黒髪を) 削いでそろえた先端は、(これから先) 何年を限度として伸びていこうとしているのだろうか(思われて)、隙間もないほどの(豊かな) 様子だが、しなやかで気品がありみずみずしく美しくお見えになる。(薄くて、体の線の) 隠れようもない御単衣に御髪の間隙間隙間を通して見えているお体つき、腕などのかわいらしさは、(どの) ほかの女性にも似ていらつしやらない(ほど素晴らしく思われる)ので、(中将は)「あまりに深く思いこんでしまったような自分の目のせいであろうか」と自然と見つめてしまつて、いつものように胸はどきどきと鳴り騒ぐが、しっかりと自制を取り戻して、そ知らぬ様子に振る舞っていらつしやる。(中将が)「(こんな) ひどく暑い時節に、いったいどんな御本をご覧にな(つて)いるのか」と(宮に) 申し上げなされると、(宮は)「齋院から、絵物語を幾つか頂戴した(のです)」とおっしゃって、陰り一つない(夏の) 日ざしに華やかに美しさの満ち溢れていらつしやる(中将の) お顔を、(宮は) まぶしいとお思ひになつて、少し頬を赤らめてこの御本(を見るふり)で紛らわせなされる心配り、様子、目元(の美しさ) など何とも表現しきることができない(ほど) すばらしくお見えになるので、(中将は) 涙までこぼれてしまいそうに感じなされるのを紛らすために、この絵物語の絵をご覧になると、『伊勢物語』の日記をたいそう見事に描いたのだなあ」と見ると、ただもう自分が在五中将と同じ心のような気持ちで、目がとまるあれこれの箇所が多いので、我慢することがおできにならずに、「この絵はどうご覧になりますか」と言つて(身を) 近くへ寄せなされるそのままに、ええままよ、(こうなつたら黙つたままではいられない。) 昔の在五の中将の例を尋ねてこらんなさい。これは私だけが迷っている恋の道か(、いやこんな苦しい恋に迷うのは私だけではなかったのだ)。

とも言いさらずに、涙がぼろぼろとこぼれ落ちることすら、(宮は)「妙なことだ」とお思



狭衣中将の告白を聞いた源氏の宮の様子が、狭衣中将には、「御覧じ知らざらむ人のやう」に「恐ろしとおぼしたる」と見えたということである。

問6 (文意の理解)

「おぼし」は「思ふ」の尊敬表現「おぼす」の連用形。「うとむ」は「忌み嫌う」「いやだと思ふ」の意。「おぼしうとむ」で「愛想をおつかしになる」「いやだと思ひになる」という意味。「な」は禁止の終助詞で、現代語の「～するな」の「な」と同じ働きである。「よ」も呼びかけの意の間投助詞で、現代語と同様だ。狭衣中将が源氏の宮に「私のことをお嫌ひにならないでくださいね」と言っているのである。設問ではその理由が問われているわけだが、ここでも、正確な解答を作るためには、本文の内容を踏まえる必要がある。傍線部Dの直前、中将の発言の中に「にはかならむ御心変りはなかなか人目あやしくはべらむ」(23～24行目)とあり、中将に対する宮の態度が突然変化すること、周囲の人たちから不審に思われることを中将は危惧している。また傍線部Dの後で、「音聞もあるまじき」と、疎まれても宮に執着し続けることのみっともなさを感じ、「あまりに思ひわびはべりなば、通はぬ里にぞ行き隠れはべらむかし」(25行目)と言うのも、姿を隠すほどの覚悟で、周囲に気づかれないよう努力することを宮に伝えていると解釈できる。傍線部の後にも本文が続いて注まで付されているのであるから、そこに何らかの解答要素があると考えるべきである。狭衣中将、源氏の宮、周囲

いになる時に、(中将は) 宮の御手までも取つて、袖を当ててもあふれる涙をせき止めかねるご様子に、宮はたいそう驚きあきれ恐ろしくおなりになって、そのまま(中将が)とらえていらつしやる御腕に突つ伏してしまわれた様子が、得体の知れないものにつかまっているかのようにお思ひになるのも、(中将は) ますます心が騒いで、たくさん思いを重ねてきた胸の内を、せめてその片端だけでも打ち明け(たいのにそうす) ることもできず、ただ涙に暮れていらつしやる。

「幼い子どもでございました頃より、(私は) 特別な思いをお寄せ申し上げ始めて、(それから) 多くの年月の間に積もってしまった心の中は、まったく(あなたに) お知らせ申し上げないで終わってしまうだろうことも、恋をする者にとつても恋される者にとつても来世の(運命の) ためまでも気がかりになるはずのことですから、(こうして思いを) 漏らしましたことに(我ながら) あきれてしまふ。またたいそうこうしてあつてはならない見苦しいもの思いをする人の同類は、昔もいたのではありませんかと思えるので、(あなたが) あまりにいとわしそうに思ひになつていゐるのもつらく思われて。

私がこれほどまでにあなたを思い焦がれて何年過ごしてきたのかと、室の八島の煙にでも尋ねてください」

(こうして中将が心の) 片端にせよ漏らし始めてしまつて、(中将が) 長年思い焦がれてお過ごしになった心の内を、(宮に) 知らせ申し上げなされたので、(宮は) 恐ろしい夢を見る気持ちになさつて、わなわなと震えていらつしやるのを、(中将は)「むやみに(私を) まったくご存じではない人のように、たったこれくらい(のこと)を恐ろしいとお思ひになることよ」と、泣く泣く恨み言を言ひなされる時に、人が近く参上する様子なので、(中将は) 少し後ろにさがつて、「今からはどんなに(私を) お憎みになることでしょうね。急に私への態度がお変わりになるのではかえつて人目には不審でありましょう。(私を) お嫌ひにならないでくださいね。激情が奔流となりまして、世間への聞こえもみっともないことと自覚していますから、けつして見苦しい心の様子はお目にかけますまい。堪えきれないほど苦しく思われましたならば、人も通わない山里に行き隠れましょうよ。そのようになるような時は、(私が) それほど(恋情に堪えきれなかったのだ) と思ひ出しなさつてほしいと思ひまして」などと、知らせ申し上げなされる(中将の) 言葉の数々を思いやるべきである。

作品(作者)解説

平安時代の作り物語。成立は諸説あるものの一〇六九〜一〇八四年頃と考えられている。作者は、古くは紫式部の娘の大式三位とされていたが、現在は六条斎院宣旨源頼国女とする説が有力。物語は四巻からなり、狭衣中将(後に大将)の源氏の宮に対する果たされない思慕の情が全編を貫いている。中将は宮への純粋な愛を貫こうとしながらも、次々別の女性と不意な関係を持つようになり、女性たちとの恋物語が展開する。『無名草子』には、「狭衣こそ源氏に次ぎてはよう覚え侍れ」とあり、早くから物語としての評価が高かったことがうかがわれる。

参考

男が妹にひかれる話は『伊勢物語』四九段「若草」に見られる(この段は二〇二三年度大学入学共通テスト追試験の第3問で資料として引用された)。

入試情報・解答時間

国語100分 大問3問(論理・古文・漢文)



夜の寝覚

よる ねざめ

(ファイルして保存しよう。)

【出題大学】九州大学 文学部 (前期)

解答と採点基準

問1 ①＝才気があり、

②＝慕わしく優美で、

A＝5／B＝5

③＝夜の寢覚めに苦しんで、

「苦しむ」「悩む」という表現があること。

問2 石山寺で見初めて文を交わして以来姿を隠してしまったあなたと、宮中でめぐりあうことができた。

Bがなければ全体0。

A＝5 「文を交わした」という内容がなければ減点3。

B＝5 「宮中で」がなければ減点2。

問3 自分は宮中に居場所がなく思われるので、かつて実家で暮らしていた自分に戻りたいという思い。

Bがないものは全体0。

A＝5／B＝5

平安時代後期の作り物語

美しく才気あふれる新少将ではあったが、宮中の社交には不慣れであり、男性たちとのやりとりに馴染めない。リード文にもあるように、複数の男性が登場し、物語は複雑である。(注)をよく読んで、過去の出来事や、親や弁少将、宮の中將と

本文解説

問1 (解釈・現代語訳)

①＝「かど」は「才能」「才気」「趣」という意味だが、あまりなじみのない語かもしれない。「心ばせありてもてなし」と続くことや、リード文にある新少将の評価から意味を類推するというのが現実的な解答の導き方であろう。

②＝「なつかし」は「慕わしい・親しみを感じる」という意味で、現代語の「昔のことを思い出して心ひかれる」という意味で用いられるのは中世以降である。「なまめく」は、「若々しく美しい」「優雅だ」の意味。

③＝「わぶ」は「思い悩む・苦しむ・つらく思う・落ちぶれる」などのほかに、動詞に付いて「～しかねる」という意味を持つなど多義語のため注意したい。

問2 (解釈)

「石山」は石山寺。「さりげなく尋ね寄りて」の(注)から、新少将と宮の中將との関係を読み取ることができたら、「峰に隠れし月影」が、姿を隠した新少將の比喩だと解釈できる。「雲居」が「はるか遠く離れた所」という意味で、宮中を表すということを知っていたら「雲のよそ」を宮中と解釈することが可能である。「歌の大意を答えよ」という指示なので、比喩内容を詳細に答える必要はない。

問3 (文意の理解)

「谷」が表すものを理解することが重要。「雲居」と対比される場所＝新少將の実家と読み取ることができたら、実家の暮らしに戻りたいという新少將の思いを読み取ることができる。「親の庇護のもと…静かに暮らしていた」、「男性に應對するのには、なかなか馴染めないでいた」というリード文の記述がヒントになる。

問4 (文意の理解)

(注)も利用しながら、傍線の直前をまとめる。宮中生活に馴染めないでいたはずなのに、いつの間にか宮中の女房らしく振る舞い始めている自分を「うとまし

問4 親が弁少將を婚約者と定めていたのに、軽率にも宮中に出仕した自分は次第に世慣れて、心惹かれた宮の中將から歌を贈られると返歌まで詠んでしまうという慣みのないうつらさ。

A＝2 「親の意に反して」という内容であれば可。」

B＝4 「宮中の生活に慣れた」という内容であれば可。」

C＝2 「宮の中將に返歌した」という内容が書けていること。」

D＝2 「軽々しく～してしまった」など、自分の行動を否定的に捉えている表現であれば可。」

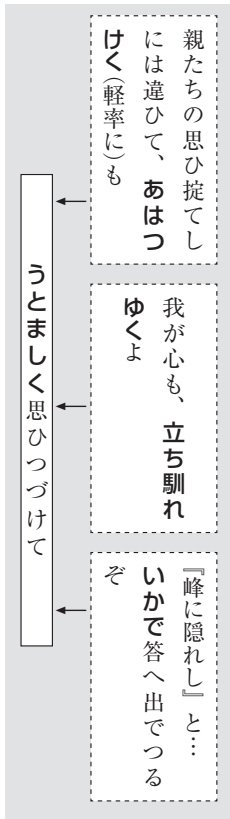
問5 「ゆきまじり」が「雪交じり」と「行き交じり」の掛詞。「すめばすみ」が「澄めば澄み」と「住めば住み」の掛詞。

A＝5／B＝5

「ゆき」「すみ」の掛詞について指摘ができていれば可。

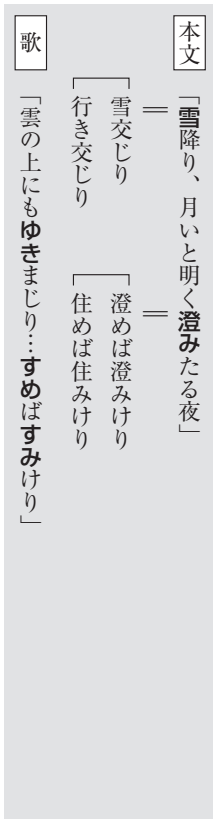
いった人々との関係も理解しながら、本文を読解する必要がある。また、歌の理解のためには、象徴や比喩を読み取ることも求められている。

く」思い始めているのである。「分かりやすく」と指定されているので、具体的な人間関係も合わせて答えたい。



問5 (修辞技巧)

歌が、本文の「雪降り、月いと明く澄みたる夜」(3行目)と対応していることに気づけば、掛詞を見つけることが容易になる。問2と同様に「雲の上」は宮中の比喩であるから、「ゆきまじり」は宮中の人々と「行き交じり」の意味であり、これに、当日の天候「雪交じり」を掛けているとわかる。また、問4で答えたように、新少將は宮中生活に馴染み始めたことを意識し始め、「住んでみれば住めるものだ」との感慨を抱いている。これに「月の光が澄むときは澄む」の意味を掛けている。雪で曇っていた空が晴れて、澄んだ月が現れたという意である。



（新少将は宮中の生活に）少し馴染んでいくにしたがって、人柄はたいそう才気間1①があり、思慮深くふるまったので、中宮もたいそうよい人物だと思いいになり、殿上人なども心ひかれるように思って、会いたがり言い寄ったが、（新少将は）この上なく氣位を高く持ち、簡単に返事をするはずもなく、控えめにしていて、（殿上人たちから見たら）憎らしいほどずばらしい様子に振る舞っている。

雪が降り、月がたいそう明るく澄みわたっている夜、殿上人がたくさん参内して、戸口に、自分こそは思っている女房たちがたくさん出てきているのに誘われて、（新少将もその）中に混じっている。気が引けて（殿上人たちに声をかけられても）返事もせず、東面の傍らのほうに引っ込んでいたところに、（そこにいるのは 誰々かなどと尋ね聞いて（中でも）婚約者であった弁少将などは、並々でなく話しかけるが、（新少将が、弁少将を避けて）暗いほうに向かっていく（その）場所を、たいそううまく推し量って、（新少将が）いる東面になにげなく尋ね寄って（歌を詠みかける男がおり）、

「石山寺の峰に隠れた月のように、石山寺で見初めて文を交わして以来姿を隠してしまったあなたと、雲のはるか彼方の宮中でめぐり会ったことだ。

お思い出しになりますか。しみじみと愛しい（ことです）」と、物腰も姿もほかの殿上人よりも慕間1②わしく優美で、たいそうひそやかに言った声に、（相手が宮の中將だとわかって、新少将は）聞き流すことができずに、

雲の上に居たのでは澄んだ光も見えない月なので（宮中には居場所もない私だから）、谷間のような、低い身分の実家で暮らしていた頃の自分が懐かしいことです。

と言って、静かに（奥に）すべり入って、人目を避けて局に下がって、柔らかな夜着に着替えて、火取り香炉の火をおこして、袖（の下）に引き込んで、ただただ見ないでそのままにするようなこともそうは言っても残念な夜の風情なので、遣戸を押し開けて、実家のほうを思い出しながら、「両親が思い定めたことには背いて、軽率にも、（宮仕えに）出てしまったわが身であることよ。（身だけでなく）私の心も、（宮中の生活に）馴染み始めていることよ。（宮の中將が私に対して）『峰に隠れし』と詠んできた（歌への）返歌を、どうして応じたりしたのか」と、いやなことに思い続けて、

「今まで知らなかった。空に雪が交じるように宮中に行き交じって、雲の間から見る月の光が、澄んだ光を見せる時には澄んでいるように、意外なことに、住めば住めるものであるよ。

思いどおりにならないことだ」と、ひっそりと物思いに沈みながら外の様子をうかがっている、言いようもなくにおい深く香りに満ちている直衣姿（の人）が、寄ってくる。中納言の御弟、三位中將が、（新少将が宮中に）出仕し始めた頃から強引に言い寄っていらっしやったのを、（新少将は）無理に逃れていた（のだ）が、（とうとう）尋ねていらっしやったのだと（思って）、心乱れて、あわてて引っ込んだところに、（まさにその）中納言が、（その日は）御宿直であったのが、いつものように夜の寢覺間1③めに苦しんで、お立ち寄りになったのであった。

作品（作者）解説

十一世紀末頃の成立と考えられる。書名も『夜半の寢覺』『寢覺物語』などさまざまだが、いずれが本来の書名であるかは不明。作者は『更級日記』の菅原孝標女とする説もあるが未詳。現存するのは物語全体の半分以下に過ぎず、中間と末尾のかなりの部分が欠落している。しかし、この作品に触れた資料や改作本などから、欠落部分の内容が想定できるために、完全でないにもかかわらず十分な価値が認められている。

参考

リード文にあるように、新少将は但馬守の娘、すなわち中流階級の家の娘であり、仕えている中宮や、公卿である中納言とは相当な身分差がある。それゆえ、自らの家を「谷」と表現し、宮中生活に馴染めない感覚を持っていたのであろう。

なお、主人公である中納言は、新少将の親戚にあたる太政大臣の中の君に恋い焦がれ、眠れぬ夜に苦しんでいる。

入試情報・解答時間

国語120分 大問4問（論理・古文・古文・漢文）

18 「怪世談」

あやしのよがり

あらき だれいじよ  
荒木田麗女

【出題大学】名古屋大学

文・教育・  
経済学部（前期）

解答と採点基準

問1 ア＝「かへりみ」は名詞、「せ」はサ行変格活用動詞「す」の未然形、「られ」は自発の助動詞「らる」の連用形、「たり」は完了の助動詞「たり」の終止形。

イ＝「まどろま」はマ行四段活用動詞「まどろむ」の未然形、「れ」は可能の助動詞「る」の未然形、「ず」は打消の助動詞「ず」の終止形。  
ウ＝「見」はマ行上一段活用動詞「見る」の連用形、「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形、「なら」は断定の助動詞「なり」の未然形、「む」は推量の助動詞「む」の連体形。

問2 ①＝陸奥の守は、忍んで行った女の頭が無いのが不気味でどうしようもなかったが、他の人を起こせば自分の行動を知られるのが煩わしく、また濡れ衣を着せられるのも気がかりだったため。

それぞれ同内容可。  
A＝3／B＝3／C＝4

②＝前後に続いて女の頭が無かったので、いよいよこの世の者ではなく、化物であると思うようになり、愛しいと思う気持ちが冷めてしまい、気味悪くもなったため。

A＝3 「二晩続けて女の頭が無かった、という状況の説明が必須。」  
B＝3 「化物」「怪異の者」などの言葉が必須。  
C＝4 「陸奥の守の、女に対する心情の変化を説明できていないものは不可。」

③＝年<sup>A</sup>老いた女房が女の頭が無いことに<sup>B</sup>気づき、<sup>C</sup>怯えて人々に知らせたので、陸奥の守は今初めて知ったふりをする<sup>C</sup>ことで、無関係を装おうと考えたため。

それぞれ同内容可。

A＝3／B＝3／C＝4

問3 I＝女に思いを寄せる男が、冷淡で強情な女を恨んで首を斬ってしまったのであろうか、

A＝2 「の」を主格で訳していないものは不可。  
B＝4 「女が薄情でつれないのを不満に思っ<sup>C</sup>て」なども可。  
C＝4 「かく」の内容を明示していなければ減点2。」

II＝女に浮気心があることを知って、元の恋人が女の首を斬ってしまったことであらうか、

A＝5 「浮気」の主体を「女」としていないものは不可。  
B＝5 「しるる」の内容を明示していなければ減点2。」

III＝ここであった怪異現象について、女本人には何事も言うなと屋敷の人々に言い置いて陸奥の守は立ち去った。

A＝2 「女の首が抜けて宙を飛んでいた」など具体的な解答も可。  
B＝3 「禁止の訳が必須。」「女（本人）に」がなければ減点2。」  
C＝2／D＝3

問4 A＝女が障子に書いた、浮気を疑われ屋敷を離れるのがつらいという歌や『源氏物語』にある歌を見た北の方は、化物とはいえず、教養ある女が暇を出された理由を誤解したまま出て行くのを気の毒に思ったから。

A＝5 「『源氏物語』にある歌（の一部）」など、女の教養の高さ、優雅さを示すものに触れていなければ減点2。」  
B＝2 「北の方」という主語「化物とはいえず」という内容は必須。  
C＝3 「化物だから暇を出したとは知らずに出て行く」なども可。  
「気の毒に思った」という内容が必須。」

B＝「あなたの浮気な言動がなければ屋敷を出ずに済んだ」という歌を聞いて、陸奥の守は、女が、暇を出された理由を、自分が化物だからではなく北の方の嫉妬によるものだと思ひ込んでいると理解し、きまり悪く思ったから。

A＝2 「歌が、陸奥の守の浮気な言動がなければ屋敷を出ることはなかった、という内容であった説明が必須。」  
B＝2 「女」が「思ひ込んでいる」「誤解している」という内容は必須。  
C＝3 「北の方の恨み・嫉妬により暇を出された」という内容が必須。  
D＝3 「陸奥の守」がA（女の歌）から、B・Cを理解して「きまり悪く」「苦々しく」思ったという内容が必須。」

本文解説

近世の怪異物語

陸奥の守が、最近屋敷に仕え始めた奉公人の女のもとに夜中に忍んで行くと、女の頭が無かった。翌晩も女は同じ状態で、ついには屋敷の者皆知る事態となり、宙を飛ぶ女の頭を目撃することになる。

リード文にあるように「飛頭蛮（ひとうばん）」「ろくろくび」という和訓のほうが馴染みがあるかもしれない。の怪談であり、話の大意は捉えやすい。しかし、設問数、記述量ともに多く、擬古文で書かれていることもあり、答案を作るのには意外と骨が折れたことだろう。問2～4ではいずれも語彙力、読解力、要点をまとめる記述力が求められる。

考察

基礎問題1（文法）

ア＝「かへりみ（顧み）」は「振り返って見ること」の意の名詞。「かへりみす」で一語のサ行変格活用動詞としてもよいだろう。助動詞「らる」の識別もポイントになる。ここでは「そうはいっても愛おしかった日頃の女の面影も忘れ難く」という文脈から、陸奥の守が自然と振り返って女を見た、という文意が取れる。  
イ＝「まどろむ」は「うとうとする」の意。こちらも助動詞「る」の識別がポイントになる。直後に打消の助動詞があることから、文脈からも「可能」と判断する。  
ウ＝「いかなる夢を見つるならむ」が、「どのような夢を見たのであろうか」という陸奥の守の心内語。「なら」は連体形に接続しており断定の助動詞。助動詞「む」の活用形は「いかなる」の結びで連体形とするのが適当。

問2（文意の理解）

傍線部①～③はすべて陸奥の守の動作である。そうした行動に至った陸奥の守



の心情が書かれている箇所を本文から探し（すべて傍線部直前にある）、解答欄の大きさに合わせてまとめればよい。

① Ⅱ傍線部は「立ち帰ろうとする」の意。そのような行動に至った陸奥の守の心情は傍線部を含む一文に書かれている。次の三点の心情をまとめる。

・「にはかにむくつけうもあへなくも思へば」（4～5行目）Ⅱ頭が無い女を見て、急に不気味でどうしようもなくなった、という心情。  
・「人々起こして聞こえむとすれど、…わづらはしう」（5行目）Ⅱしかし人々を起こしてこのことを告げ知らせると、女のもとに忍んで行ったという自分の愚かな振る舞いが露になるので面倒だ、という心情。  
・「またこの人の気はひもあやしければ、…うしろめたくて」（5～6行目）Ⅱ頭が無い女の異常な様子から、自分が女を殺害したなどという、つまらない濡れ衣を着せられないだろうかと気がかりになった、という心情。

② Ⅱ傍線部は「すぐに帰ってしまった」の意。傍線部を含む一文全体が、陸奥の守が女のもとからすぐに帰った理由になっている。ポイントは次の三点。

・「その夜もまた同じごと」（15行目）だったという状況の説明  
・「変化の者」を「化け物」などとわかりやすく言い換える  
・愛しさよりも不気味さが勝ってしまった、という陸奥の守の心情変化の説明

③ Ⅲ傍線部は「行って見るなどした」の意。これも傍線部を含む一文全体が解答根拠となる。まず以下二点を整理してまとめる。

・年離れた女房が頭部の無い女を発見し、屋敷の人々に知らせて騒ぎになった、という状況説明  
・「今聞きたるやう」Ⅱ陸奥の守が、女のことを今初めて聞いたふりをしたという説明

ただし、傍線部の行動に至った心情が本文に明記されていた①・②と違い、③ではつきりとは書かれていない。したがって、なぜ今初めて聞いたふりをして女の様子を見に行ったのか、を推察しなければならない。すると、①で答えたよ

・誰が、誰に言い置いたのか ↓ 陸奥の守が、屋敷の人々に  
・何を言っではいけないのか ↓ 女の頭が飛んで来たという怪異現象  
・誰に言っではいけないのか ↓ 本人（頭が飛んで来た女）

三点目については、守が人々に「めくばせ」したうえで言い置いた内容であることを考えれば、女本人に、であることが察せられる。女は自身の頭が飛んでいたことに無自覚な様子だったので、このように屋敷の人々に言いつけたのである。

◎問4（文意の理解）

「直前の和歌の内容を踏まえて」、「なぜそのように感じたのか」と「理由」を説明することが求められている。しかし、「直前の和歌」二つは、和歌だけを読んでも解釈することは難しい。このような場合は、(1)誰から誰に向けて詠まれた和歌か、(2)どのような状況で詠まれた和歌なのかを文脈から読み取り、解釈のヒントにすることが重要である。

(1)については、二つとも「女」が詠んだものであることは明らかである。「誰に」については、それぞれの和歌の直後の二重傍線部に着目すると、Aは「北の方」が主語であり、Bは「陸奥の守」が主語である。出題の意図を考えてみると、「名もつらき…」は北の方に向けての、「あだ波の…」は陸奥の守に向けての心情をそれぞれ詠んだのではないかと推測できる。(2)については、24行目以降の内容を丁寧に読み取ろう。

以上を踏まえたうえでA、Bを順に考えていく。

A Ⅱ「名もつらき…」が詠まれるまでの状況は、次のように整理できる。

《和歌が詠まれるまでの状況》

女の頭が宙を飛ぶ怪異現象を、陸奥の守だけでなく、北の方を含め屋敷の皆が知るところとなった。

北の方（化け物であった）女にひどく恐れおののいている。  
陸奥の守 北の方や女房たちも怯えているので、女に暇を出そうと決意する。

うに「女を殺害したなどという濡れ衣を着せられたくない」という心情を推察することができるだろう。あるいは②を踏まえると、この化け物のことを知っていたと思われたくない、という心情も推察できなくはない。模範解答では、それらをひっくるめて「無関係を装おうと考えた」というまとめ方をした。

問3（現代語訳）

設問に「適宜言葉を補いつつ」とあるのを意識して、主語や目的語を補いつつ訳す。破線部Ⅰ、Ⅱは守が、誰が女の首を斬ったのかを推測している箇所である。破線部Ⅰの直前に「ろなう（Ⅱ言うまでもなく）館の内のをのこどもの中にこそあらめ」とあり、女の首を斬ったのは屋敷の男のうちの一人であろうと考えていることを踏まえて訳したい。

Ⅰ Ⅱ「けさう人」は「懸想人」と書き「恋人」の意。「心こはき」は「心強し」の連体形で「強情だ・そっけない・つれない」などと訳せる。したがって、破線部全体を逐語訳すると、「恋人が、冷淡で強情なのを恨みに思っこのようにはしてしまつたのであろうか」となる。「適宜言葉を補いつつ」とあるので、次の内容を補う。

・「けさう人」はどういう人か ↓ 女に思いを寄せる男（恋人）  
・「けさう人」は誰を恨んだのか ↓ 女  
・「かくはしつる」とは、何をしたのか ↓ 女の首を斬った

Ⅱ Ⅱ逐語訳すると、「浮気心があることを知って、元の人がしてしまったことであらうか」となる。補うべき内容は次のとおり。

・誰に「浮気心」があるのを、誰が知ったのか ↓ 女に浮気心があるのを、元の人を知った  
・「元の人」はどういう人か ↓ もともと恋人だった男  
・「してしまつたことであらうか」とは、何をしたのか ↓ 女の首を斬った

Ⅲ Ⅲ逐語訳すると、「何事も言うなと言い置いて立ち去った」となる。補うべき内容は次のとおり。

女 夜中の怪異現象（自身が化け物であること）はまったく知らず、屋敷に奉公に来て間もないのに暇を出されたのが、みっともなく恥ずかしい。

+

★心に隔てがなかった北の方の態度が急変したのは、陸奥の守が自分に冗談などを言うのを聞きとがめて浮気を疑い、自分に暇を出す決断をしたためだろうかと思ひ乱れる。

「名もつらき…」については、右にまとめた《和歌が詠まれるまでの状況》と、下の句「かくてへだつる道となりぬる」が訳せていれば、十分な理解ができる。しかし、よりの確に解釈するためには、【注】にある「籬が島」という歌枕も理解したい。

歌枕：古来和歌によく詠まれた景勝地・名所。八代集や『源氏物語』などに出てくる地名が繰り返し歌に詠まれるうち、その地名に特定の表現・情趣が固定化し、連想をもたらしものとなった。

例 【吉野】（奈良県）↓桜・雪      【鳥部山】（京都府）↓火葬の煙・死

「籬が島」は、『古今和歌集』東歌の「我が背子を都にやりて塩釜のまがきの島の松ぞ恋しき」などで知られ、「堅く貞節を守る」ことを連想させる歌枕である。女は、『和歌が詠まれるまでの状況』内★の心情から、「浮気の事実はないのに屋敷を出ることになったのがつらい」という北の方への訴えを歌に込めたのである。なお、設問の「直前の和歌」Ⅱ「名もつらき…」の歌であるが、ほかに女が歌の一部を書き付けていることにも注意したい。女が書き加えた「真木の柱は」は【注】にあるように『源氏物語』真木柱の巻にある「今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを忘るな」という歌の一部であり、「うらなき心」で接してくれていた北の方への惜別の情を込めたと考えられる。解答は両方の歌の内容に言及することが望ましい。和歌が解釈できれば、あとはそれを踏まえ、北の方が「さすがにあはれ」と感じた理由を説明すればよい。

《名もつらき…》の歌の大意

籬が島で暮らすように堅く貞節を守ってこの屋敷で働いてきたのに、このように離れるのがつらい。

《真木の柱は》の歌の大意

今はもうこの家を離れてしまいが、馴れ親しんだ真木の柱は私を忘れないでくれ。

女・ありもしない浮気を北の方に疑われた(と思った)ために、急に暇を出されたつらさを歌で表現した。

・歌枕を詠みこんだ和歌で心情を詠み、『源氏物語』にある歌を書き付けるなど教養があることも示した。

北の方・女が化け物であったことに恐れおののいていた。

・歌を見て、女の風流で教養ある振る舞いと、つらいと訴える歌の内容に、化け物とはいえその心情を考えて気の毒であると感じた。

以上の内容を、解答欄の大きさに合わせてまとめる。

B II 「あだ波の…」は、まず二重傍線部A以降の内容を整理する。

陸奥の守 女が出て行くのを涙ぐましく見る

女 「この人(陸奥の守)の理不尽な心のせいでこうなった」と恨めしく思い、歌を詠む。

《あだ波の…」の歌の大意

いたずらに立ち騒ぐ波(のような浮気な人の誘いの言葉)がかからなければ、海人の乗る小舟(のような私)が遠くへ隔てられることもなかっただろうに。

陸奥の守

「北の方が嫉妬したことが理由で暇を出された、と思っているのであろ

和歌にある「あだ波(徒波)」は「いたずらに立ち騒ぐ波」の意だが、「徒」には男女の間という文脈においては「誠実さがなく・浮気だ」の意味がある。百人一首の七二番「音に聞く高師の浜のあだ波はかけじや袖のぬれもこそすれ」(祐

を知って、元の(恋)人がしてしまったことであろうか」などと、一通りでなく思いながら過すうちに、ようやく(夜が)明けた。

人々が起き出した気配であるが、それから(騒ぎが)聞こえてくることもない。守も急いで起きて(様子を)窺うと、女は、いつものように平然と台所のほうにいた。守は、たいそう不審に思っ

その夜もまた同じ様子であったので、いよいよこの世のものではなく化け物であろうかと思うようになったので、愛しく思っていた気持ちもすっかり変わって(しまい)、気味悪いとさえ(思うように)な

その夜は守の子である乳児が急に泣き出し、乳を吐いたといっ

北の方、女房たちはひたすらに恐れおののいたままなのも気の毒で、守もこの女を(化け物であることを知りながら)そのまま仕えさせるのも、思いやりに欠けると思うようになっ

子内親王家紀伊)などを知っていれば「浮気な人の誘いの言葉」のたとえだと気づきやすく、またAの解説内の★の内容を読み取れていれば、「あだ波の…」の歌の大意も理解しやすかっただろう。

和歌が解釈できれば、あとはそれを聞いた陸奥の守の心情をまとめればよい。歌の内容から、守は、女が暇を出された理由を(自身が化け物だからではなく)陸奥の守から「あだ波」＝「浮気な誘い言葉」を「かけられた」ことにより、北の方の嫉妬を買ったからだと理解(誤解)しているのではないかと推測し、「かたはらいたし」と感じていることが読み取れる。解答では「あなたの浮気な言動のせいだ」という女の歌を踏まえ「きまり悪く思った」としたが、自身が化け物だと知らずに誤解している女に対して「苦々しく思った」「気の毒に思った」という解釈も可能である。

現代語訳

(陸奥の守は)しきりに心引かれ、その夜、人が寝静まるときに忍んで行った。この女は局(＝独立した部屋)にはおらず、庇(＝寝殿造の母屋の外周に連なる部屋)の一間にただ一人で寝ているので、守はとても嬉しく心をとめかせて、静かに傍近く伝い寄ったが、(女はたいそうよく寝入っていたのだろうか、目を覚ます様子もない。上にかけた衣を押しのけたが、何も言わない。几帳の隙間から漏れ入る明かりも、たいそう頼りないところで(目を凝らして)見ると、肌は温かくて不気味な感じではないが、頭が無いようである。とても疑わしく見間違ひであろうかと思うけれども、気がかりなので、帷を少し上げて見ると本

さりげなく自分の部屋に入って横になったけれど、うとうとと眠ることもできない。やはり(女のこと)が気になって、「どのような者の仕業であろうか、言うまでもなく屋敷の中の男どものうち(の一人の仕業)であろうが、(女に)思いを寄せる男が冷淡で強情な女を恨んでこのようにしてしまったのであ

自分に暇を出す決断をなさつたのであろうかと、たいそうきまり悪く思い乱れて、退出する(から)ということ

その名も冷淡な籬が島で暮らすように(堅く貞節を守って)この屋敷で働いてきたのに(自分の気持ちを疑われて、このように隔てられることになってしまったのがつらい)。(と一首の歌を記し、その傍らに)「真木の柱は」と(『源氏物語』「真木柱」の巻の歌を)書き付けたので、北の方もそうはいってもやはり気の毒だと感じた。守も「それでは」と(女が)出て行くのを見るには、並々でなく涙ぐましくいたけれど、女は「ただこの人(陸奥の守)の理不尽な心のせいでこのようなこと(になった)」とばかり思うので、恨めしくて、たいした風も吹かないのにやたらに立ち騒ぐ波(のような浮気な人の誘い言葉)が

とほのかに詠み申し上げるのを、(守は)「さては北の方などが(嫉妬から)恨んだこと(が理由で屋敷を出ることになった)」と思っ

作品(作者)解説

江戸時代中期の一七七八年に成立した、三十の短編からなる怪異物語集である。作者の荒木田麗女は伊勢内宮の神主の娘で、和歌・俳諧・漢詩を嗜む傍ら、王朝物語の研究を行い、王朝風の擬古文を駆使して史書仕立ての物語を数多く書いた作家である。彼女の物語作品は多くが平安貴族の世界を舞台としており、本文箇所も例に漏れず、近世の怪異物語ではあるが擬古物語ともいえる内容であった。なお、この『怪世談』を世に紹介したのは与謝野晶子である。

参考

出典における話の続きは以下のとおり。――その後、女が出羽の守のもとに出仕したという噂を聞いた陸奥の守は、「女の頭が飛び回ること

入試情報・解答時間

国語105分 大問3問(論理・古文・漢文)



解答と採点基準

問1 長者<sup>A</sup>さまが唾を吐く<sup>B</sup>とうとするとき、私が（長者さまが唾を吐くより）先に踏まなければならぬ。

- A ≡ 5 「主語を補えていなければ減点3。「長者さま」は「身分の高い方」や「富豪さま」でも可。」  
B ≡ 5 「長者さまが唾を吐くより」はなくても可。「踏まなければならぬ」は「踏むしかない」などと訳しても可。」

問2 おまえは<sup>A</sup>どうして私の唇や歯を踏みつけたのか。

- A ≡ 2  
B ≡ 8 「何以」を原因・理由を問う疑問詞として訳せていなければ不可。「踏みつけた」は「踏んだ」などでも可。」

問3 われふ<sup>A</sup>まんとほつ<sup>B</sup>すといへども、つね<sup>C</sup>におよばず。

- A ≡ 4 「未然形+ん」とほつす」と書き下していなければ不可。「ほつす」と現代仮名遣いでも可。」

- B ≡ 3 「と」がなければ不可。「いえども」と現代仮名遣いでも可。」  
C ≡ 3 「つねには」と書き下しているものは不可。」

問4 長者<sup>A</sup>の唾を誰よりも早く踏んで掃除すること、長者<sup>B</sup>から気に入られること。

- A ≡ 5 「誰よりも早く」という要素がなければ減点2。」  
B ≡ 5 「長者から気に入られる」は「長者の心をつかむ」「長者の好感を得る」などでも可。」

問5 何事<sup>A</sup>かを行<sup>B</sup>つにあたつて、なすべき時を見誤れば悩ましい結果を招くことになる。だから物事を行<sup>B</sup>つには、その時機を適切に見極めなければならないという<sup>C</sup>こと。

- A ≡ 5 「なすべき時を見誤れば」は「まだ機が熟していなければ」などでも可。」  
B ≡ 5 「その時機を適切に見極めなければならない」は「実行にふさわしいタイミングを見定める必要がある」などでも可。」

本文解説

◆百の喩話を収録した古代インドの仏典

昔、長者がいて、彼が唾を吐いたときには側近の者たちがすぐにそれを踏んで掃除することで、長者に気に入られようと躍起になっていた。いつも周りに先を越されて唾を踏み損ねる愚か者は、長者が唾を吐く前に踏みつけなければならないと考え

えた。そして長者の口元を踏みつけたことで、長者は唇が切れ、歯が折れてしまう。長者が理由を尋ねると、愚か者はほかの者に先んじること、長者に気に入られなかったのだと答える。このエピソードから、何事をなすのにも、それを実行する時機を適切に見極める必要性を説く。日本の仏教説話にも見られるような、教訓を含む寓話である。

考察

■問1（現代語訳）

1行目に「長者唾時、左右之人以脚踏却。」とあるので、「唾」の主語は長者だとわかる。また「当」は再読文字で「まさ二くべシ」と読み、「すべきである・なければならない・はずである」などと解釈する。ここでは「なければならない」で訳出したが、「当」は英語でいうところの「must」だと考えて訳すようにすると、時と場合に応じた解釈がしやすい。さらに、「先」を「長者さまが唾を吐くより先に」などと補って訳せるとなおよい。

再読文字

- 【例】及<sup>レ</sup>時<sup>三</sup>当<sup>三</sup>勉<sup>レ</sup>励<sup>一</sup>。  
時に及びて<sup>レ</sup>当に<sup>三</sup>勉<sup>レ</sup>励<sup>一</sup>すべし。  
（時を逃さずしっかりと学ぶべきである。）

■問2（現代語訳）

「汝」は「なんぢ」と読む二人称の代名詞。また、「若」「爾」「女」なども同じく「なんぢ」と読んで二人称を表すことをあわせて覚えておきたい。続いて、「何以」は「なにヲもつテ」と読んで原因・理由を尋ねる疑問詞である。同じ原因・理由を問う疑問詞には「何」「胡」「寧」などで「なんゾ」と読むものや、「安」「惡」「寧」などで「いづクンゾ」と読むもの、「何為」で「なんすレゾ」と読むものなどがある。さらに、疑問形か反語形かは文末で判断する。「終止形（+や）」または「連体形（+か）」で終わっているのは疑問形、「未然形+ん（や）」で終わっているのは反語形であると判断できる。ここでは「踏む」で終わっているため疑問形である。

疑問形

- 【例】何<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>我禽<sup>一</sup>。  
何を以て<sup>レ</sup>我が禽と為れる。  
（どうして私の捕虜となったのか。）

■問3（書き下し文）

「欲」は返読文字で、「活用語の未然形+ント欲ス」と読んで、「〜したい・〜しようと思う」という意を表す。また「雖」も返読文字で「〜終止形+ト+いへども」と読み、「〜としても・〜とはいっても」という意味になる。

假定形

- 【例】江東雖<sup>レ</sup>小、地方千里。  
江東小なりと雖も、地は方千里。  
（江東地方は狭いとはいっても、千里四方の土地はある。）

また、「常不」は副詞（常）が先にあり、否定語（不）がそれに続いてるので全否定の句形で「常二くす」と読んで「いつもくしない」という訳になると判断できる。これが逆の語順になり、「不常」となれば、部分否定の句形となり、「常二ハくす」と読んで「いつもくするとは限らない」という訳になる。

全否定形

- 【例】家貧常<sup>不<sup>レ</sup></sup>得<sup>レ</sup>油。  
家貧にして常に油を得ず。  
（家が貧しくていつも油を手に入れることができない。）

部分否定形

- 【例】家貧不<sup>レ</sup>常<sup>得<sup>レ</sup></sup>油。  
家貧にして常には油を得ず。  
（家が貧しくていつも油を手に入れることができるとは限らない。）

■問4（文意の理解）

「得汝意」の意味は1行目にある「左右之人欲得<sup>レ</sup>其意」を参考にすると、「長者から気に入られること」だとわかる。続いて、どのようなことをして長者に気に入られようとしたのかについて、傍線部を含む愚人の発言に着目すると、「唾欲出口、拳脚先踏」とあるので、「長者の唾を誰よりも早く踏んで掃除する」とだと理解できる。



昔有長者、左右之人欲得其意、皆尽恭敬。(1行目)

𦵑昔長者がいて、(その)側近の者たちは彼に氣に入られようと考え、誰もが慎み敬うことの限りを尽くした。

唾欲出口、拳脚先踏、望得汝意。」(5行目)

𦵑(長者さまの)口から唾が出ようとなると、その前に足をあげて踏みつけ、あなたさまに氣に入られようとした。

## 問5 (文章全体の理解)

長者に氣に入られようとする愚人の寓話から導き出される教訓が、傍線部を含む第二段落に示されているので、この段落の内容をまとめて解答を作成すればよい。

まず「凡」は「およそ」と読んで、「そもそも」「総じて」「一般的に」などという意味で、話を切り出すときに用いる。次に「物」は「物事」などの熟語を連想すれば理解できる。「未」は再読文字で、「いまダくず」と読んで「まだくない」と訳すので「(なすべき)時機がまだやってきていないのに、無理矢理それを実行しよう」とすると、かえって悩ましい結果を招く」という内容だとわかる。

第一段落では、愚人が長者に氣に入られようとして長者がまだ唾を吐かないうちにそれを踏みつけようとしたところ、長者に怪我を負わせるという悩ましい結果を招いたという寓話が描かれているので、物事を行うには、その時機を適切に見極めなければならないとまとめているのである。

再読文字

【例】未<sup>レ</sup>聞<sup>二</sup>好<sup>レ</sup>学者<sup>一</sup>也。

未だ学を好む者を聞かざるなり。

(まだ学問を好む人を聞いたことがない。)

## 書き下し文

昔長者有り、左右の人其の意を得んと欲し、皆恭敬を尽くす。長者唾する時、左右の人脚を以て踏みて却く。一愚人有り、踏むを得るに及ばず、念ひて曰く、「若し已に地に唾すれば、則ち諸人踏みて却く。唾せんと欲する時、我当に先に踏むべし。」是に於いて長者正に唾せんと欲する時、此の愚人即ち脚を挙げて長者を踏み、唇を破り歯を折る。長者愚人に語りて曰く、「汝何を以てか我が唇歯を踏む。」と。愚人答へて曰く「若し長者の唾口を出でて地に落つれば、諸人已に踏みて却くるを得、我踏まんと欲すと雖も、常に及ばず。是を以て、唾口を出でんと欲すれば、脚を挙げて先に踏み、汝の意を得るを望む。」と。

凡そ物は時を須む。時未だ到るに及ばざるに、強ひて之を為さんと欲すれば、反つて苦惱を得。是を以て、当に時と時に非ざると知るべし。

## 現代語訳

昔長者がいて、(その)側近の者たちは彼に氣に入られようと考え、誰もが慎み敬うことの限りを尽くした。長者が唾を吐くときには、側近の者たちは脚で(それを)踏み(地面に落ちた唾を)掃除した。一人の愚か者がいて、(ほかの者に先を越されて)踏んで掃除することができなかったため、考えて言うことには、「(長者さまが)すでに地面に唾を吐いた後では、ほかの者が(自分に先んじて)踏んで掃除してしまう。(だから長者さまが)唾を吐こうとするとき、私が(長者さまが唾を吐くより)先に踏まなければならない」とこうして長者がまさに唾を吐こうとするとき、この愚か者はすぐさま脚をあげて長者(の口元)を踏みつけ、(長者の)唇を傷つけ歯を折ってしまった。長者が愚か者に話して言うことには、「おまえはどうして私の唇や歯を踏みつけたのか」と。(すると)愚か者が答えて言うことには「もし長者さまの唾が口を離れて地面に落ちてしまえば、ほかの者が先に踏んで掃除してしまい、私が踏んで掃除しようとしても、いつも間に合わないのです。このように思いますので、(長者さまの)口から唾が出ようとなると、その前に足をあげて踏みつけ、あなたさまに氣に入られようとしたのです」と。

そもそも物事は(それをなすべき)時機(を見極めること)が求められる。(なすべき)時機がまだやってきていないのに、無理矢理それを実行しようとなると、かえって悩ましい結果を招く。このことから、機が熟しているかいないかを見極めなければならない。

作品(作者)解説

『百喻經』というタイトルではあるが、実際に収録されている話は九十八編である。五世紀のインドにおいて、僧伽斯那が経蔵から面白おかしい寓話などをピックアップしてまとめたものを、その弟子であった求那毘地が四九二年に漢訳したものとされている。初めに寓話を示し、そこから導かれる教訓などを後に示す二段構成になっていることが多い。魯迅が高く評価し、自らの資金で出版を後援したことでも知られる。

入試情報・解答時間

国語120分 大問4問(論理・文学・古文・漢文)

20

「源頼朝論」

みなもとのよりともろん

あおやまのぶみつ  
青山延光

【出題大学】徳島大学 総合科学部（前期）

解答と採点基準

問1 ①Ⅱ豈に知り易からんや ②Ⅱ此くのごとく(じつ)

③Ⅱ之を富士河に破り ④Ⅱ天下の大勢を知ると謂ふべし(謂ふべきか)

問2 書き下し文Ⅱ天子と雖も、之を如何すること(こと)無し。

現代語訳Ⅱ天皇とはいっても、権力を持った臣下の弊害をどうすることもできない。

それぞれ同内容可。  
AⅡ4／BⅡ6

問3 返り点Ⅱ宜長驅而進、攘滅平氏、直抛京師、以号令天下。

現代語訳Ⅱ源頼朝は、東国から京都まではるばると遠征して進軍し、平氏を追い払い滅ぼして、直接京都に本拠地を定め、京都から天下に号令をかけるのがよい。

再読文字「宜シク」ベシ(＝くするのがよい)の訳ができていないものは全体0。以下それぞれ同内容可。  
AⅡ3〔主語「源頼朝」を示す語がないものは減点2。〕  
BⅡ2／CⅡ2／DⅡ3

問4 藤原氏や平氏といった権力を持った臣下が、天皇の威光を借りて天下を治めようとして、まだ天下を従わせていないうちに天皇の怒りを買って憎まれたこと。

文末が「くこと」になっていないものは減点2。以下それぞれ同内容可。

AⅡ2〔藤原氏や平氏〕(4行目末の「彼ノ」の指示内容)がないものは減点1。  
BⅡ4／CⅡ4

問5 源頼朝は富士河の戦いで平氏に勝利して以降、その名声と権威は世間に響き渡っていたにもかかわらず、軍勢を引き連れて鎌倉を本拠地とした。天皇の在所である京都ではなく鎌倉を本拠地とすることで、源頼朝は天皇の威光を借りての政治に陥ったり、天皇の権力を侵したとして憎まれたりすることがあったから。

「Bすること、Cとなった」という関係性が明示できていないものは全体0。文末が「くから(ため)」になっていないものは減点2。以下それぞれ同内容可。  
AⅡ3〔源頼朝の名声、権威が世間に響き渡っていた」という意が示せていればよい。〕  
BⅡ4〔天皇の在所である京都〕に相当する語のないものは減点2。  
CⅡ3〔天皇の威光を借りる〕「天皇の権力を侵し憎まれる」いずれかを欠くものは減点1。

本文解説

◆江戸時代後期の評論

筆者は「天下の動きの大局を知る者は、その傾向を利用して天下を取ることができる」と主張する。ただし「天下の動きの大局は、わかりやすいはずがない」とも言い、その困難さをアピールする。その困難を成し遂げた人物として「源頼朝」を紹介し、頼朝が天下を手に入れることができた原因を考察するという展開である。頼朝が天下を手に入れることができた原因とは何か。「源頼朝」と「藤原氏」「平氏」や「天皇」との関係を踏まえた筆者の説明を読み取ることで、問5の解答ポイントも余さず解答できる。

考察

■問1（書き下し文）

①Ⅱ「豈に知り易からんや」と読み、「どうしてわかりやすいだろうか、いや、わかりやすいはずがない」という「反語」の意を示す。助詞「哉」はひらがなで答える。

②Ⅱ「此くのごとく」と読み、「このようであり」という意を示す。助動詞「如ク」はひらがなで答える。

③Ⅱ「之を富士河に破り」と読む。「於」は置き字。動詞「破り」に返る「之」「富士河」にはそれぞれ「之ヲ」「富士河ニ」と送りがなを付す。動詞に返る際に用いられる助詞は「ヲ」「ニ」「ト」「ヨリ」のいずれかである。

④Ⅱ「天下の大勢を知ると謂ふべし」と読む。「嗚呼」に呼応して文末を「謂ふべきか」としてもよい。助動詞「可シ」はひらがなで答える。動詞「知ル」に返る「大勢」「謂フ」に返る「知ル」にはそれぞれ「大勢ヲ」「知ルト」のように送りがなを付す。

問2（書き下し文・現代語訳）

書き下し文Ⅱ「雖」は「くといへども」と読み、「くといっても・くとしても」という逆接の意を示す。「天子」はここでは〔注〕のとおり「天皇」の意。

「如何」「何如」には、次のような用法がある。

・目的語を伴う場合…「くヲ如何セン」と読み、「くをどうしようか」という意。  
「如何セン」の「セ」はサ変動詞「す」の未然形、「ン」は推量・意志の助動詞「む(ん)」の連体形。「くヲ」は「如」と「何」の間に置かれる。

・主語を伴う場合…「くハ何如」と読み、「くはどのようなものであるか」という意。  
\*「いかん(セン)」と読む字にはほかに「何若」「奈何」「若何」などがある。

ここでは「無し」に続くように「之ヲ如何スル」と連体形で読む(連体形に「コト」を加えてもよい)。

現代語訳Ⅱ「天皇とはいっても、これをどうすることもできない」と訳し、「之」が示す内容(＝権力を持った臣下の弊害)を適切に補えば完成である。

問3（返り点・現代語訳）

返り点Ⅱ設問の指示に沿って返り点を付けていく。「平氏ヲ攘滅シ」とあるので「平氏」に一点、「攘滅」には「攘滅」のようにハイフンを入れ、「攘」に二点を付ける。「京師ニ抛リテ」とあるので「師」に一点、「抛」に二点を付ける。あとは「天下ニ号令スベシ」であるが、「ベシ」は再読文字「宜(よろシクベシ)」であることに注意しよう。「長驅…以」の一・二点を含む箇所をまたいで返るので上中下点をを用いる。「天下」に上点、「号令」には「号令」のようにハイフンを入れて「号」に中点を付ける。さらに再読文字「宜」に返ることができるように「宜」に下点を付ける。

現代語訳Ⅱまずは再読文字「宜」が「くするのがよい」という意を示すことに注意しよう。「長驅」は「はるばると遠征する」という意なので、解答欄のサイズにに応じて「東国から京都まで」といった語句を補うとよい。ほか、〔注〕にある「攘滅」「京師」を参考に解答を仕上げる。

#### 問4（文意の理解）

波線部（C）を現代語訳すると「野心家（である頼朝）が宿願とはしないものである」となる。では、野心家である頼朝は「どのようなこと」を宿願としないのだろうか。波線部（C）の直前には「天下の権ヲ専ラニスルヲ得ルト雖モ（天下を従わせる権力を好き勝手に行使できるとはいっても）」とあり、頼朝よりも以前に「天下の権ヲ専ラニ」した人々、すなわち「彼ノ権臣」（4～5行目）の所業であることがわかるはずだ。本文より「彼ノ権臣」の所業について説明した箇所を探すと、「彼ノ権臣の：天子ノ憤り嫉ム所ト為ル」が見つかるので、この箇所をまとめて解答する。指示語「彼ノ」の指示内容である「藤原氏や平氏」も具体的に書くこと。

#### 問5（文章全体の理解）

設問に「源頼朝が天下を手に入れることができた原因を、筆者はどのように考えているか」とある。この条件に沿った解答手順を次に示す。

I 波線部（D）を含む一文を解釈する。

「権臣の跡を襲はずして、天下の権焉に帰す」と読み、「権力を持った臣下の事例を踏襲せずに、天下を治めるための権力は鎌倉に集まった（天下が源頼朝の手に入った）」と解釈できる。つまり、筆者は「頼朝が天下を手に入れることができた原因」を「権臣の跡を襲はず（＝権力を持った臣下の事例を踏襲しなかった）」ことだと考えていることがわかる。

II 「権臣の跡を襲はず」を本文に即して具体化する。

「権臣」とは「昔朝廷：平氏横タリ」（1～2行目）にあるとおり、「藤原氏」「平氏」を示す。両氏の「跡（＝事例）」を確認すると「彼ノ権臣の：天子ノ憤り嫉ム所ト為ル」が見つかる。頼朝は「天皇の威光を借りて天下を従わせよう」とはしなかったし、また「天皇の権力を侵したとして天皇の怒りを買って憎まれる」こともなかったのである。

III 「藤原氏」「平氏」との違いを本文に即して具体化する。

両氏との違いは「京師に拠らず（＝京都に本拠地を置かなかった）」という点である。特に、平氏を富士河の戦いで破った後、頼朝の名声と権威は世間に響き渡っており、平氏を京都から追い払い滅ぼして、直接京都に本拠地を定めてもよかった。にもかかわらず、頼朝は軍勢を引き連れて鎌倉を本拠地とした。天皇の在所である京都ではなく鎌倉を本拠地とすることで、やはりIIに記したように「天皇の威光を借りる」ことも、また「天皇の権力を侵したとして天皇の怒りを買って憎まれる」こともなかったのである。

II・IIIより、「III：頼朝は富士河の戦いで平氏に勝利して以降、その名声と権威は世間に響き渡っていたにもかかわらず、軍勢を引き連れて鎌倉を本拠地とした。II：天皇の在所である京都ではなく鎌倉を本拠地とすることで、頼朝は天皇の威光を借りての政治に陥ったり、天皇の権力を侵したとして憎まれたりすることがなかったから。」と解答できる。

#### 書き下し文

天下の大勢を知る者、能く其の勢に乗じて之を為す、而るに天下の大勢、豈に知り易からんや。昔朝廷藤原氏に任ずれば、則ち藤原氏專にし、平氏に任ずれば、則ち平氏横たり。権臣の患、此くのごとく、天子と雖も、之を如何すること無し。源頼朝平氏を討つに及びて、已に之を富士河に破り、声威天下を震はす。常情より之を覩れば、宜しく長軀して進み、平氏を撲滅し、直ちに京師に拠りて以て天下に号令すべし。而るに頼朝は乃ち師を旋らし鎌倉に拠りて、以て東国を定む、何ぞや。彼の権臣の天下に於けるや、徒らに天子を挟みて以て之に臨むのみ。是れ天下未だ必ずしも服せずして徒らに天子の憤り嫉む所と為る、天下の権を専らにするを得ると雖も、英雄の願はざる所なり。唯だ頼朝は則ち天子を挟まず、故に天子権臣を以て之を待たず。京師に拠らずと雖も天下能く当たる莫きは、天下勁兵の地に拠るを以てなり。権臣の跡を襲はずして、天下の権焉に帰す。嗚呼、頼朝天下の大勢を知ると謂ふべし。

#### 現代語訳

天下の（動きの）大局を知る者は、その傾向を利用して天下を取ることができるが、天下の（動きの）大局は、どうしてわかりやすいだろうか、いやわかりやすいはずがない。昔、朝廷が藤原氏に（重職を）任せると、藤原氏が権力をほしきままにし、平氏に（重職を）任せると、平氏が好き勝手に（権力を行使）した。権力を持った臣下の弊害はこの（＝藤原氏・平氏の）ようであり、天皇とはいっても、権力を持った臣下の弊害をどうすることもできない。源頼朝が平氏を討伐することになって、（頼朝が）平氏を富士河（の戦い）で破った後、（頼朝の）名声と権威は天下を震わせた。常識的な感覚でこれ（＝頼朝の名声と権威が世間に響き渡っていたこと）を考察すると、（頼朝は、東国から京都まではるばると）遠征して進軍し、平氏を（京都から）追い払い滅ぼして、直接京都に本拠地を定め（京都から）天下に号令をかけるのがよい。しかし頼朝はそこで軍隊を戻し鎌倉に本拠地を置いて、（まずは）東国を平定した、（これは）なぜか。（藤原氏・平氏といった）権力を持った臣下の天下で（の行い）は、無駄に天皇の威光を借りて天下を従わせようとしただけである。これでは天下がまだ必ずしも従うとは限らず無駄に天皇の怒りを買って憎まれ、天下を従わせる権力を好き勝手に行使できるとはいっても、野心家（である頼朝）が宿願とはしないものである。ただ頼朝は天皇の威光を借りず、だから天皇も権力を持った臣下として頼朝を扱わなかった。京都に本拠地を置かなくとも天下に（頼朝に）対抗するものがないのは、全国のうちで強兵が集う地である関東の一角（、鎌倉）に（頼朝が）本拠地を置いたことによるのである。権力を持った臣下の事例を踏襲せずに、天下（を治めるため）の権力はここ（＝鎌倉）に集まった。ああ、頼朝は天下の（動きの）大局を知っていたといえるに違いない。

#### 作品（作者）解説

筆者の青山延光は江戸時代後期の儒学者で水戸藩士。一八二四年、彰考館勤務となり、一八三〇年には彰考館総裁代役を務めた。その後、水戸藩校弘道館教授に転じ、のちには弘道館教授頭取となった。一八四六年、再び彰考館に入り、『大日本史』の完成に尽力した。史学によく長じ、『国史紀事本末』『六雄八将論』『学校興廃考』など多数の著書がある。幕末期の政争激しい水戸藩にあって、よく学問教育の府を守ったとされる。

#### 入試情報・解答時間

国語90分 大問3問（論理・文学〔随〕・古文または漢文）



解答と採点基準

問1 アⅡために イⅡのみ

ウⅡゆゑん エⅡここにおいて

問2 疏広は家人に<sup>A</sup>しばしば<sup>B</sup>疏広の家に金の残りがまだどれくらいあるかを<sup>C</sup>尋ね<sup>D</sup>

AⅡ2

BⅡ2「同内容可。」「家の者」「家族」「子孫」なども可。」

CⅡ6「同内容可。」「しばしば」は「しきりに」「たびたび」なども可。

「其ノ」の指示内容（Ⅱ「疏広の」）がないものは減点1。」

問3 一族の者や旧友を招き宴会を続ける疏広に<sup>A</sup>すべての蓄えを使われてしま<sup>B</sup>う前に、<sup>C</sup>疏広に田畑と家屋を<sup>D</sup>買い求めさせ、子孫である自分たちの取り分を<sup>E</sup>確保しようと考えたから。

文末が「〜から（ため）」になっていないものは減点2。  
AⅡ3「疏広にすべての蓄えを使われてしまう前に」という意が示せていれよい。  
BⅡ2「疏広に田畑や家屋を買ってもらう」という意が示せていれよい。  
CⅡ5「子孫である自分たちの取り分を確保したい」という意が示せていれよい。  
問4 われあに<sup>A</sup>うはいし<sup>B</sup>てし<sup>C</sup>そんなおもは<sup>D</sup>ざらんや。  
問5 子孫には普通に生活できる財産を残しているし、必要以上の財産は子孫の志を奪い、過失を招く一因となる。また財産は民衆の恨みを買うものであり、自分が皇帝から賜った金を、自分とその同郷人との宴会に費やすのは適切ではない。

それぞれ同内容可。

AⅡ2／BⅡ2／CⅡ2／DⅡ2／EⅡ2

本文解説

◆前漢の正史

疏広は官職を退いた後、郷里に帰り、毎日客人を招いては酒宴を楽しんでいた。父の散財ぶりを心配したその子孫は、父の兄弟を介して父に田畑と家屋を買い求めるよう進言する、という展開である。なぜ子孫は父に田畑と家屋を買い求めるよう進言したのだろうか。また、その進言を受けて疏広はどのように回答したのだろうか。

句形に関する知識に加え、疏広の発言に見られる「顧ミルニ」「今復タ」「且ツ」「又」「故ニ」といった副詞や接続語に注意して読み取ることで、問5の解答ポイントも余さず解答できる。

考察

●問1（読み）

問4（書き下し文）

アⅡ「広ノ」に続くように「ためニ」と読む。「為」には、動詞として「なす（＝する・行う）」「ナル（＝くになる）」「つくル（＝作る）」、助動詞として「たり（＝だ・である）」「る・らル（＝くれる）」といった読みがある。  
イⅡ「のみ」と読み、「くだけだ」という意を示す。ほかに「のみ」と読む字として「而已矣」「爾」などがあり、いずれも文末に用いる。  
ウⅡ「ゆゑん」と読み、「理由・方法」といった意を示す。  
エⅡ「ここニおイテ」と読み、「そこで」という意を示す。「是以」「以レ是」もよく出題されるので覚えておこう。

●問2（現代語訳）  
「数」はふりがなのとおり「しばしば」の意。「尚」は「なほ」と読み「まだ」「やはり」といった意。「尚」には「たふとづ（＝尊敬する）」という動詞としての用法もあるので注意したい。「幾所」は「いくばく」と読み「どれくらい（数量を問う）」という意。「幾何」「幾許」と表記することもある。解答欄の大きさによるが、「誰は」（疏広は）、「誰に」（家人に）、「何を」（金の残りがどれくらいあるかを）「問」うたのかを明記するとよい。指示語「其ノ」が示す内容（Ⅱ疏広の）も漏らさずに加えたい。

問3（文意の理解）

傍線部②を含む疏広の子孫の発言を確認すると、「今日（父が客人を招いて酒宴する）飲食にあてる蓄えが今にもなくなろうとしている」とある。これをヒントにすると、疏広の子孫は「一族の者や旧友を招き宴会を続ける父（Ⅱ疏広）にすべての蓄えを使われてしまう」ことを心配していることがわかる。そこで、疏広の子孫は、父（Ⅱ疏広）の兄弟に頼んで、財産が残っているうちに父に田畑と家屋を買い求めさせ、子孫である自分たちの取り分を確保しようと考えたのである。なお「現代語訳」ではなく「説明」が求められているため、解答の中では「父」ではなく「疏広」と表記するように注意したい。

◎問5（文章全体の理解）

設問に「疏広はどういうことを『不亦可乎』と言っているのか、本文に即して」とある。この条件に沿った解答手順を次に示す。

I 傍線部④の解釈

・「亦た可ならずや」と読み、詠嘆（Ⅱなんとよいことではないか）の意を示す。  
・「よいこと」の具体的内容は、傍線部④の直前部「樂しみて郷党宗族と共に其の賜を饗け、以て吾が余日を尽くす」より「自分とその同郷人との宴会に費やすこと」とわかる。

II 本文に即して（傍線部③に続く疏広の発言）の考察

・自ら旧の田廬有り、子孫をして其の中に勤力せしむれば、以て衣食を共するに足り、凡人と齊しからん。（子孫には普通に生活できる財産を残している）  
・復た之を増益して以て贏余を為さば、但だ子孫に怠墮を教ふるのみ。賢にして財多ければ、則ち其の志を損ひ、愚にして財多ければ、則ち其の過ちを益す。（必要以上の財産は子孫の志を奪い、過失を招く一因となる）  
・夫れ富者、衆人の怨なり。（財産は民衆の恨みを買うものである）  
・此の金は、聖主の老臣を惠養する所以なり（自分Ⅱ疏広が皇帝から賜った金である）

I・IIより、「II：子孫には普通に生活できる財産を残しているし、必要以上の財産は子孫の志を奪い、過失を招く一因となる。また財産は民衆の恨みを買うものであり、自分が皇帝から賜った金を、I：自分とその同郷人との宴会に費やすのは適切だということ」と解答できる。

書き下し文

広既に郷里に帰り、日家をして共具して酒食を設けしめ、族人故旧賓客を請き、与に相娛樂す。数其の家に金の余尚ほ幾所有るかを問ひ、趣し売りて以て共具す。居ること歳余、広の子孫窃かに其の昆弟老人の広の愛信する所に謂ひて曰はく、「今日飲食の費且に尽さんとす。宜しく丈人の所より、勸めて君に説きて田宅を買はしむべし。」と。老人即ち間暇の時を以て広の為に此計を言ふに、広曰はく、「吾豈に老諄し子孫を念はざらんや。顧みるに自ら旧の田廬有り、子孫をして其の中に勤力せしむれば、以て衣食を共するに足り、凡人と斉しからん。今復た之を増益して以て贏余を為さば、但だ子孫に怠堕を教ふるのみ。賢にして財多ければ、則ち其の志を損ひ、愚にして財多ければ、則ち其の過ちを益す。且つ夫れ富者、衆人の怨なり。吾既に以て子孫を教化する亡く、其の過ちを益して怨を生ずるを欲せず。又此の金は、聖主の老臣を惠養する所以なり、故に樂しみて郷党宗族と共に其の賜を饗け、以て吾が余日を尽くすも、亦た可ならずや。」と。是に於いて族人説服す。

現代語訳

疏広は郷里に帰った後、毎日家人に酒食を用意させて、一族の者や旧友といった客人を招き、自分も共に（酒宴を）楽しんだ。（疏広は家人に）しばしば疏広の家に金の残りがまだどれくらいあるかを尋ね、（残りの財産を家人に）促して売り払い（その金でさらに酒食を）用意した。（疏広が郷里の家に）住むことが一年余り（の頃）、疏広の子孫はこっそりと疏広の兄弟である老人で疏広が大切に思っている者たちに（向かって）言った、「今日（父が客人を招いて酒宴する）飲食にあてる蓄えが今にもなくなろうとしている。あなた方から、父を説得し田畑と家屋を買わせてほしい」と。老人たちはすぐにひまな時を見計らって疏広のために疏広の子孫の考えを言ったところ、疏広は（老人たちに）言った、「私がどうしておいはれて子孫のことを考えないでいようか、いやよく考えているのだ。よく考えると（当然のように）財産として田畑と家屋があり、（我が）子孫を（財産である）

田畑と家屋の中で働かせれば、（我が子孫は）そこで衣食を十分に用意することができ、平凡な連中と変わらなくなるだろう。今さらに財産を増やして余分に残すようにすれば、ただ（我が）子孫に怠惰を教える（ことになる）だけだ。（子孫が）賢明で財産が多ければ、まさに子孫の志を損ねてしまうし、（子孫が）愚かで財産が多ければ、まさに子孫の過失（の機会）を（ますます）増やす。そのうえそもそも富める者は、民衆の恨み（の対象）である。私が（我が）子孫を教える論すことがなくなり、彼らの過ち（の機会）を増やして（民衆の我が子孫に対する）恨みを生じさせたくはない。さらに（酒宴に用いている）金は、皇帝（陛下）が退職する私を労うためのものであり、だからこそ（私が）楽しみとして同郷・一族の人々とともに皇帝（陛下）からの褒美を頂戴して、私の残された日々を（過ごすのに）費やすのも、なんとよいことではないか」と。そこで（疏広の）一族の老人たちはよろこんで納得した。

作品（作者）解説

後漢の歴史家班固が著した、前漢の正史。帝紀十二、表八、志十、列伝七十編よりなる紀伝体の書。班固の父の班彪は『史記』が武帝の半ばまでの歴史で終わっているため、それ以後の歴史を記した『後伝』六十五編を著した。班固は父の遺志を継ぎ、これに武帝以前の歴史を加えて前漢一代および王莽の滅亡にいたるまでの歴史を、二十余年を費やして完成した。『地理志』には日本（倭）についての記述がある。『漢書』は、『史記』『後漢書』『三国志』と並び、二十四史（各王朝の正統の歴史）の中でも特に著名な「四史」とされる。

入試情報・解答時間

国語120分 大問4問（論理・文学・古文・漢文）

解答と採点基準

問1 a 〓これを b 〓ひとしく c 〓たちどころに  
d 〓むべなるかな e 〓ますます

問2 これによりてこれをみれば（これによりてこれをみるに）

問3 張説が（それを）辞退して言うことには、<sup>A</sup>「学士には從來『大』とつく称号はありません、（ですから）私は（大学士という）称号をお受けしようと思いません。」と。  
<sup>B</sup>「辞退して」は「断って」なども可。目的語は書かなくても可。」  
<sup>B</sup> 4 「大学士」という称号が存在しないという要素がなければ不可。「称号」は「呼び名」「敬称」「尊称」なども可。」  
<sup>C</sup> 3 「お受けしようと思いません」は「名乗るつもりはありません」なども可。」

問4 目下の者は諂い、目上の者は驕り高ぶる風潮の中、<sup>A</sup>過剰な称号がつけられる傾向が加速しているため、<sup>B</sup>「大」の次にはどのような称号がつけられるのかということ。（74字）

A 〓 3 「過剰な称号がつけられる傾向」にある背景について言及できていなければ不可。「目上の者」「目下の者」は「身分の高い者」「身分の低い者」なども可。」  
B 〓 3 「過剰な称号がつけられる傾向が加速している」という要素がなければ不可。「爺」から「老」、「大」への変化を具体的に説明していても可。」  
C 〓 4 「凡人の考え及ぶところではない対象が「まだつけられていない『大』のさらに上の称号」であることが説明できていなければ不可。」

本文解説 清代前期の怪異小説集

夏に大雪が降ったことに驚いた民衆が、鎮守の神に祈りを捧げたところ、その鎮守の神はすぐさま人間にのりうつり、自分のことを「大」の一字を付け加えて呼ぶよう告げる。民衆が言われたとおりに「大老爺」と叫ぶと、たちどころに雪が止んだ。この話から、神でさえもお追従を好むのだと説き、『莊子』の一節を引用して、人も昔からお追従を好む存在であることを示す。作者は、唐代に皇帝から「大」という称号を授けられた張説学士が、学士には「大」という称号がつかないと辞退したのに、清代に入って過剰な称号がつけられる傾向が顕著になってきていると述べ

考察 問1（読み） a 〓 「諸」は「これ」と読む。ほかにも、「之」「此」「是」「焉」「斯」なども「これ」と読むことをあわせて覚えておきたい。

「辞」は「辞職」というように「やめる」、「辞退」というように「ことわる」、「祝辞」というように「ことば」、「辞去」というように「いとまごいをする」などの意味がある。ここでは皇帝の「大学士」という称号を授けようという提言を受けての発言であるので、「じす」と読んで「ことわる」という意味になるとわかる。

張説の発言内容については、まず後半部分の「臣不敢称」から解釈する。「臣」は臣下の一人称で、「私」と訳す。また「不敢」は「しよとはしない」「するようなどとはしない」と訳すので、張説が「大学士」と称するようなことはしない、と主張しているとわかる。続いて前半部分の「学士徒無大名」はその理由になっていると考えられ、「無」が返読文字であるため、「学士には從來『大』とつく称号はない」という意味だと理解できる。

b 〓 「齊」は「ひとしく」と読み、「そろっていること」や「同時であること」を表す。

c 〓 「立」は「たチドコロニ」と読み、「たちまち」や「直ちに」などの意を表す。

d 〓 「宜」は「よろシ」とも「よろシクベシ」とも「むべナリ」とも読める。ここでは、鎮守の神が自らを「大老爺」と呼ばせたことを受けて、『莊子』の一節につながるフレーズであるため、「もつともである」「当然である」という意を表す「むべナリ」であると判断する。「乎」は、置き字として扱うことも、「か」と読んで反語を表すことも、「や」と読んで反語や呼びかけを表すことも、「かな」と読んで詠嘆を表すこともある。ここでは、神でさえもお追従を好むのだから、人であればなおさらだ、という作者の感慨が示されているので「かな」と読む。

e 〓 「益」は繰り返しを表す「ゝ」がなくても「ますます」と読む。同様に「教」「屢」は「しばしば」、「逾」「愈」は「いよいよ」、「偶」「会」「適」は「たまたま」と読むことも覚えておきたい。

《覚えておきたい漢字の読み》

「之」「此」「是」「焉」「斯」…これ

「宜」…よろシクベシ、むべナリ

「益」…ますます

「数」「屢」…しばしば

「逾」「愈」…いよいよ

「偶」「会」「適」…たまたま

問4（文章全体の理解） 傍線部中の「匪夷所思」は、「注」に「凡人の考え及ぶところではない」とある。考え及ばない対象は、直前の作者の発言に着目すれば明らかになる。具体的には「窃意（私は心ひそかに〜と思っている）」（8行目）とあるので、これ以降の発言に注目すればよい。「数年以後、称爺者必進而老、称老者必進而大、但不知大上造何尊称。（数年後には、『爺』と称する者は必ず『老』に格上げとなり、『老』と称する者は必ず『大』に格上げになると思っている。ただ、『大』のさらに上の称号はどのようなものになるのか見当もつかない。）」（8〜9行目）という内

張説は「説」「辞」曰、「学士徒無大名、臣不敢称。」

返読文字 臣下の一人称

「大」とつく称号はない

大学士と称するよう

なことはしない

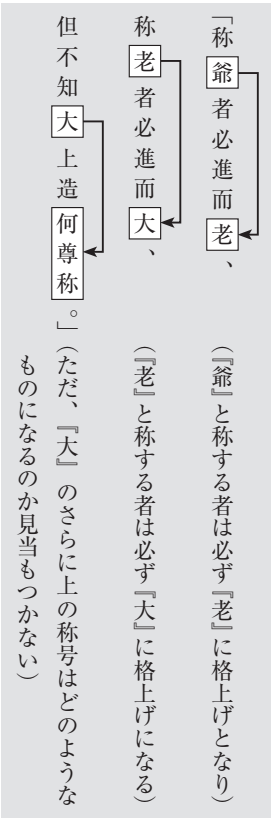
否定形 【例】側目 不<sub>レ</sub>敢<sub>テ</sub>視<sub>一</sub>。 目を側めて敢て視ず。（目を伏せて見ようとはしなかった。）

問2（書き下し文） 「由此觀之」は「此れに由りて之を觀れば（観るに）」と読み、「このようなこと（理由）から考えると」や「このようなわけで」という意味になる慣用句である。

問3（現代語訳） 「説」は「張説」のことで、漢文の構造上、これが主語だとわかる。続いて



容を答案の中心に据えればよいが、「全体の趣旨を踏まえて」という設問の指示があるため、そのように次々に新たな尊称が生み出されていくことになった背景についても言及しておこう。本文の4行目「世風之変也、…上者益驕。」の内容をまとめればよい。



書き下し文

丁亥の年七月初六日、蘇州に大いに雪ふる。百姓皇駭し、共に諸を大王の廟に禱る。大王忽ち人に附きて言ひて曰く、「如今老爺を称する者は、皆一の大字を増す。其れ我が神を以て小と為すも、一の大字を消得ざるなり。」と。衆悚然として、斉しく大老爺を呼べば、雪立ちどころに止む、此れに由りて之を覩れば、神も亦た語はるるを喜ぶ、宜なるかな下部を治むる者の事を得ることの多きは。異史氏曰く、「世風の変するや、下の者は益驕ひ、上の者は益驕る。即ち康熙の四十余年中に、称謂の古ならざるは、甚だ笑ふべきなり。…（中略）…唐の時、上張説に大学士を加へんと欲す。説辞して曰く、『学士従りて大名無く、臣敢て称せず。』と。今の大は、誰か之を大とする。初め小人の諂に由るも、因りて貴き者の悦びを得、之に居りて疑はずして、紛紛たる者遂に天下に徧し。窃かに意ふに、数年以後、爺を称する者必ず進みて老となり、老を称する者必ず進みて大とならんも、但だ大の上何の尊称に造るかを知らざるのみ。夷の思ふ所に匪ざるのみ。」と。

現代語訳

清の康熙四十六年の七月上旬の六日、蘇州に大雪が降った。民衆はおそれおののき、皆で鎮守の神の廟に（雪が止むよう）祈願した。（すると）神がすぐさま人にのりうつって

言うことには、「いまや、老爺と称する者は、皆『大』の一字を加えて（称して）いる。そもそも、私を神の『小』なる者だと見なし、『大』の一字を欠かすことが許されない」と。（それを聞いた者は、皆恐れてびくびくし、一斉に「大老爺」と叫ぶと、雪はたちまち止んだ。このようなことから考えると、神もまた（人と同様に）お追従を好む、『莊子』にあるように）治療に王の身体の下部をなめることまでして褒美の車の多さをほこる者がいるという話もつともであるなあ。

異史氏（＝蒲松齡）が言うことには、「世の風習が移り変わったことは、目下の者はますますへつらい、目上の者はますます驕り高ぶる（ようになってしまったことだ）。康熙年間の四十年余りで、称号についてもとの状態が失われてしまったのは、はなはだ滑稽だといえる。…（中略）…

唐の時代に、皇帝が張説に『大学士』の称号を与えようとした。（しかし）張説が（それを）辞退して言うことには、『学士には從來（大）とつく称号はありません、（ですから）私は（大学士という）称号をお受けしようと思いません』と。今日の『大』という称号は、（いたい）誰がつけたのだろうか。初めは徳のないつまらない人物のお追従から始まり、それが身分の高い者の喜悅を誘い、それをおかしいとも思わず、さまざまな場面で称号が用いられ、とうとう天下に広まってしまったのである。（私は）心ひそかに、数年後には、『爺』と称する者は必ず『老』に格上げとなり、『老』と称する者は必ず『大』に格上げになると思っている。ただ、『大』のさらに上の称号はどのようなものになるのか見当もつかない。凡人の考え及ぶところではないのだ」と。

作品（作者）解説

『聊齋志異』は、清代前期の文人蒲松齡による怪異小説集。生前の世界と死後の世界との交渉の物語や狐の物語を中心として、全編にわたって人外の者や不思議な出来事に関係した話が描かれている。民間の伝承などをもとにして、作者独自の創作がなされている。また、巧妙な構成と、典拠のある用語を効果的に駆使した表現による、精緻な描写が特徴的である。写実的な小説にはない人間の真と美とを感じさせ、数ある中国怪異文学の中でも最高傑作と評されている。

入試情報・解答時間

国語120分 大問4問（論理・論理・古文・漢文）

23 「江表伝」「資治通鑑」

虞溥・司馬光 【出題大学】 神戸大学（前期）

解答と採点基準

問1 ① Ⅱよろしくべし ② Ⅱおもえらく ③ Ⅱすなわち ④ Ⅱまた

②は「おもへらく」、③は「すなはち」も可。

問2 ア Ⅱ私がどうしてあなたが経典を学んで身につけ博士になることを望むだろうか、いや望まない

反語の形になっていないものは全体0。

A Ⅱ6 「欲」（Ⅱと望む）の訳でない場合は減点3。

B Ⅱ4 「卿（Ⅱあなた）」の訳ができていない場合は減点2。

イ Ⅱあなたは仕事の多さを言つが、誰が私のように仕事が多いだろうか

Bが「誰がくか」の疑問の形でない場合は全体0。「誰がく多いだろうか、いや多くはない」の反語の形も可。

A Ⅱ4 「卿（Ⅱあなた）」の訳ができていない場合は減点2。

B Ⅱ6 「若」（Ⅱのように）の訳ができていない場合は減点2。

本文解説

◆宋の歴史書

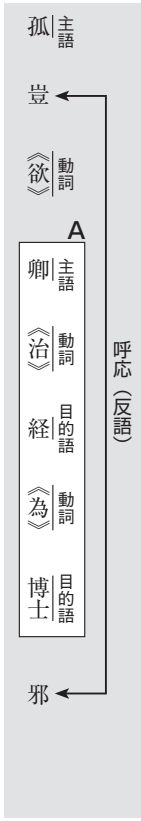
三国時代、呉を建国した孫権が、自国の武将である呂蒙に学問を勧める。しかし呂蒙は軍務の忙しさを理由に辞退する。孫権は、自分も忙しいが本を読んで大いに役立っているし、古今のすぐれた人物は皆学問を重視していると、具体的な人物名を挙げて呂蒙を論ず。そこで学問を始めた呂蒙だったが、後には、同じく呉の武将である魯肅に「武略だけだと思っていたのに今は知略も備えている。かつての呂蒙とは違っている」と驚かれるほどになる。それに対して、呂蒙は魯肅に「士は別れ

③ Ⅱ同じ読みをする漢字に「則」「即」「輒」などがある。それぞれの意味の違いを確認しておこう。

④ Ⅱ同じ読みをする漢字に「亦」「又」「還」などがある。それぞれの意味の違いを確認しておこう。

問2（現代語訳）

ア Ⅱ文の構造を考えてみよう。「注」から「孤」は自称であり、文の先頭にあるので主語である。次の「豈」は一番下の「邪」と呼応して、反語を表す。「欲」は、「くを望むくしようとする」の意味。つまり「孤豈欲A邪」は、「私がどうしてAを望むだろうか、いや望まない」という訳になる。次に「欲」の目的語部分にあたるA「卿治経為博士」の構造を見る。「卿」は二人称。また「注」から考えて「治（Ⅱ経典を）学んで身につける」と「為（Ⅱ博士に）なる」が動詞なので、「卿（Ⅱあなた）」がその二つの動詞の主語と判断できる。構造について図で表すと左のようになる。



イ Ⅱ「卿」が主語にあたるので、「言」が動詞、「多務」が目的語である。つまり前半は「あなたは仕事の多さを言つ（が）」となる。

次に、「孰く」は「孰力く」と読んだ場合は、「誰がくか（疑問）」または「誰がくか、いやくではない」「反語」という意味となる。「呂蒙は私（Ⅱ孫権）ほど仕事が多いことはない」ということを言えば十分なので、解答は疑問としたが、反語でもよい（反語のほうが強い言い切ることになる）。「若」は「く（の）ことシ」と読んで「く（の）ようだ」の意味なので、「若孤」は「私のようだ（私のように仕事が多い）」と訳す。

（ファイルして保存しよう）

問3 私、孫権だけでなく、孔子も光武帝も曹孟徳もみな学問を重視しているのに、あなたがどうして自分から（すんで）努力しないのか、いや努力するのがよい

Cが反語の形になっていない場合は全体0。

A Ⅱ3 「同内容可。」

B Ⅱ2 「卿（Ⅱあなた）」の訳ができていない場合は減点2。「くだけ」という限定の形になっていない場合は不可。

C Ⅱ5 「自（Ⅱ自分から）」の訳ができていない場合は減点2。

問4 呉にいた時は武略だけの人物だった呂蒙の、孫権の言葉に従い自ら進んで学問することで、知略をも備えた人物へと成長した状況。（60字）

A Ⅱ1／B Ⅱ2／C Ⅱ2／D Ⅱ3／E Ⅱ2

A・B・D・Eは同内容可。

て三日になれば、（大きく成長することもあるのだから）目をこすってよく見て相手に備えるべきだ。あなたはなんと気づくのが遅かったことよ」と答える。

考察

●問1（読み）

① Ⅱ再読文字。「くするのがよい」と訳す。

② Ⅱ「以為く」は、「以くA為くB（ⅡAをBと思う）」のAが省略された形とも考えられるが、熟語として「おもへらく」と読む。

問3（現代語訳・文意の理解）

「卿」は主語にあたり、「何不く」は「何ぞくざル」と読んで「どうしてくしないのか、（いや）くすればよい」と訳し、反語の形で勧誘や詰問を表す。また「独」も、「独く邪」として「独りくんや」と読めば「どうしてくだろうか、いやくない」という反語の形になる。ただ、ここでは「何不」と「独」の両方を反語と考えるのではなく、「独」とあることに注目し「と設問にあることから「独」は限定を表すと考えて、「あなたがどうして『自勉勸』しないのか、いや『自勉勸』するのがよい」と訳すことになる。「勉勸」は、「注」にあるように「努力する」意味なので、「自勉勸」は「自分から努力する」と訳す。また、「本文に即して意味を補い」とあるので、孫権の発言の後半（2く3行目「孤常讀書く傍線(A)までの部分」から「自ら努力」した他の人物の具体例を引用しつつ、解答をまとめること。

《孫権の発言の後半の流れ》

私、孫権だけでなく、孔子も光武帝も曹孟徳もみな学問を重視している

…他の人物の具体例

（古今のすぐれた人物は皆、学問を重視している）…暗に示された内容

あなたがどうして「自勉勸」しないのか、いや「自勉勸」するのがよい

…結論（反語によって強調）

◎問4（文意の理解）

波線部の「何く乎」は「何ぞくや」と読み、「なんとくことよ」と訳す詠嘆の形である。「見事之晩」は「物事に気づくのが遅い」ということ。したがって、呂蒙は波線部で「あなたはなんとその『事』に気づくのが遅いことよ」と言っていることになる。とすれば、「事」とは魯肅が大いに驚いて「武略だけの人物だった呂蒙が、今は知略もあり、呉にいたときはすっかり違っている」と言った

ことを指す。「本文に即して」とあるので、呂蒙がするように成長したきつかけである**孫権とのエピソードを合わせて**、**呂蒙の成長した状況をまとめればよい**。

## 書き下し文

初め、孫権呂蒙に謂ひて曰く「卿は今塗に当り事を掌るに、宜しく学問し以て自ら開益すべし。」と。蒙辞するに軍中多務を以てす。権曰く「孤豈に卿をして経を治め博士と為さんと欲せんや、但だ当に涉獵し、往事を見るのみ。卿多務を言ふも、孰か孤のごとき。孤常に書を読み、自ら以為へらく大いに益する所有りと。孔子言へらく『終日食らはず、終夜寝ねず、以て思ふも益無し、学ぶに如かざるなり。』と。光武兵戈の務に当り、手は巻を积かず。孟徳も亦た自ら老いて学を好むと謂ふ。卿何ぞ独り自ら勉勵せざらんや。」と。

蒙乃ち始めて学に就く。  
後、魯肅尋陽を過り、蒙と論議し、大いに驚きて曰く「吾謂ふに大弟は但だ武略有るのみと、今者の才略、復た呉下の阿蒙に非ず。」と。蒙曰く「士別れて三日なれば、即ち更に刮目して相待つべし。大兄何ぞ事を見るの晩きや。」と。

## 現代語訳

初め、孫権が呂蒙に告げて言った「あなたは今重要な地位にいて（国家の）事業を掌り担当するのに、学問をして自分で知見を開き役立てるのがよい」と。蒙は断るのに軍中で仕事の多さを理由にした。権は言った「私がどうしてあなたが経典を学んで身につけ博士になることを望むだろうか、いや望まない、ただ当然書物を広く読みあさり、昔のことは見るべきのみだ。あなたは仕事の多さを言うが、誰が私のよう（に仕事が多い）だろうか。私は常に本を読み、自分では思っている、大いに役立つ所があると。孔子は言った『一日中食事を取らず、一晩中眠りもせず、それで思索したを得るところがなかった、（先人の教えを）学ぶことには及ばないのだ』と。光武帝は戦争に従事するに当たって、手は巻物を放さなかった。曹孟徳もまた自分で老いて学問を好むと言う。（このように古今のすぐれた人物は皆、学問を重視しているのに）あなたがどうして自分から（すすんで）努力しないのか、いや努力するのがよい」と。蒙はそこで始めて学問に取り組んだ。

後、魯肅が尋陽を通り過ぎ、蒙と議論して、大いに驚いて言った「私は君はただ武略（戦のはかりごと）があるだけだと思っていたが、今の才略（才能と知略）は、もはやかつて呉にいたときの蒙君ではない」と。蒙が言った「一人前の男子は別れて三日になれば、す

ぐに目をこすってよく見て相手に備えるべきだ。あなたはなんとこのことに気づくのが遅かったことよ」と。

## 作品（作者）解説

『資治通鑑』は歴史書。宋の司馬光の著。宋以前の1400年近くをまとめた編年体の史書である。

『江表伝』は西晋の虞溥によって書かれたが、本としては失われて、『三国志』の注の中に多く本文が引用されている。その『三国志』は西晋の陳寿によって著された歴史書。魏呉蜀の三国分立の時代の歴史を記している。

## 参考

これは有名な故事で、「士（男子）三日会わざれば刮目して見よ」という慣用句のもととなった。また「呉下の阿蒙」といえば、旧態依然としていつまでも進歩しない人・状態を指す。

なお、文中の孔子の言葉は『論語』の「衛霊公篇」からの引用である。

## 入試情報・解答時間

国語100分　大問3問（論理・古文・漢文）



「白氏文集」

白居易

【出題大学】 岐阜大学（前期）

解答と採点基準

問1 a しかず b ただ c かつ

問2 オ

問3 中隠は街中Aにいるようにでもあり、（同様に）山B中Bにいるようにでもある。

AとBの内容が並列されていることが必須。「中隠は」はなくても可。  
「似」を「似ている」などと直訳しているものは全体から減点2。  
A 5 「出」は「出仕している」などと訳していても可。  
B 5 「処」は「隠居している」などと訳していても可。

問4 きみもとつりんをこのまば じやうなんにしようざんあり

問5 大隠は騒々しい街中に暮らして多忙な日々を送り、小隠は物静かな山中に隠棲し、飢えと寒さに苦しむと認識している。

A 5 「街中は騒々しいという内容がなければ減点2。街中の暮らしは忙しいという内容がなければ減点2。」

本文解説 中唐の詩文集

白居易が五十八歳の時、長安における刑部侍郎の職を辞して洛陽に移り、太子賓客分司東都となった頃の作である。長安にて高官として出仕し、地位と名声を得て、経済的にも豊かな「大隠」と、俗世間を離れて人里離れた山奥にひっそりと暮らす「小隠」に対し、白居易は「中隠」の形をとった。それは、適度な俸禄を受けながらも俗事に縛られず、自分の好む生き方を存分に享受できる生き方であった。多忙でもないが閑でもなく、肉体と精神を労することなく、飢えと寒さを免れるのである。一度きりの人生において、望むような生き方をすべて実現することは難しい。

困窮と栄達と富貴と貧賤の中間にある、「中隠」の生き方を白居易は求めたのである。

考察

問題1（読み）

a 5 「しかず」と読む。「如」も「若」も返読文字である場合は、「しく」または「ごとし」と読むが、「不」や「無」などの打消表現を伴う場合は、「ごとし」ではなく「しく」と読み、「しかず」「しくハナシ」と読むことがほとんどである。ここでも、「不如」となっているため、「しかず」となる。

b 5 「た夕」と読む。入試頻出の読みである。「但」以外にも「直」「唯」「特」「徒」

問題3（現代語訳）

第七句「似出復似処」と、第八句「非忙亦非閑」とが対句になっていることに着目し、「出」と「処」、「忙」と「閑」が正反対の内容となっていることを理解する。続いて、「出」は「忙」に対応しているため、「街中で役人として出仕すること」だと考え、「処」は「閑」に対応しているため、「山中に隠居すること」だと考える。また、「復」は「再び」と訳出することが多いが、ここでは「亦」と同じく「同様に」の意。

問題4（書き下し文）

第十三・十四句（7行目）と第十五・十六句（8行目）、第十七句・十八句（9行目）は対句になっていることに着目すると、「臨」から「好」に、「山」から「有」に返って読むことがわかる。「若」と「如」は返読文字になっているれば「しく」もしくは「ごとし」と読むが、ここでは返読文字になっておらず、また第十五句と第十七句を参考にと送り仮名が「シ」となっているため、「もシ」と読む。同様に第十五句と第十七句から、「好」は動詞であり、「もシ」と呼応するため、「このマバ」と未然形＋「ば」の仮定条件として読み下す。第十四句については、第十六句を参考にして「城南」のあとに「に」と送る。また、「有」は返読文字であることから「しうざんあり」と読める。

問題5（文意の理解）

「大隠」については、第一句「住朝市」、第四句「朝市太囂諠」、第七句「出」、第八句「忙」に述べられているので、これらの内容をまとめる。「小隠」については、「大隠」で参考にした箇所と対になっている第二句「入丘樊」、第三句「丘樊太冷落」、第七句「処」、第八句「閑」に述べられているので、これらの内容をまとめる。

「惟」なども同じく「た夕」と読み、限定形や累加形でも用いられる。

c 5 「かつ」と読む。「かつ」と読む場合は、その前後に並列される語句が並んでいる。「しばらく」と読むことや、再読文字として「まさニノントす」と読むこともあるのであわせて覚えておこう。

問題2（空所補充・漢詩のきまり）

漢詩は基本的に偶数句末において韻を踏むきまりになっている。偶数句末を見ていくと「an」または「en」となっていることから、選択肢をイ「乱」とオ「寒」に絞ることができる。そのうえで、空欄の直前には「と」と読む返読文字「与」があり、空欄は「飢」と並列される意味を表す字が入ると判断して、オ「寒」が正解となる。

五言絶句

押韻は偶数句末（●）

七言絶句

押韻は初句末と偶数句末（●）

起句	○	○	○	○	起句	○	○	○	○
承句	○	○	○	●	承句	○	○	○	○
転句	○	○	○	○	転句	○	○	○	○
結句	○	○	○	●	結句	○	○	○	○

五言律詩

押韻は偶数句末（●）

領聯と頸聯はそれぞれ対句が原則

首聯	○	○	○	○	○	○	○
頸聯	○	○	○	○	○	○	○
尾聯	○	○	○	○	○	○	○

七言律詩

押韻は初句末と偶数句末（●）

首聯	○	○	○	○	○	○	○	○	○
頸聯	○	○	○	○	○	○	○	○	○
尾聯	○	○	○	○	○	○	○	○	○

◎問6（文章全体の理解）

第三十二句（最終行）にある「四者」とは、第三十一句の「窮」「通」「豊」「約」を指す。「窮通」は「窮達」と同意であり、「困窮」と「栄達」という意味である。また「豊」は「生活が豊かであること」を意味し、「窮通」と同様に「豊約」も対義となる語からなる熟語であると考えられ、「儉約」などの熟語を思い浮かべれば、「約」は「生活が質素であること」という意がとれるだろう。また、「中隠」の利点について述べられた第九句「不劳心与力」、第十句「又免飢与寒」、第十一句「終歳無公事」、第十二句「随月有俸銭」の内容も解答に盛り込みたい。さらには、第十三句「君若好登臨」から第二十四句「造次到門前」までの内容も踏まえて、「悠々自適の生活を送ることができる」などとまとめればよい。

書き下し文

大隠は朝市に住み 小隠は丘樊に入る  
丘樊は太だ冷落 朝市は太だ囂諠  
如かず 中隠と作り 隠れて留司の官に在るには  
出づるに似て復た処るに似 忙に非ず亦た閑に非ず  
心と力とを勞せず 又た飢ゑと寒とを免る  
歳を終はるまで公事無く 月に随ひて俸銭有り  
君若し登臨を好まば 城南に秋山有り  
君若し遊蕩を愛せば 城東に春園有り  
君若し一醉せんと欲せば 時に出でて賓筵に赴け  
洛中君子多く 以て飲言を恣にすべし  
君若し高臥せんと欲せば 但だ自ら深く閑を掩へ  
亦た車馬の客の 造次として門前に到る無し  
人生一世に処り 其の道両つながら全うし難し  
賤なれば即ち凍餒に苦しみ 貴なれば則ち憂患多し  
唯だ此の中隠の土のみ 身を致すこと吉にして且つ安し  
窮通と豊約と 正に四者の間に在り

現代語訳

大隠は都心に住み、小隠は山中に住む。  
山中は過度にさびれていて、都心は過度に騒々しい。  
中隠となり、ひっそりと洛陽勤務の官に就いているのが一番よい。  
中隠は街中にいるようでもあり、山中にいるようでもあり、忙しいこともなく、暇を持て余すこともない。

肉体も精神も疲労することなく、衣食にも不自由することがない。  
一年中役所での仕事に追われることがないのに、毎月給料はもらえる。  
あなたがもし山登りが好きなら、町の南には秋の山がある。  
あなたがもし行楽が好きなら、町の東には春の公園がある。  
あなたがもし一杯飲みたいなら、時折宴席に顔を出せばよい。  
洛陽には徳の高い立派な人が多く、いつでも自由に話ができる。  
あなたがもし一人で寝そべっていたいなら、ただ自分で門を固く閉ざせばよい。  
また馬車に乗った客人が、気ままに訪問してくることもない。  
人間は一生の間に、二つの道を全うすることは難しい。  
貧しければ飢えや寒さに苦しみ、貴顕なる身には心労がつきまとう。  
ただこの中隠だけが、辛多く安らかな人生を送ることができる。  
困窮と栄達、富貴と貧賤、まさしくこの四者の間に中隠は存在する（のだから）。

作品（作者）解説

中唐の詩人・白居易の詩文集。白居易が自ら編集したもので、唐代の個人の詩集としては最大の七十一巻（現存）から成る。日本には平安時代、唐に渡った僧によって写本が伝えられ、平安貴族の間で流行した。平安時代を代表する文学である『源氏物語』や『枕草子』などにも大きな影響を与えた。鎌倉時代以降には、『太平記』や『源平盛衰記』などの軍記物にも多く引用されている。また、『文集抄』や『管見抄』などの抄録本が編まれたことから、その影響力の大きさがうかがえる。

入試情報・解答時間

国語100分 大問3問（論理・古文・漢文）

解答と採点基準

問1 a Ⅱくばくぞ(と) b Ⅱしばらく c Ⅱまた

問2 現代語訳Ⅱ家の者は王文正の度量を試ぞうとした。

A Ⅱ2  
B Ⅱ4 「王文正」は「王旦」も可。  
C Ⅱ4 「欲」を「～したいと思った・～(し) ようとした」などと訳していなければ不可。

説明Ⅱ王文正の食べるスープや飯に少しのススを入れた。

A Ⅱ2 「王文正」は「王旦」も可。  
B Ⅱ4 「スープ」は「汁物」や「羹」でも可。  
C Ⅱ4 「ススを混ぜた」など同内容可。

問3 書き下し文Ⅱ庖肉羹人の私する所と為り

現代語訳Ⅱ台所にある肉が料理人に私的に流用されていて  
受身の形になっていなければ全体0。  
A Ⅱ2／B Ⅱ2  
C Ⅱ6 「流用されて」は「隠されて」なども可。

問4 王文正が人の過失を明るみに出さなかったことは

A Ⅱ2 「王文正」は「王旦」も可。  
B Ⅱ4 「過失」は「過ち」など同内容可。  
C Ⅱ4 「明るみに出さなかった」は「暴かなかった」「摘発しなかった」など同内容可。

問5 なんとこれは馬の口取りは毎日馬を引いていたが、王文正はただ馬の口取りの背中だけを見て、いまだかつて馬の口取りの顔を見たことがなかった。立ち去る時になって馬の口取りの背中を見て、まさに気づいたのである。

A Ⅱ2 「なんと」は「まさに」など同内容可。  
B Ⅱ4／C Ⅱ4 「B・Cともに同内容可。」

問6 王文正は、食事にススを入れられても平然として怒らず、料理人が肉を私的に流用しているとの訴えを肉の配分を増やして丸く収め料理人をとがめず、門が修理中の時は通行が不自由でも不問に付し、退職する馬の口取りの顔を覚えていなくても背中を見て思い出し呼び戻して手厚く贈り物をするなど、度量の広い温厚な人物である。(150字)

A Ⅱ2／B Ⅱ2／C Ⅱ2／D Ⅱ2 「それぞれのエピソードがまとめられていれば同内容可。」  
E Ⅱ2 「度量が広い」ことに触れていなければ減点1。

本文解説

◆宋代の随筆集

北宋の宰相だった王文正についての四つの具体的なエピソード(後の①～④)が綴られている。まず、彼は度量が広く、いまだかつて怒る姿を見たことがないと述べられる。そして①清潔でないものを食べない彼の食事に家の者がススを入れても、それを食べないだけで怒らなかったエピソードが語られる。次に②料理人が肉を私的に流用しているとの訴えを、肉の配分を多くすることで丸く収めて料理人をとがめなかった。また③門が修理中の時は通行が不自由でも不問に付し、門の工事が終わって元の門を通る際にも何も言わなかった。最後に④退職する馬の口取りの顔を覚えていなくても、彼が立ち去る時に背中を見て思い出し、呼び戻して手厚く贈り物をした、といったエピソードが語られ、王文正の人物像を浮かび上がらせている。①のエピソードが問2に、②が問3・4に、④が問5に関連しているもので、それぞれの問いに的確に答えることで問6の記述もうまくまとめられるだろう。

◆考察

問1 (読み)

a Ⅱ「幾何」は、「どのくらいか」の意味で「いくばく(づ)」と読む。文末に  
来た場合は必ず「づ」をつける。ほかに読みがよく問われる熟語に「所謂」  
「所以」などがある。  
b Ⅱ「暫」は読みも意味も「しばらく」。これは現代文でも同じ読み・意味。  
c Ⅱ「復」は「再び」の意味で「また」と読む。同じ読み・意味の字に「還」  
がある。ほかに同じ「また」の読みで「亦」「もまた」の意味などがある。

問2 (現代語訳・文意の理解)

現代語訳Ⅱ「欲ニ～」は願望を表し、「～したい・～(し) ようとする」の意  
味。「量」は本文1行目の「局量」の【注】を参考にして、「度量(Ⅱ他人の言動  
を受け入れる心の広さ)」としよう。したがって、訳は「家の者は其の度量を試  
ぞうとした」となる。「其」は度量があると思われる王文正のことなので

「王文正の度量」とする。

説明Ⅱ王文正の度量を試すために、具体的に何をしたのかを答える設問である。  
第一段落の傍線部1以降で「家人」のしたことは、①「少シノ埃墨ヲ以テ羹ノ中  
ニ投ズ(Ⅱ少しのススをスープの中に投入した)」(2行目)、②「其ノ飯ヲ墨ス  
(Ⅱ王文正のご飯にススをつけた)」(3行目)である。この二点を簡潔にまとめ  
る。

問3 (書き下し文・現代語訳)

書き下し文Ⅱ「A為B所C」は受身の形。Cには動詞が入るので「私」は  
「私する」とする。読点で下につながるので、文末は「為り」と連用形にしてお  
く。

現代語訳Ⅱ右記したように受身の形で、「AはBにCされる」と訳す。【注】か  
ら、「庖肉」「羹人」はそれぞれ「台所にある肉」「料理人」である。さらに、肉  
が「私」されることで、「子弟(Ⅱ若い者たち)」が「肉ヲ食ラヒテ飽カズ(Ⅱ肉  
を飽きるほど食べられない)、乞フ之ヲ治ムルヲ(Ⅱどうかこれをなんとかして  
ください)」(4行目)と訴えていることから、肉が料理人によって「私的に流用  
されて(隠されて)」いるとわかる。

問4 (現代語訳)

第二段落で傍線部3の前に書かれているのは、若い者たちの「料理人が肉を私  
的に流用している」という訴えに対して、公(Ⅱ王文正)が料理人を追及するの  
ではなく一人ずつの肉の配分を増やして解決した経緯である。したがって「人ノ  
過」は「料理人」の「過失」のことで、「発カザルコト」は「明るみに出さな  
かったこと」と訳すことができる。ただ、傍線部の後で「皆此ニ類ル(Ⅱみなこ  
のようであった)」とあるので「料理人」は「人」と一般化して訳すのがよい。

問5 (現代語訳・文意の理解)

傍線部4までの内容を整理してみよう。(9～10行目)



①控馬卒有り、歳満チテ公ニ辞ス。

（＝馬の口取りがいて、年季が明けて公に別れの挨拶をした。）

②公問フ、汝馬ヲ控クコト幾時ゾト。

（＝公が尋ねた、おまえはどのくらい馬を引いていたかと。）

③曰ハク、五年ト。

（＝馬の口取りが答えて）言った、五年ですと。）

④公曰ハク、吾汝有ルヲ省ラズト。

（＝公が言った、私は思い返してみたが）おまえがいたのに気がつかなかったと。）

⑤既ニ去リ、復タ呼び回シテ曰ハク、汝ハ乃チ某人カト。

（＝馬の口取りが）立ち去った後、（公は）もう一度呼び戻して言った、おまえはなんと誰それではないかと。）

⑥是ニ於テ厚ク之ニ贈ル。

（＝そこで手厚く彼に贈り物をした。）

ここで疑問となるのは、④「王文正は馬の口取りの存在に気がつかなかった」のに、⑤「立ち去った後、馬の口取りのことを思い出した」のはなぜか。ということである。そこで、傍線部4は「乃 是」の形で、その疑問に答えている部分だと考えて、訳をしていこう。

傍線部4はまず、(ア)「日ヲ逐ヒテ馬ヲ控キ」は「馬の口取りは」毎日馬を引いて」と訳せる。次に、「但」は「ただ」(だけ)」という限定を表し、「未」は「まだ」ない」の意味の再読文字。「嘗」は「かつて・これまで」の意味なので、(イ)「但タ背ヲ見テ、未タ嘗テ其ノ面ヲ視ず」は「(王文正は)ただ(馬の口取りの)背中だけを見て、いまだかつて其の顔を見たことがなかった」と訳せる。「其の」が馬の口取りを指すことは①②などから明らかだろう。さらに、「因リテ」は「くによって・従って」の意味なので、(ウ)「去ルニ因リテ」は「馬の口取りが」立ち去る時になって」と訳し、(エ)「其ノ背ヲ見テ、方ニ省ルなり」は「其の背中を見て、まさに気づいたのである」と訳せる。「其ノ」はやはり馬の口

## 書き下し文

王文正太尉局量寛厚にして、未だ嘗て其の怒るを見ず。飲食に精潔ならざる者有らば、但だ食らはざるのみ。家人其の量を試さんと欲す。少しの埃墨を以て羹の中に投ず。公唯だ飯を啖らふのみ。其の何を以て羹を食らはざるかを問ふ。曰はく、我偶たま肉を喜ばずと。一日又其の飯を墨す。公之を視て曰はく、吾今日飯を喜ばず、粥を具ふべしと。

其の子弟公に懇へて曰はく、庖肉羹人の私する所となり、肉を食らひて飽かず、乞ふ之を治むるをと。公曰はく、汝輩人ごとく肉を料ること幾何ぞと。曰はく、一斤なり。今但だ半斤を得て食らひ、其の半羹人の喫す所と為ると。公曰はく、一斤を尽くせば飽くを得べけんやと。曰はく、一斤を尽くせば固より当に飽くべしと。曰はく、此の後人ごとに一斤半を料れば可なりと。其の人の過を發かざること皆此に類る。

嘗て宅門壞れ、主者屋を徹して之を新たむ。暫く廊廡下に於て一門を啓きて以て出入す。公側門に至り、門低く、鞍に拠りて俯伏して過ぐるも、都て問はず。門畢りて、復た正門を行くも、亦た問はず。

控馬卒有り、歳満ちて公に辞す。公問ふ、汝馬を控くこと幾時ぞと。曰はく、五年と。公曰はく、吾汝有るを省らずと。既に去り、復た呼び回して曰はく、汝は乃ち某人かと。是に於て厚く之に贈る。乃ち是れ日を逐ひて馬を控き、但だ背を見て、未だ嘗て其の面を視ず。去るに因りて其の背を見て、方に省るなり。

## 現代語訳

王文正太尉は度量が広く温厚で、いまだかつて彼が怒るのを見なかった。飲食するもので清潔ではないものがあれば、ただ食べないだけだった。家の者は彼の度量を試そうとした。少しのススを(肉の)スープの中に投入した。公(＝王文正)はただご飯を食べただけだった。それについてどうしてスープを食べないのかと尋ねた。(公は)言った、私は今日は(また)またま肉を欲しくなかったと。ある日また彼のご飯にススをつけた。公はそれを見つめて言った、私は今日はご飯が欲しくない、粥を用意しなさいと。

彼(＝公)のころの若い者たちが公に訴えて言うには、台所にある肉が料理人に私的に流用されていて、(自分たちは)肉を飽きるほど食べられない、どうかこれをなんとかしてくださいと。公が言った、おまえたちは一人あたり肉をどのくらいもらっているのかと。(答えて)言うには、一斤です。今はただ半斤だけもらって食べ、残りの半分は料理人に隠されていますと。公が言った、一斤まるまるあれば飽きるほど食べられるかと。(若

取りのことである(ちなみに、(イ)(エ)が先ほどの疑問の答えの部分ということになる)。現代語訳は、「其」が馬の口取りであることを踏まえつつ、(ア)(イ)(ウ)(エ)の傍線部分をまとめればよい。「乃是」は、前とのつながりを考えて「なんとこれは」とする。

## ◎問6 (文章全体の理解)

まず、王文正について「王文正太尉局量寛厚ニシテ(＝王文正は度量が広く温厚で)」と冒頭にあるので、そのことが手がかりに文章全体から王文正のエピソードをまとめていく。

王文正のエピソードは次の四つである(なお、それぞれに関連する【問】がある場合はその問の番号を示した)。

- ①食事にススを入れられても、平然として怒らなかった。【問2】
- ②料理人が肉を私的に流用しているとの訴えを丸く収めて、料理人をとがめなかった。【問3・問4】
- ③門が修理中の時は、通行が不自由でも不問に付した。
- ④退職する馬の口取りの顔を覚えていなくても背中を見て思い出し、呼び戻して手厚く贈り物をした。【問5】

解答は、四つのエピソードを列記したうえで「くなど、度量の広い温厚な人物である。」と締めくくればよい。

い者が) 言った、一斤まるまるあれば言うまでもなくきつと十分ですと。(公は) 言った、この後、一人あたり一斤半もらえばよいと。彼の、人の過失を明るみに出さなかったことはみなこのようであった。

かつて家の門が壊れ、大工の棟梁が屋根を撤去して門を新しくした。しばらく屋根付きの建物の下で門を一つ開けてそして出入りした。公が(その)側門にやって来て、門が低く、(そのため)鞍に寄りかかつてひれ伏すようにして通り過ぎて、まったく聞いたさなかった。門の工事が終わって、再び正門に行く時も、また問うことはなかった。

馬の口取りがいて、年季が明けて公に別れの挨拶をした。公が尋ねた、おまえはどのくらい馬を引いていたかと。(答えて) 言った、五年ですと。公が言った、私は(思い返してみたが) おまえがいたのに気がつかなかったと。(馬の口取りが) 立ち去った後、(公は) もう一度呼び戻して言った、おまえはなんと誰それではないかと。そこで手厚く彼に贈り物をした。なんとこれは馬の口取りは毎日馬を引いていたが、(王文正は) ただ(馬の口取りの) 背中だけを見て、いまだかつて彼の顔を見たことがなかった。立ち去る時になって彼の背中を見て、まさに気づいたのである。

## 作品(作者)解説

『夢溪筆談』は、宋代の沈括の著。沈括は大史令(天文台の長官)を務めたこともあり、自然科学にも詳しくった博識な人物である。したがって、失脚してから書かれた『夢溪筆談』には、暦法・天文のほか、文学・芸術・自然科学・技術・歴史・考古学などのさまざまな分野の研究の成果が収められている。

## 入試情報・解答時間

国語105分 大問3問(論理・古文・漢文)

26

「貞観政要」

【出題大学】 東京大学 文科（前期）

解答と採点基準

問1 <sup>A</sup> b 前代の歴史書は <sup>B</sup> 何曾を <sup>C</sup> 賛美し

A 2 「過去の」など同内容可。

B 2 「史官は」なども可。

C 3

D 3 「同内容可。」

<sup>A</sup> C 言葉 <sup>B</sup> を率直にして

A 5

B 5 「まっすぐにして」「正直にして」や「包み隠さず」など同内容可。

<sup>A</sup> d 時の皇帝を <sup>B</sup> 補佐する

A 5 「同内容可。」

B 5 「同内容可。」

問2 <sup>A</sup> 息子の <sup>B</sup> 劬よ、<sup>C</sup> おまえの身はまだ <sup>D</sup> 難を逃れることができるだろう

A の内容がなければ全体0。

A 3 「劬」だけでも可。

問3 <sup>A</sup> 武帝は国の将来を考えていないので、<sup>B</sup> 晋の治政は続かないと批判した <sup>C</sup> 何曾の <sup>D</sup> 陰口。

B 2 / C 2

D 3 「難」は「混乱による死」など同内容可。「可」(〜できる)の訳ができていなければ不可。

<sup>A</sup> B がなければ全体0。

A 4 「同内容可。何曾の発言を踏まえた内容であること。」

B 3

C 3 「批判した発言」など同内容可。

問4 <sup>A</sup> 国の危機であるのに、<sup>B</sup> 皇帝を諫めて国を助けられないような <sup>C</sup> 補佐役は必要ない <sup>D</sup> こと。

A 3 「同内容可。」

B 3 「同内容可。」

C 4 「補佐役」は「補助する者」なども可。

本文解説

◆唐代の政治に関する問答の記録

リード文にあるように、唐の太宗が語った言葉である。前半では晋の武帝に仕えた何曾の言行が紹介される。武帝はぜいたくをして政治に心を留めなくなっていた。何曾は朝廷を退いてから、息子の劬には「皇帝には将来への展望がない(ので、国

は乱れるだろう)。(ただ) おまえの身は難を逃れることができるだろう」、孫たちには「必ず乱に遭って死ぬだろう」と述べる。果たして孫は刑死する。そのことを先見の明があるとして前代の歴史書が賛美したというのである。後半では、この評価に対して唐の太宗は反対し、何曾の不忠の罪は大きいと述べる。何曾はどうすべきだったのか。何曾のような補佐役はいらない、という言葉で太宗が言いたかった

ことは何か。太宗の考えをたどっていくことで正解に近づけるだろう。

考察

■問1 (現代語訳)

b 傍線部は、何曾の予言が的中したエピソードの後に書かれた部分で、さらに「以て先見二明カナリト為ス(＝そして先見の明があるとした)」と続く。そういう判断は歴史書でなされると考えて、「前史」は「**前代の歴史書**」と訳す。また、「先見の明」と誉めている場面であり、かつ「美<sup>レ</sup>之」と下から返ってくるので、「美」は「**賛美する**」と動詞で訳す。「之」は賛美の対象の「**何曾**」である。

c 語順から「直」が述語、「辞」は目的語である。そして傍線部は、唐の太宗の意見の中で、「何曾は高位の官職にあり、臣下として誠を尽くし君主の過ちを補い正すべきだった」という内容に続く箇所。さらにこの後「正諫(＝正しく諫める)」という内容に続くので、「直」は「**率直にする**」、「辞」は「**言葉を**」と訳せばよい。「諫」は、「目上の人に忠告する」ことである。

d 語順から「佐」が述語、「時」は目的語である。この前後では皇帝に対して臣下の行うべき振る舞いについて述べているので、「佐」は「**補佐する**」と訳す。臣下が補佐するのは「**時の皇帝**」である。

※漢文の語順は英語と似ており、主語＋述語＋目的語(補語)が基本の形である。したがって、この問1のように、b「美<sup>レ</sup>之」、c「直<sup>レ</sup>辞」、d「佐<sup>レ</sup>時」であれば、上の文字「美・直・佐」が述語、下の文字「之・辞・時」が目的語(補語)である可能性が高いので、まずはそれで解釈してみるとよい。

問2 (現代語訳)

「爾」の指す対象は何曾が話しかけている相手、つまり「息子の劬」である。そして「猶」は「まだ」、「可」は「〜できる」の意味なので、直訳は「**おまえの身はまだ逃れることができる**」となる。このあと、孫たちに対しては「此等必ず乱ニ遇ヒテ死セン(＝この者たちは必ず乱に遭って死ぬだろう)」と述べており、

劬が逃れることができるのは「乱」などからだとわかるので、それを補って訳を完成させる。

■問3 (文意の理解)

「後言」は「**陰口**」のこと。この傍線部eを含む一文「今乃チ退キテハ後言有リ、進ミテハ廷諍無シ」は、「今はそこで退いては陰口を言い、進んでは朝廷で強く意見を言うことがない」と訳せる。この一文は**何曾の言動**に関して述べている場面なので、前半で、何曾が朝廷を退いてからの発言の中から「**陰口**」に当たる箇所を探す。2行目の「経国ノ遠図ヲ論ゼズ、但タ平生ノ常語ヲ説ク。此厥ノ子孫ニ貽ス者ニ非ザルなり(＝国を治める遠大なばかりごとを論じないで、ただ日頃の普通の話をするだけだった。これは子孫に(国を治める遠大なばかりごとを)残す者ではない)」がそれにあたる。この**何曾の発言**を簡潔にまとめると「**武帝は国の将来を考えていないので、晋の治政は続かないと批判した**」内容の陰口といえる。

◎問4 (文章全体の理解)

〔注〕を参考にして傍線部fを訳すと、「**倒れて(それなのに) 助けなければ、どうしてその補助する者を用いるだろうか、いや用いない**」である(安クンヅンヤ)は反語の形。この発言で唐の太宗は何を言おうとしているのか、次のように整理した。太宗は自分の意見を裏付けるために何曾を具体例として挙げているので、何曾の言動にあてはめて考えてみよう。

① 「倒れて」について

問3で見たように、何曾は武帝の言動から晋の治政は続かないと考えている。とすれば将来**倒れる(危機を迎えている)のは国(晋朝)**である。

② 「助けなければ」について

問1cで触れたように、何曾は高位の官職にあり、君主の過ちを正すべき存在であった。しかし、実際には何曾は陰口を言うだけで皇帝に強く意見を

言うことはなかった(問3)。つまり、何曾は国の危機であるのに皇帝を諫めて国を助けなかったことになる。

③「どうしてその補助する者を用いるだろうか、いや用いない」について問1・dにもあったように、何曾は皇帝を補佐(補助すべきであった。しかしそれをしなかった何曾を、太宗は「用いない」と述べたのである。

①②③を用いて、傍線部fを解釈すると、「国の危機であるのに、皇帝を諫めて国を助けなかった何曾のような補佐役は必要ない」ということになる。太宗は何曾を例にして臣下のあり方を一般化して述べようとしていると考えて、「何曾」の部分省いて解答とする。

書き下し文

朕聞く晋の武帝呉を平けしより已後、務め驕奢に在り、復た心を治政に留めず。何曾朝より退き、其の子劭に謂ひて曰はく、「吾主上に見ゆる毎に、経国の遠図を論ぜず、但だ平生の常語を説く。此厥の子孫に貽する者に非ざるなり。爾の身猶ほ以て免るべし。」と。諸孫を指さして曰はく、「此等必ず乱に遇ひて死せん。」と。孫の綏に及び、果して淫刑の戮す所となる。前史之を美とし、以て先見に明かなりと為す。

朕が意は然らず。謂らく曾の不忠は、其の罪大なり。夫れ人臣と為りては、当に進みては誠を竭くさんことを思ひ、退きては過ちを補はんことを思ひ、其の美を将順し、其の悪を匡救すべし。共に治を為す所以なり。曾位台司を極め、名器崇重なり。当に辞を直くして正諫し、道を論じて時を佐くべし。今乃ち退きては後言有り、進みては廷諍無し。以て明智と為すは、亦た謬りならずや。顧れて扶けずんば、安くんぞ彼の相を用ゐんや。

現代語訳

私は聞いている、晋の武帝は呉を平定してから以後、つとめておこつてぜいたくをすることがあり、二度とは政治に心を留めなかった。何曾は朝廷から退き、彼の子劭に告げて言った、「私が主上にお目にかかるごとに、国を治める遠大なばかりごとを論じないで、ただ日頃の普通の話をするだけだった。これは子孫に（国を治める遠大なばかりごとを）残す者ではない。おまえの身はまだ難を逃れることができるだろう」と。孫たちを指さし

て言った、「この者たちは必ず乱に遭つて死ぬだろう」と。孫の綏（の時）に及んで、はたして不当な刑罰で殺された。前代の歴史書は彼を賛美し、そして先見の明があった。私の意見はそうではない。思うに（何）曾の不忠は、その罪が大きい。そもそも人臣となったなら、（君主の前に）進んでは誠を尽くそうと思い、退いては（君主の）過ちを補うことを思い、その（君主の）美徳を助け従い、その（君主の）悪を正し救うべきである。（これこそ）共に治をなす方法である。（何）曾は（その）位は台司（という最高位の官職）を極め、その爵位と爵位にあさわしい車や衣服で（その姿は）崇高で重々しい。当然言葉（門1）を率直にして諫め正し、（政治の）道を論じて時の皇帝を補佐すべきである。（なのに）今はそこで退いては陰で悪口を言い、進んでは朝廷で強く意見を言うことがない。それを（歴史書が）知恵がすぐれているとするのは、なんと過ちではないだろうか。倒れて（それなのに）助けなければ、どうしてその補助する者を用いるだろうか、いや用いない。

作品（作者）解説

『貞観政要』は、唐の二代目皇帝太宗（李世民、五九八～六四九）と太宗を補佐した賢臣との、政治に関する問答を記録したもの。太宗の治政である貞観年間（は、名君と呼ばれた太宗の下に賢臣が集い、よく仕えて、後の時代に「貞観の治」といわれる太平の世を実現した。中国で歴代王朝の皇帝が愛読しただけでなく、日本でも政治における必読書として読まれ続けた。

入試情報・解答時間

国語150分 大問4問（論理・古文・漢文・文学（随））



27 「顔氏家訓」

「顔氏家訓」 九州大学 文学部 (前期)

解答と採点基準

- 問1 ①＝(ア) ②＝(エ)
- 問2 ④＝もとより ⑤＝いいよい ⑥＝つまざる(あかざる)
- 問3 (1)＝須<sup>A</sup>早<sup>B</sup>教、勿<sup>C</sup>失<sup>D</sup>機也。
- (2)＝幼少期から学問を教え、学びの時機を失わないようにする必要がある。
- 問4 盛年を失ふも、猶ほ当に晩学すべく、自ら棄つべからず。
- 問5 学者として大成した人々は皆、若い頃には迷いがあつたが、晩年になつて目が覚めたように学問に励んだのである。

それぞれ同内容可。再読文字「須ラクベシ」(＝)する必要がある、くしなければならぬ」の訳ができていないものは全体0。  
A＝4／B＝6

- 問6 集力のある幼少期の学びが重要だ。とはいえ、学びの時機は問われない。不遇にして学びに専念できないこともあるが、学びの時機を逸しても自ら学び続ける姿勢が大切だ。(79字)
- それぞれ同内容可。  
A＝3／B＝2／C＝2  
D＝3 「学びの時機」は「幼少期」「若い頃」なども可。「学びからかけ離れた姿勢」の説明になっているものは減点2。」
- 問7 (エ) (キ) (ク)

本文解説

南北朝時代の家訓の書

著者の経験によれば、幼少期は集中力に優れ記憶したものをなかなか忘れないのに対し、二十歳を過ぎるとせっかく学んでも一カ月も放置すれば忘れてしまう、とのことだ。それでは、幼少期に学ぶことができなかった場合は、もはや手遅れなのだろうか？ いや……という展開である。著者は孔子のほか多くの学者の例を引き、学びの姿勢について説明していく。幼少期の学びが重要だという説明のほか、著者が例をあげてどのように学びの姿勢を説明しているかを読み取ることで、問6のポイントも余さず解答できる。

考察

問1 (意味)

傍線部①を含む「人生小幼、精神専利」と、傍線部②を含む「長成已後、思慮散逸」とが対比になっていることに注意しよう。「人生小幼、精神専利」は「人は生まれてまだ幼少の頃は、精神にとっても集中力がある」と解釈できる。また「長成已後、思慮散逸」は「成長してからは、ついほかのことを考えやすくなる」と

解釈できる。

問2 (読み)

- ④＝「もとヨリ」と読み、「本来」「言うまでもなく」という意を示す。
- ⑤＝「いよいよ」と読む。「いよいよ」と読む字には「弥」のほか「愈」がある。
- ⑥＝「倦」は「うム」「あく」と読み「疲れる」「飽きる」「投げ出す」という意を示す。ここでは「不(ず)」に続くように未然形で「うマ」「あカ」と読み、さらに「不」は「也(なり)」に続くように連体形で「ざル」と読む。

問3 (返り点・解釈)

- (1)＝設問の指示に沿って返り点をつけていく。「機ヲ失フコトナ(＝勿)カル」とあるので「失」「勿」にそれぞれレ点をつける。さらに再読文字「須(すべからくベシ)」に適切に返ることができるように「勿」のレ点に一を加えてレ点とし、「須」には二点をつける。
- (2)＝「人生小幼、精神専利(＝人は生まれてまだ幼少の頃は、精神にとっても集中力がある)」と「長成已後、思慮散逸(＝成長してからは、ついほかのことを考えやすくなる)」とを踏まえると、「早く教ヘテ」は「幼少期から学問を教え」と解釈できる。再読文字「須(すべからくベシ)」は「くする必要がある」「くしなければならぬ」という意を示す。「機」は「時機(タイミングの意)」でよい。したがって「幼少期から学問を教え、学びの時機を失わないようにする必要がある」と解答できる。

問4 (書き下し文)

返り点に沿って文意を踏まえながら送り仮名を付していく。「於」は置き字なので「盛年(最もよい時期)」が動詞「失フ」に続くように「盛年ヲ」と送る。「猶ホ」はここでは再読文字ではなく、「尚ホ」と同じく「やはり」「まだ」という意の副詞である。「当(まさニベシ)」は再読文字である。まず「晩学」に「ス」を送ってサ変動詞とする。「ベシ」に接続するので終止形でよい。これで

問5 (文意の理解)

傍線部⑤は、曾子・荀卿・公孫弘・朱雲・皇甫謐の五人についてまとめた一文である。4行目末の「曾子ハ」の手前に述べられている孔子・魏武・袁遺の三人についてのまとめである「此レ皆少クシテ学ビ老ニ至リテ倦マザルナリ」と比べて解釈すると「並ビテ」は「皆」と同意、「少クシテ学ビ」に対し「早くニ迷ヒタル」、「老ニ至リテ倦マザル」は「晩クニ寤メタル」に相当するということがわかりやすい。

孔子・魏武・袁遺の三人が「皆若い頃から学び、年を取ってからでも投げ出さなかった」のに対し、曾子・荀卿・公孫弘・朱雲・皇甫謐の五人は「そろって若い頃は迷いがあつたが、晩年になって目が覚めた」のである。指示語「此レ」の示す内容は「曾子・荀卿・公孫弘・朱雲・皇甫謐の五人」となるが、解答欄の大きさに沿って「学者として大成した人々」のように工夫するとよい。

問6 (文章全体の理解)

設問に「この文章全体を通して、学びとはいかにあるべきだと考えられているか」とある。この条件に沿って文章全体の構成を確認すると、次の表のようになる。

	本文中の 該当箇所	ポイント	本文中に示された具体例
I	人生小幼：至荒蕪矣。	集中力がある幼少期の学びが重要だ。	七歳の時の記憶は忘れないが、二十歳をこえると覚えても一カ月で忘れる。
II	然人有坎墮：晩寤也。	とはいえ、学びの時機は問われない。不遇にして学びに専念できないこともある。	若くして学び、老いても学んだ。 （孔子・魏武・袁遺） 若い頃は迷いがあったが、時機が来て目が覚めた。 （曾子・荀卿・公孫弘・朱雲・皇甫謐）
III	世人婚冠：無見者也。	年を取った、と言って学ばないのが最も愚かだ。	幼少期の学びは日の出の光のように勢いがある。 老いてからの学びは灯りを手に持つて夜道を行くようなものだ。 それでも目をつむり何も見ることがない（＝学ばない）者よりは勝る。

表中Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのポイントをつなげると「Ⅰ…集中力のある幼少期の学びが重要だ。Ⅱ…とはいえ、学びの時期は問われない。不遇にして学びに専念できないこともあるが、Ⅲ…年を取った、と言って学ばないのが最も愚かだ」と解答できる。これでも得点できると考えられるが、設問の指示は「学びとはいかにあるべきだと考えられているか」である。Ⅲのポイントが「学びから最もかけ離れた姿勢」の説明になってしまふとまったくいいない。「理想的な学びの姿勢を意識して」学びの時機（幼少期）を逸しても自ら学び続ける姿勢が大切だ」といったように書き換えると、さらに高得点が望める。

### 問7（文学史）

儒教の經典として「四書五経」を覚えておこう。四書は『論語』『孟子』『大学』『中庸』、五経は『詩経』『書経』『易経』『礼記』『春秋』である。

また四十歳で、初めて『易』『論語』を学び、皇甫謐は二十歳で、初めて『孝経』『論語』（の講義）を受けて、皆ついに立派な儒家となった。曾子や荀卿、公孫弘、朱雲、皇甫謐はそろって若い頃は迷いがあったが（その人の）晩年になって目が覚めた（ように学問に励んだ）のである。

世間の人々は結婚・成人の時期になってまだ学んでいなければ、年を取ったと言って、壁のほうを向き勉学を怠り、さらに愚かになるだけである。幼少の頃から学ぶ者は、日の出の光のごとく学ぶことができるし、年を取ってから学ぶ者は、灯りを手に持つて夜（道）を行くようなものだ。それでも目をつむり（何も）見ることがない者よりは勝っているのだ。

### 作品（作者）解説

南北朝時代の学者顔之推が、子孫への戒めとして記した家訓で、二巻二十編からなる。宗教、学問、文学、言語、風俗、社会、経済にいたるさまざまな事柄について、貴族として必要な処世訓が、興亡の激しい六朝末期に、梁・北斉・北周・隋の四代の王朝に仕えながら身をまっとうした著者の体験に基づいて、きわめて具体的に述べられている。唐宋時代には特に愛読されたようで、「家訓」といえばほかでもなく『顔氏家訓』を指すほどであったということは『旧唐書』や『郡齋讀書志』の記載を見てもわかる。

### 入試情報・解答時間

国語120分 大問4問（論理・古文・古文・漢文）

### 書き下し文

人生ひとづまれて小幼せうこうなるときは、精神せいじん専利せんりなるも、長成ちやうせいして已後いごは、思慮しりょ散逸さんいつし、固かたより須すらく早く教をへて、機きを失ふこと勿なかるべきなり。吾七歳われななさいの時、「靈光殿れいこうてんの賦」を誦よみじ、今日こんにちに至るまで、十年じゅうねんに一たび理ことむるも、猶なほは遺忘いぼうせず。二十にじゅうの外と、誦よみずる所の経書けいしょは、一月ひとつき廢置はいちすれば、便すなはち荒蕪かうに至る。然れども人に坎墮かんた有り、盛年せいねんを失ふも、猶なほは当あたに晩学ばんがくすべく、自ら棄すつべからず。孔子こうし云ふ、「五十ごにして以て『易』を学まなべは、以て大過たいた無なかるべし。」と。魏武うゐ・袁遺えんは、老おいて弥いよ篤あつし、此これ皆みなくして学まなび老おいに至りて倦うまざるなり。曾子そうしは七十しちじゅうにして乃すなはち学まなび、名は天下てんかに聞きここゆ。荀卿じゆんけいは五十ごにして、始めて来たりて遊学ゆうがくし、猶なほは碩儒せきじゆと為る。公孫弘こうそんかうは四十しじゅうにして、方に「春秋」を読み、此を以て遂に丞相じやうしやうに登る。朱雲しゆんも亦た四十しじゅうにして、始めて『易』『論語』を学まなび、皇甫謐ほうぼうは二十にじゅうにして、始めて「孝経」『論語』を受け、皆終みなに大儒たいじゆと成る。此れ並びて早くに迷ひたるも晩おそくに寤めめたるなり。

世人は婚冠こんくわんして未だ学まなばざれば、便ちち遲暮ちよぼと称しょうし、因循いんじゆん面牆めんかうして、亦た愚おろと為るのみ。幼くして学まなぶ者は、日の出の光のごとく、老いて学まなぶ者は、燭しやくを秉りて夜よに行くがごとし。猶なほは瞶目めいもくして見る無なき者に賢さかれるなり。

### 現代語訳

人は生まれてまだ幼少の頃は、精神にとても集中力があるが、成長してからは、ついほかのことを考えやすくなり、本来幼少期から（学問を）教え、（学びの）時機を失わないようにする必要がある。私は七歳の時に、「靈光殿の賦」を暗誦し、今日に至るまで、十年に一回おさらいするが、まだ忘れてはいない。二十歳をこえてから、暗誦した経書については、一カ月放置すると、すぐに荒れ果てた野原のように空っぽに忘れ去ってしまう。ところが人には志を得ず不遇な時期があり、最も（頭の働きが）良い時期を逸したとしても、やはり遅くからでも学ばなくてはならず、自分から（学びを）捨て去ってはいけない。孔子は言った、「五十歳で『易経』を学べば、（それで）大きな過ちはなくなるだろう」と。魏武・袁遺は、年を取つていいよ（学問に）打ち込んだが、孔子や魏武・袁遺（の学びの姿勢）は皆若い頃から学び（その後）年を取ってからも投げ出さなかったものである。曾子は七十歳になって（その年で）学び、名声は天下に聞こえている。荀卿は五十歳で、初めて（諸国を来訪して）遊学し、やはり碩儒となった。公孫弘は四十歳をこえた頃に、ちょうど「春秋」を読み、「春秋」を読んだことについて丞相（の位）に就いた。朱雲も

4	3	P.	2	1	P.
3	5	23	1	(A) .. 5	11
				(B) .. 1	
8	7	P.	6	5	P.
A .. 2	(A) .. 2	49	4	3	43
B .. 5	(B) .. 8				

入試雑感

本年度の入試問題について、たくさんの方に問題に直接触れている編集委員が率直な感想を述べます。  
(太字の出典は、本問題集に採録)

古文

今年も例年と同様、読み取りに苦労する難解な本文の出題は少なく、平易な文章を出題し基本的な読み取りの力を測るという姿勢が継続している。ただその分解答を作るために「本文の該当箇所を要約する力」や、「わかりやすい表現に置き換える語彙力」など、総合的な記述力が試されることになり、その意味では現代文の解答作成に要するのと同じ力が要求されているのだといえる。端的な例は大阪大**5**『秋香歌かたり』である。現代語訳は一周のみで、後の四問はすべて説明問題。さらにそのうちの三問で「助詞を入れ替えた場合の意味の変化」について、本文の内容を咀嚼してわかりやすく答えることが要求された。古文に読み慣れ、記述力もある編集委員からすると、解答が作りやすい(出題の狙いがわかりやすい)問題なのだが、実際に受験した生徒たちからは、「撃沈しました」「来年頑張ります」などの感想を多く聞いた。東京大**14**『沙石集』、佐賀大**16**『狭衣物語』、名古屋大**18**『怪世談』なども、まとめる力が問われる出題であった。「**い**もあ**り**な**い**」「言**わ**ずも**が**な」「聞**こ**え**よ**がし」「**こ**れ見**よ**がし」「……**こ**のよ**う**な言**葉**は現代でも使**わ**れるが、意味を把握して別の表現にできるだろうか。それ**ぞ**れ、古**文**学習で必須の付属語が使**わ**れているのだが、わ**か**ったらうか。極論すれば、難関大学が受験生に求**め**ているのは、こ**う**した現代語に近い古**文**を文法知識や語彙力を使**っ**てわかりやすく**い**い換**え**、説明する力なのだ。語彙力について付け加**え**ると、デジタルネイティブであり、核家族化の中、個人主義化の行き着いた時代を生**き**る高校生は、世代や価値観が異なる人、特に「大人」の話を聞く機会が極めて少ない。日常会話の相手はほぼ家族が同世代の友人に限られ、それも直**に**ではなく、「LINE」などの短文のやりとりで済**ま**す時代である。自分と同レベルの語彙の持ち主と会話するだけでは、語彙が増えるはずもない。ではどうすればよ**い**か。時と場所を選**ば**ずにできる、最も手軽な打開策は読書である。双方向の会話はできずとも、「大人の話を聞く(正確には【読む】だが)」機会は得られる。入試対策に限らず、読書によって語彙の幅を広**げ**てい**っ**てほしい。

漢文

本文の分量は一部の大学を除き、一ページ程度に収まっている。内容の易化はここ数年に比べ落ち着きをみせた。出題の仕方など、各大学の傾向も大きい変化はない。

出題については、句法・用法を手がかりに考える問題が増えた。出題箇所になくても、解答には句法の知識が求められる場合も多い。再読文字は必ず覚えておくこと。反語や使役だけでなく、受身、仮定、限定、比較、選択、比況、抑揚など幅広く出題されていて、書き下しや現代語訳とともに読み「**豈へあに**」「**如へもし・ことし**」「**況へいわんや**」など、もよく問われている。ほかに読みは定番のもの「**自**」「**所以**」「**於是**」「**惟**」などが頻出している。ただ、難関大には句法に頼らず文脈から考える問題もあり、漢文を読みながらおく必要がある。

解答の記述量は、名古屋大で一五〇字の記述があり、ほかに七〇〜八〇字前後で記述させる大学も多く、まとめる力が試される。また、傍線部の説明を求める問題であっても本文全体を踏まえて書くべき場合もあり、どこまでをまとめるのかを判断する必要があるだろう。対句的な表現にも注目すること。もちろん、本文だけでなくリード文や注は解答のヒントになるので必ず読み、理解の助けとしたい。特に中国独特の文化が関わる問題は、リード文や注をしっかり読む必要がある。

ジャンルについて、随筆・評論にあたるものは、『**顔氏家訓**』(27九州大・佐賀大)や『**夢溪筆談**』(25名古屋大)、『**水心文集**』(東北大)などが出題された。日本漢文は『**鉄轡**』(広島大)、『**先哲叢談**』(鹿児島大)などが出されている。諸子百家など「思想」にあたる文章は『**荀子**』(大阪公立大)など複数出題されたが、岩手大では『**論語**』の注釈書を複数並べて考えさせる問題が出た。詩の問題は新潟大・金沢大で出されたが、今年も出題は少なかった。ただ、押韻や対句など詩の基本事項は解釈のヒントともなるので確認しておくこと。「歴史」は『**漢書**』(21岡山)から出題されたが、私立大も含め今年は特に少なかった。逸話を集めた『**蒙求**』(神戸大・香川大)も出されている。説話的文章で『**聊齋志異**』(22北海道大)や『**百喻經**』(19大阪大)などが出題され、言行録では『**貞観政要**』(26東京大・岐阜大)が出題されたが、人生訓や学問の大切さなどを説くものが多かった。ほかのジャンルにおいても、物語的要素が乏しいことが今年の傾向であった。



●古文・漢文●設問形態別一覽表

- ▽この表は、本書収録の「古文・漢文」すべての設問を形態別に一覧したものである。
- ▽この表を自己の弱点の発見や補強のために利用してほしい。
- ▽設問の分類はより比重が大きいものを優先し、複数の要素を含む設問は「4と(4)」のように二カ所に示した。
- ▽「内容探究」の二つの分類は、次のようにした。
- ・文意の理解——文の意味・解釈ができれば解ける問い。本文の重点部分に関する問い。
- ・文章全体の理解——要旨・主題の理解がなければ解けない問い。本文の全体に関する問い。

古 典 古 文														
文学史・その他	探究 文章全体の理解	内容 文意の理解	動作の主体・会話文	空所補充・文脈把握	指示 内 容	解釈・現代語訳	修 辞 技 巧	敬 語	文 法	古 語		設問形態 問題番号		
										意 味	読 み			
	3					1・2・4						1		
	5	2・4				3			1			2		
	7	3・4				6・8・1・2・5						3		
3	7	2・5				4・6			1			4		
	5	2・3・4				1						5		
		2・4・5				1・3						6		
	4	2・3				1						7		
	4	2・3				1						8		
5	4	2・3				1						9		
	6	4・5	1			3	2					10		
		4		3		2・5			1			11		
	7	4・6	3	5		1			2			12		
3	7	4・2・6		5		4-1			1	2		13		
	5	3・4				1・2・(4)						14		
5	3	2				1			4			15		
	3-2	4・5・6	1・(3-1)			2-2・3-1	(4)		2-1			16		
		3・4				1・2	5					17		
		2・4				3			1			18		

古 典 漢 文														
歴史的 背景・文学史	探究	内容		指示内容・主語・会話文	空所補充・文脈把握	解釈・現代語訳	漢詩のきまり・対句	書き下し文	基本句法	送り仮名・返り点	漢語（熟語）		設問形態	
		文章全体の理解	文意の理解								意味	読み		問題番号
	5	4				1・2		3						19
	5	4				2・3		1・(2)		(3)				20
	5	3				2		4					1	21
	4					3		2					1	22
		3・4				2・(3)			(2)				1	23
	6	5			(2)	3	2	4	(4)				1	24
	6	2・5				4・(2)・(5)・(3)・		3					1	25
	4	3				1・2								26
7	6	5				3-2		4		3-1	1	2		27